角川文庫

—1234—

雪に生きる

上巻

猪谷六合雄

雪に生きる 上巻

猪谷六合雄

角川文庫

153 -1-

雪に生きる

上巻

猪谷六合雄

角川文庫

1234

自序

私は先日、徳川義親氏の「きのふの夢」という随筆集を、大変面白く読んだ。私のこの貧しい生活記録も亦、私にとって、きのうの夢であるかも知れない。これを今時局下に振返ってみると、我ながらその生活目標が、悠長且つ不徹底であったように思えるが。併しその時々に一つ一つの事柄に対しては、全く、工夫と精進の生活であったとも思える。

私達は多くの場合、僅かな時間の無駄も惜しんでよく働いた。それはスキーばかりでなく、大工をしても、編物をしても、畑を作っても、殆どいつも全人格的な情熱を打込んで精進を続けて来たと思う。

無論、その間には、多くの油断も、隙間もあったに違いない。しかし、今は重大時局である。私達はただ徒に過去を歎くのを止めて、一切の力を国に捧げなければならない。私達にはまでは今の私達に何が出来るだろう。どうせ、碌なことは出来ないかも知れないが、私達にはまだ多少の情熱がある。採るに足る程のものでなくとも、未だ、工夫と精進を続けて行く力は残っている筈だ。

これを何処へ集中したら、一番役に立ち得るか。

の努力をもって、新しく発足したいと念願した。

しかし、貧しい智慧を絞ってみても、それは中々やさしいことではなかった。だが、色々と思案した挙句、腰の浮かない自らの足元を掘るに如かず、と、気が附いて、ようやく、一先ず結論に到達した。私自身としては、その結論に信念を持っているつもりだが、万一間違っていたらどうしよう。

その時は、私達の使い残した唯一の財産、工夫と精進する生活を持って何処へでも出て行こう。

昭和十八年十月

猪谷六合雄

目次

第二篇　千島時代

第一篇　赤城山時代

一　スキー揺籃時代

スキーを作る　私がスキーというものを初めて知ったのは、今から凡そ三十年も前の或正月のことだった。それはレルヒ中佐が雪の高田で、日本最初のスキーをやり始めてからまだ間もない頃のことで、場所は私の生れ故郷、上州赤城山上だった。

何でも、気の早い一高あたりの学生が、何処かで手に入れたスキーを、早速赤城山へ担ぎ上げて来て、外輪山の中の平地を主として歩き廻っていたように思う。前橋道の粉雪の上に、広い二本のシュプールが鮮かに残っていたことを覚えている。

そこで私も早速真似をしてみようと思ったが、当時はまだ本格的のスキーや、靴を売ってる店など無論なかったので、仕方がないから家にあった一糎半くらいの厚さの栗の木の板を削って形だけ拵えてみた。しかし先端の反りを、どうして附けるのか判らないので、何でも水分と熱を与えたらいいだろうと思って、お風呂の中へ突込んだり、石油の空罐で茹でたりして、苦心惨憺のすえ兎も角もスキーらしいものを作った。でも、乗ってみると板が薄過ぎて真中から折れそうになるので、また同じ板を削って、中央だけ二枚重ねて釘附けにした。

バッケンは、太い針金とトタン板で作り、細引のビンディングで編上靴へ結わいつけ、手頃な物干竿を杖に突いて、颯爽と粉雪の山へ出掛けて行った。思えばこれが、私のスキーというものに病みつく第一歩であった。勿論、当時はまだワックス等のあろう筈もなく、蠟燭の蠟を塗るこ

とさえ知らなかったのだが、雪がよかったお蔭で滑走面に雪の着くようなこともなく、どうやら無事に歩くことは出来た。そして歩くだけでも大きな魅力だった。

それからは、珍しいので毎日毎日出歩いていたが、そのうちに、段々スキーが足に馴れて来ると、それまでは「輪かんじき」で埋まりながら重い足を一歩一歩運んでいた所を、割合楽に、スウスウと渡って行けるようになったものだから、すっかり有頂天になってしまった。今までは何となく出るのが億劫だった雪の山が、この時から急に楽園のような気がして来た。そのうちに、冬になってから毎日自分の部屋の窓から見上げてばかりいた山の尾根へも出てみられたり、一冬に一度か二度も行くかどうかわからなかった小沼あたりへも、粉雪の上へ二本のシュプールを附けながら、気軽に出かけられるようにもなった。こうなると、もう嬉しくって堪らなくなり、家へ帰るとビンディングを直したり、竿の先へ金具を取附けたり、また新しいスキーを作ってみたり、もう寝ても覚めてもスキーだった。

だが雪の山は、いつもそう安易な楽園ばかりではなく、屢々甚だ辛い楽園でもあった。斜面へかかって滑ろうとしてもスキーが悪かったせいか、緩い所では中々動き出そうともしないでいて、急な所へ来ると、いきなり滑り出すので、ものの一米も行かないうちに尻餅を突いてしまうようなこともあった。教わろうにも教えてくれる人はなく、読もうとしても本もなかった。今ならば二三時間か半日位で誰でも覚えられる程度の直滑降が、どうにか出来るようになったのは一カ月も経ってからのことだったと思う。それでも十二三度の斜面が、二三十米も転ばないで滑れるようになるとその味が忘れられず、痛い思いをしながら夢中になって練習した。

そのうちに、何時の間にか、キックターンらしい向の換え方も覚え、ジッグザグに登るコースの

採り方の見当もついて来たので、段々遠出して山へも行けるようになった。しかし山には木が沢山あるから、どうしても滑りながら曲らなければならない必要に迫られることが多かったのに、スキーは、ちっともいうことをきかないで、何としても曲ってくれなかった。今思えばゾンメルシーに毛の生えた位の短い軽いスキーだったのだが、全く手におえないもののような気がした。強いて曲ろうと思えば必ず倒れ、頑張って行けば、きまって立木に抱き附いた。そのようにして最初の一シーズンは、さんざん苦労をしたが、結局滑走しながら方向を変えることは不可能に近いことかと、半ば諦めたかたちだった。

　やがて追々と春が近づいてくると雪の質が変って来て、朝登る時はまだよかったのが、下る頃には温度が上ってきて、ワックスを塗らないスキーの裏には遠慮なく雪がくっ附き、滑ることはおろか、歩くことさえ出来なくなってしまって、泣き出したいような思いも屡々経験した。思えば憐れな、しかし懐かしい最初の一シーズンであった。

スキーの実用化　大いに意気込んでいたのだったが、その次のシーズンからは、召集されたり、暖かい地方へ絵を描きに出掛けたりして、赤城山にいる時間が短かったものだから、最初の年ほど熱心には滑らなくなった。しかし何といっても、輪かんじきより軽快で気持がよかったので、赤城山へ帰る度に実用的にも使うようになった。

　やがて暫くすると、前の年にはどうしても出来なかったものが、誰に訊くということもなしに、怪しげながら制動することも覚え、ボーゲン系統の曲り方もいくらか出来るようになった。そのうちに少し位なら荷物を背負っても滑れるようになったので、家にいた男達にも稽古させて、兎も角も実用時代に入った。とはいうものの、まだ歩き方が拙いので荷物が少し重いと甚だ辛かっ

た。輪かんじき組を追い越して得意になって歩いている中に、一度尻餅でも突くと大騒ぎだった。重い荷を背負ったままでは起き上れないし、立ってからでは背負うことが出来ないし、兜を脱いで輪かんじき組に起して貰うようなこともあった。こんな時、輪かんじき組のニヤニヤ笑う顔が癪だったが、何とも仕様がなかった。

その後、北海道へ兵隊に行っていた友人から、初めてリリエンフェルトの附いている本式のスキーを貰ったので、大いに感激して前のスプリングをがちゃつかせながら得意になって滑り廻っていたこともあった。

それから何年か経った年の春早くのことだったが、東京辺の中学生が二人前橋道を登って来て、外輪山の中まで入ってから濃霧のために雪の道を踏み迷い、ついに行方不明になってしまったことがあった。村中でその捜索に出て行った時、輪かんじき組よりもスキー部隊の方が遙かに行動軽快で、大いに活躍して山の人達を感心させたことがあった。

この頃になるとスキーでよく夕方の散歩にも出るようになった。日の落ちてしまった後の山の尾根から、灰色に暮れて行く雑木林の谷の間を見下しながら、ゆったりと足を運ぶ自分自身の姿を、巨人の歩みのようだなどと思ったこともあった。

日本最初のスキークラブ　それから数年の後、多分大正七年頃のことだったと思う、東京駅のツーリスト・ビュウローの二階にスキーの展覧会があるというので、わざわざ見に行ったことがあった。数はそんなに沢山もなかったようだったが、何でもスイス辺りから持って帰ったという途方もない長いスキーが片方だけ立掛けてあって、脇に、その片方は何処とかの山へ登った時岩に打突けて折ってしまった、というような説明が附いていたと思う。そのほか、まだ見たこともな

いような綺麗なスキーが、ずらっと並べてあったので、それを見るだけでも楽しい気がして私は何度も見に行った。あんまり度々通ったので、とうとう係の人と懇意になってしまって、展覧会が終ってから、六七人の仲間が集まってスキー倶楽部を作ろうということになった時、私もその末席に加えて貰った。その時のメンバーが誰々であったかは、もうあらまし忘れてしまったが、後にスキー連盟の会長をしておられた稲田さんが、当時まだ北大の学生だったか、それとも卒業されたばかり位だったか、真黒な顔をして元気一杯に話していたのを覚えている。

その時の会の名は、たしか「東京スキー倶楽部」だったと思う。T・S・Cを図案化して、バッジを作ろうという相談まで話が進んだので、山出しの私は、ただもうびっくりして聴いていた。おそらくこれが日本最初のスキー倶楽部だったことと思うが、その後私がジャワ辺りへ渡って行って、凡そスキーとは縁のない常夏の海で、さんざん暴れ廻って帰って来た頃は、もう解散していたようだった。

スキー復活　南洋から帰るとまた赤城山の生活が始まったので、再び私のスキーも復活した。しかしこんどは以前のように一人ぼっちではなく、画家のMさんや、そのほか何人かの滑り友達も出来てきた。

この頃はもう、「初歩のスキー術」というような本も出版されていたので、私達はそれを買って来ては、みんなして炉傍へ集まって読んだものだ。しかし滑降中の廻転法等の段になると、いくら読んでも中々理解が出来なかった。雪の上へ出て自己流でやれば、まだどうにか曲れるのに、本に書いてある様にしようとすると、殆どみんな顛倒した。読む方の頭も悪かったかも知れないが、説明の方も相当怪し気なものが多かった。或る本などは、著者自身余り滑れないらしい

人が、向うの本を翻訳して出しているのなどもあった。それがまたひどく生硬な直訳振で、読めば読む程解らなくなるようなのもあった。

その頃私達の間で、一時流行言葉にまでなったので未だに覚えているが、例えば「もしも諸君が、滑走中に転倒することを欲しないならば」と云う調子で書いてあるので、どんないい秘訣でもあるのかと思って次を待っていると、「余り速い速力を出さないことである」という文句なのだった。一生懸命聴いていた連中が呆気にとられて、教えられてるのか、からかわれてるのか判らない気がして、互に顔を見合せているようなこともあった。

殊にクリスチャニヤの説明なんか、「その時、そこにある椅子にでも腰掛けるような心算で、腰を落す」とか、また「自分のスキーのテールにあるマークを、振り返る様にして見るといい」とかいう要領の教え方もあった。今なら「ハハア、あのことの説明をする心算だったな」と理解もつくが、当時の私達には、それ等の言葉は何としても不可解そのものとしか思えなかった。スキーを穿いて前の斜面へ出て、いくら一生懸命腰掛けてみても、テールのマークを振り返ってみても、中々そんなこと位でスキーは廻らなかったし、無理に頑張ってやろうとすれば確実に顚倒するだけだった。そしてその時の私達の結論は、クリスチャニヤやテレマークは到底我々の手の届く所にある地上のものではないということだった。

それでもみんな雪擦れだけは相当にして来て、山を歩き廻ることは段々達者になって来たし、写生に行くのにも、大きなキャンバスを持って器用な足取りで滑って行くようになった。

赤倉行　その後「あんまり赤城にばかりいるので出来ないのかも知れないから、一つ他所へも行って様子を見て来よう」という訳で、Mさんと二人で赤倉へ出かけて行った。

赤倉は、流石に早くから開けた有名なスキー地だっただけあって、宿の前の広いスロープには、スマートな恰好をしたスキーヤーが大勢集まって練習していた。見ていると、中にはテレマークをするものや、クリスチャニヤらしいものをしているのもあった。そこでこちらも早速斜面の端の方でコソコソ相談しながらそれを真似して終日猛練習をしてみたが、中々うまく行く筈もなかった。

それから次の朝はお天気もよかったので、勇敢にも前山から燕へ越すつもりで出掛けて行った。すると昨日ゲレンデで懇意になったテレマーク党の一人が、私達と一緒に行こうという。少くともこちらよりは大分うまそうだと思ったから、喜んで連れていって貰うことにした。私達がそう思っただけでなく事実うまいに違いなかったのだが、段々奥へ進んで行くに従って山の様子は険しくなり、斜面も急になって来て、深い谷底の所々には時々雪崩の跡が見えるようになった。そのうちに雪の割目の上に出てしまって、いやでもそれを越さなければならない様な所へ差しかかると、山に馴れないその人は急に怖気づいてしまって、テレマークどころではなく、ほんの簡単な斜滑降も出来なくなってしまった。

こちらは元々山男なので、下手は下手なりに、転んでも擦り落ちても何とかして我武者羅に進んで行くが、里のゲレンデだけに育った都会人には、スキーがうまくも身体に馬力がなく、その上山に呑まれてしまって精神的にも参って来たらしかった。手伝って上げようにも、こっちも既に怪しいのだから、先へ下りていて声援する位よりほか手の出しようもなかった。しかしこちらには、まだ燕から関へ出て、その晩の夜行で東京へ帰る予定があったので、気はせくのだが、一人だけ山の中へ残して、自分達が先へ行く訳にもいかず、気の毒でもあるし、時間のことが心配にもな

るし、閉口したことがあった。だが兎もあれこのスキー行の収穫は、色々の意味で大きかった。

二 スキー行脚

大鰐の大会 赤倉行で味をしめた私は、翌大正十三年の冬には、思い切って一人でスキー行脚に出掛けてみることにした。目的地は北海道から樺太へ、それから都合によってはカムチャッカへでも渡り兼ねないような意気込だった。

愛用のリリエンフェルト、ビンディングの附いた欅のスキーを担いで、飄然と赤城山を出たのは一月の中旬だった。途中五色温泉を振り出しに、一二ヵ所寄り道をしただけで青森まで行ったが、駅のポスターで大鰐にスキー大会があることを知り、わざわざ後戻りして見学に出かけた。何にしろ生れて初めて見るスキー大会なので何もかもただ珍しく、ひたすらに感激してその盛況を眺めていた。

何でも四キロ位上の山の方から、同時スタートの滑降レースがあったり、杖なしのテレマークの、それこそテレグラムばかりのスラロームがあったりして、最後にジャムプ競技が始まった。シャンツェは、会場の右手の小さいスロープにあったように思うが、台の端には赤地に白く、A・S・Cと鮮かにマークの入った幕を張り廻してあった。高さは一米余りもあったろうか、スタートの辺りには俵を積んでアップローチを長くしてあった。

そこを乗馬ズボンの選手達が、リリエンフェルトの附いたスキーで飛出してきて、ガチャンと

大きな音を立てて着陸すると、大概尻餅を突いてそのまま滑り落ちて来た。その中で元気のいいのは、エイッとばかり掛声諸共飛び出すのもあったし、気の早いのは台の上で尻餅を突いて横倒しに台から転がり落ちて来たのもあった。そして結局その日の優勝者が、何と九米何十糎かの最長不倒距離を出したというので、皆驚きの目を瞠っていたのだから、他は推して知るべしであるが、しかし今それを思うと、その後日本のスキージャムプが、よくも短時日の間に急速な進歩をしたものだと沁みじみ頼もしい気がする。

だが実をいうと、私もその日の大ジャムプには度胆を抜かれた組だったが、それでも何となく怖いもの見たさの魅力を感じ、せめてそのスロープの直滑降でもしてみたかったので、競技の済むのを持って係の人に「ここで滑ってもいいですか」と訊いてみたら、「ここは急で危いから、あっちの緩い方でお滑りなさい」といわれた。

北海道見学　大会が終るとすぐ引返して、青森から北海道へ渡り、小樽のスキー場を一渡り見学してから札幌へ出た。三角山辺りのスロープでは流石に滑っている人達のレベルが高く、クリスチャニヤのほかに、ジャムプストップの稽古をしてる人もあった。なお斜面の所々に女学生の姿等も大分雑って見えたので、成程雪の都は大したものだと感心した。しかしまた中にはマドロスパイプを喰えたまま大いに余裕を見せて、というより少々気障な恰好をしながら、得意然と同じ所でテレマークを繰返していた若い男もあったので、スキーの様なものでも段々発達して普及してくるとこの種の不純な気分も出て来るものかと、その時は一寸暗い気持にさせられた。

帰りには山の方を廻って、シルバーシャンツェの上に立ってみて、人間業でこんな所が飛べるものかと思って怖気をふるった。北海道へ渡ってからは、小樽でも札幌でも時々フィットフェル

トを見かけた。それにフィンランドあたりのレース用の細いスキーを穿いてるのもたまにはあった。

なおよくしたもので、この頃は見様見真似で、自分でもいくらかクリスチャニヤらしいものが出来かかって来た。矢張り旅へは出るものだとつくづく思った。

樺太へ渡る　札幌での見学も一通り済んだので、樺太へ渡るつもりで稚内へ出た。途中では吹雪のため案じられていた船の便にも際どい所で間に合った。時間がなかったので切符も買わずに艀へ飛び乗り、真暗な港の中を雪まじりの波に揺られて、やっと出発間際の連絡船に乗移った。

夜が明けると船の周囲は一面の流氷で、慣れない目には珍しかったが、それを縫って進む船足はのろかった。手摺りに寄りかかってじっと足下の海を見下していると、船縁を流れる氷の群が、何かの模様のように美しかった。

船は予定より大分遅れて大泊へ着いたが、結氷が堅くって岸へ近寄れず、遥か沖合の氷原に深く船体を突込んだまま止まってしまった。やがて客も荷物も氷の上に降された。見渡す限りの雪野原には、弱々しい冬の日差しが照ったり陰ったりしていたが、遠い水平線の彼方は暗かった。黒いマントを被った女の人や、大きな毛皮のチョッキを着た人達が一列に繋がって行く間に、米俵を積んだ橇を挽いて行く逞しい樺太犬の姿もまじっていた。岸に近づくと町外れの漁師の小屋が寒そうに雪の中へ埋まっていた。

豊原へ着いてからは不思議と気分が明るくなった。ゲレンデは町から少し遠かったが、雪もよく、追々と滑り友達も出来てきて、毎日愉快な練習をした。しまいには八十人もの一行に加わって旭岳へも登って見た。その頃はまだ全山一様の椴松林で、登る途中、森林の中の雪景色は目の

覚める程美しかった。それにお天気もよかったし、雪質もまことに申分なかった。ただ申分のあったのは降りの時のコースだった。いや、コースではない。コースを降る自分の技法の未熟さ加減だった。しかし有難いことには、未熟なのはあながち私だけではないようだった。見ていると景気よく雪煙りを立てるのは、殆どみんなスキーからではなくつて尻からだった。雪煙の沈んだあとには必ず大きな穴が出来た。登る時にはいいコースだと思っていたのに、帰りに見るとまるで穴の連続で、その穴に引っかかっては又その先へ穴があく。これでは原因になり結果になって限りがない。大勢のスキー登山には、いいところもあるが困ることもあるものだと、つくづく思った。しかし何といっても面白い山登りだった。

豊原の数日間は、誠に滞在の仕甲斐があったような気がした。旧市街で見た、ロシア人の作ったロッグキャビンの教会の建物等も珍しかったし、昔からこの辺の土人が使っていたという、裏一面にアザラシの皮の貼ってあるストーというものを見せて貰って感心したこともあった。このストーはあんまりよくスキーに似ているので、今のスキーとその源を一つにするのか、それとも別々に発達したものが、必要から偶然に似た形を備えて来たものか、つくづく見ていると不思議な気がしてならなかった。

交番と極楽　変な題だが、私は本当にこんな感じを経験したことがあった。少し間の抜けた話だが、あったままを書いておく。

多分二月の十一日、紀元節の日だったと思う。名残り惜しい豊原ではあったが、そう何時までもいる訳にいかなかったので、いい加減に切上げて、西海岸の真岡へ出てみようと思った。勿論まだ汽車の無かった頃で、途中四五百米の峠を三つばかり越えて、八十キロ程の道のりであると

きいた。しかし元気一杯の向う見ずの頃だったから、「なあに、八十キロ位朝少し早目に出れば、暗くなる時分には着けるだろう」と思って高を括っていた。

話は少し戻るが私が泊っていた宿屋に、親類から手伝いに来ているという若いおとなしい娘さんがいて、女中さん達にまじって立働いていたが、滞在中ずっと何故か私を大変親切にしてくれた。私も非常に有難いことに思って感謝していたが、愈々出発という朝、なんと思ったかそっと家を出て来て、多分三キロ位もあったと思う雪の中を、わざわざ追分という道の分れる所まで見送って来てくれた。私はその絶大な厚意に対し心からの御礼をいって、別れ際に写真を撮らせてもらった。火の見櫓の下の農家の傍に男物の黒いマントを着て立っているその人の写真が、今でもどこかにとってあると思うが、その時は万一何か御本人の迷惑になってはいけないと思って送るのを差控えておいた。

それから教えられた道を西北へ、墓地に滑って行くと、何にしろお天気はいいし、道は申分のない粉雪だし、それに今見送って来てくれた人の親切が無性に嬉しかったものとみえて、すっかりいい気持になり、四貫目に余る背中のリュックも何のその、長距離レースにでも出たような歩き方をして滑って行った。途中で材木を満載して山から下りて来る馬橇が、カーブの所で横滑りをしながら器用に曲って行くのを見ると、「アッ、馬橇がクリスチャニヤをして行ったな」などと思う。なにを見ても嬉しかった。まるで何か賞められた中学生みたいに、一人ではしゃぎながら、フウフウ息を切らして登って行った。この分で行ったら八十キロ位日のあるうちに着けそうな気がした。そして有頂天とは正にこんな時の気持をいうのだろうと思った。

だがその有頂天は、ものの二時間とは続かなかった。やがて道が追々と急な登りにかかってく

ると、踵の辺りが、へんに熱っぽくムズ痒いような感じがして来た。「しまった」と思ったがもう遅かった。日当りのいい道傍に休んで靴を脱いでみると、案の定、両足とも踵の上が少し赤くなり始まっていた。朝出掛けに、薄いからいいと思って新らしいスコッチの沓下を中に穿いてきたのがわるかったのだ。早速硼酸軟膏を塗って柔かい毛の沓下と穿き換えて見たが、そんなこと位では間に合わず、そっと靴を穿いて歩き出してみるともう微かに痛みさえ感じた。まだやっと十五六キロ位しか来ていないのだから、前途は遥遠だった。もう少し注意して落着いて歩いてくればよかったと、悔んでみても今更何とも仕様がない。別に急ぐ旅でもないからもう一度豊原へ帰り度くも思ったが、先刻あんなにしてまで壮図？を見送って貰った手前、肉刺が出来たからといって、おめおめ帰るのは耻ずかしい。「ままよ、何とかなる所まで行け」と思って歩き出した。

しかしもう、先刻までの張り切った元気は何処へやら、踵を庇いながら登る道は又意地悪く段段と急になって行く。気にならなかった背中のリュックも重くなってくる。俄かにみじめな姿になったものだと心細くなる。それでもまた、はるばる雪の道を見送って来てくれた人の激励の言葉？を思い出して、時々気が附いたようにから元気を出してみる。だがそれも長くは続かず、もうコンディション回復の望みは絶対になかった。段々悪化して行く足の手入れを繰返しては、のろのろと歩を運んで行くが、時間ばかり経って道はさっぱり捗らない。これから先は全くの難行苦行だった。昼前に越す筈だった春日峠へ着いた時はもう午後二時を過ぎていた。

やがて、日足の短い北国の空は、行程半ばにして暮れかかってきた。途中には何軒かの民家もあった。頼めば泊めてもくれたろうに、どうしても真岡まで行ってみたかった。もう若気の至りともいえない程のいい年輩なのに、我ながら悪い癖だと思いながら歩いた。しかし一つには、今

途中で泊ってしまえば、明日から二三日は歩けなくなることが判っていたからでもあった。
ついに日は、とっぷりと暮れてしまった。温度はみるみる下って行く。行先は勿論知らない道だ。それでも始めのうちは、昼間の上天気に引続いて、大空一面に凍り附くような星が美しく瞬いていたが、やがて北国特有の間歇的な猛吹雪が襲って来た。毛の手袋を三枚も重ねてその上へ布製の二本指を嵌めていて、まだ指先が凍りそうに冷たかった。頭は厚い毛糸の帽子の上から用意のシュス二枚重ねの大風呂敷を厳重に被って、眼と鼻だけしか出しておかなかったのだが、鼻の穴の中が凍って強ばって来た。しまいには鼻も隠してしまったが、眼まで覆う訳にはいかず、あとになってみたら、両方とも眼の下の頬の部分が凍傷にかかっていた。
日暮以後は、勿論足の手入れも出来よう筈はなく、痛い足を引摺って頑張って行った。そして何のために、こんな辛い頑張りをしなければならないのかと思ったりしながら、それでも今はただ歩き続けるよりほかなかった。だがしまいにはもう、道を踏み迷わないようにと注意するだけで、あとは余り何も考えなくなった。というより、考える気力もなくなっていた。
無我夢中で歩きながらただ早く真岡へ着きたいと、ひたすらに思った。真岡へ着いてもまだ暗いだろう、だがきっと何処かの町角の交番だけが起きてるに違いない、そしてそこには真赤な火が暖かそうにおこっていることだろう、早くその火にあたりたいと思った。今の望みは何よりも先ずそれだけだった。疲れて来てるので、歩きながらうとうとする。暗い町の中に燈火(あかり)が一つ見える。近寄るとそれが交番だった。中には暖かそうな火も見える。やれやれ、と思う途端に、真暗な雪道に歩き悩んでいる自分に気が附く。すると「ああ、交番はまだだったのか」とがっかりする。

この時は、世の中の楽園は交番である、と本当にそう思った。私は元来、交番やお巡りさんは、あんまり好きな方ではなかった。私の頭の中で、交番と極楽が完全に一致したのは、後にも先にもこれが一度だった。

やっと最後の熊笹峠を登りつめたのは、朝の三時過ぎだった。嬉しかった。微かながら山の端の曇った空がボーッと明るく、真岡の位置がそれと認められた。そして、あの空の下には交番がある、そう思うと幾分元気も出た。しかしこの頃はもう心身共に随分疲れ切っていたが、自分ながらよく来たものだと感心した。そしてもうこれで道を踏み迷う心配もないと思った。

愈々道が下り坂になると、踵の痛みもいくらか楽になり、斜面も割合に緩いので、どうにか落着いて滑り続けられるようになった。すると今度は、ついまた眠くなってきて、うとうととする。スキーが速くなると暗いので、すぐ目の前の雪の線と、谷の向うの山の斜面との見分けがまるでつかなくなるし、道の高低もよく判らない。しかし傾斜が急になると足がひとりでに制動している。ハッと気が附くと、道のカーブに沿って、足とスキーがボーゲンをかいて曲っている。「ああ道はこっちだったのだな」と思ってついて行く。

こうなると、目で道を見て頭がそれを判断して、足に命じて動作するという順序でなく、朧ろ気に網膜に映ったものが、じかに足の神経に反射して勝手に行動し、頭はお客さんの様にその上へ乗せて貰って行くような感じがする。それでも「はて、こんな風で、もしもカーブを真直ぐに行って谷へでも落こちると、この疲れた身体では這い上るのが大変だな」というようなことを考えてみるが、またすぐに居眠りを始めてしまう。そして曲り目に来ると、申訳みたいに目を覚して「危いな」と思う。しあわせに橇が通れる程の道幅があるのでどうにか無事に進む。雪質のい

いお蔭でもある。

こんなにしてジクザクな道が谷へ下り切るまで、何度それを繰返したことか、もうおしまいには、滑ることは足とスキーに任せておいて、頭は交番の幻ばかり見ていた。

こうして、ようやく真岡の町へ辿り着いたのは朝の五時半で、豊原を出てから正に二十二時間、その間殆ど雪の中を歩き通した訳だった。たしかにこれは、この区間に於ける遅い方の最高記録だったろうと思う。

しかも愈々町へ這入ってみると、中々待望の交番は見当らない。暫く行くと町の左側に一軒だけ煙突から煙の出ている家があった。何をする家か、もう見定める余裕もなく、遠慮も忘れて内へ這入り込んだ。豊原から夜通し歩いて来たといったら、それを聴いて呆れている家の人の顔が見えたような気がした。が、それっきりストーブの傍に、犬のように寝込んでしまった。

目を覚した時はもう昼だった。不躾な闖入者を親切に寝かせておいてくれた家は、起きてみたら納豆屋さんだった。一晩中極楽の同義語だと思っていたのは交番ではなく、現実には納豆屋さんだった。

肉刺が破れて赤肌になってしまった踵の手入をしながら、もうもうこんな無茶な頑張りはするものでないと思った。

青山温泉　二三日宿屋で休養してみたが、踵の痛みは中々癒らなかったので、便船のあったのを幸い船で小樽へ帰って来た。小樽でも二三日居て運動具店へスキーの註文をしたり、少しはまたゲレンデへも出て見たが、踵も痛かったし、あらましは見学も出来たと思ったので、間もなく帰途についた。

それでもまだ折角北海道へ来たついでに、青山温泉附近のゲレンデが見ておきたいと思ったので、昆布駅で途中下車した。駅を出てみたらもう日も暮れかけていたし、吹雪いてもいた。それに、ついこの間樺太で酷い目に遭って来たばかりだから、夜登ろうというような考えは毛頭なかった。

それなのに行きがかりというものは変なもので、またしても知らない雪の夜道を、一人で出かけることになってしまった。というのは、私が駅前へ出て宿屋を見つけようと思っていたら、丁度そこに宮川温泉（青山温泉の少し先）の御主人氏がいて、「青山温泉へ行くのなら、自分も今から山へ帰るから一緒に連れてってやろう」というのだった。それではという気になって、駅前の茶店で充分に腹ごしらえもし、すっかり身仕度も整えて待っていた。所がいくら待ってもやって来ないので、店の人がわざわざ迎えに行ってみてくれると、「今朝下りがけにスキーを折ってしまったので、何処かで借りようと思ったけど、借りられないから今晩は帰れない」という御挨拶だった。「何だ、それならそうと早く知らせてくれればいいのに」と思うと、折角腹ごしらえから厳重な身仕度までしてしまったことが馬鹿らしくなり、むらむらと謀叛気をおこすと、またしても「面倒臭い、一人で行け」という気になってしまった。そして吹雪いてるから危いと止められるのも聞かず、あらましの道順を教わっただけで飛出してしまった。

こんなことはもう決してしないつもりだったから、あらかじめ地図を調べてもおかなかった。村の外れで鉄道線路の踏切を越して、橋を渡って向う側の岡へ取りついたら、もう道跡がなくなってしまった。吹雪いてるのだからあたりまえのことだが、一本のシュプールもない。何でもいいからと思って登って行くと段々斜面が急になって、とうとう雪庇の下へ出てしまった。仕様がないの

でそれを大きく左手へ迂廻して、やっと上の稍々平な所へ出た。向うを見ると何か動いているので、近寄って行ったら真新しいお墓だった。まだ一日か二日しか経っていないらしい新しい提灯が、風に煽られて吹きちぎれそうに揺いでいた。その傍には夜目にもそれと判る白木のままの色色なお道具が取散らされて、半分雪に埋まっていた。余りいい気持もしなかったが、その側を通って少し登って行くと疎林へ這入った。あたりを見廻しながら行くうちに、木の隙間の形で道が分った。林を出抜けると耕地と思われる広い所へ出て、農家らしい真黒な塊がいくつか目についた。吹雪は矢張り間歇的なもので、樺太の時程猛烈なものではなかったが、行先の見当が皆目つかないのでこれには全く閉口した。やがて、稀に頭のない大木が立っていたりする位で、ほかに碌な木もない原っぱへ出た。そこは一面の畑か何かだろうと思うが、いくら考えても道らしい場所が判らない。星でも見えればまだいいのだがその望みもなく、余り当にならない吹雪の風で、いくらかでも方角の見当をつける位だったので、何とも心細い限りだった。

こうなると、もう全く勘にたよるよりほか方法がないのだが、しかも時々その勘も怪しくなって自信がもてなくなってくる。本当に困った時は、頭の中で、白紙の上へコンパスと定規で線でも引くような心算になって歩いてみた。先ず或地点に覚えをしておいて、そこから百米なり、二百米なり直線に前進する。そして第二の地点に覚えをして、そこで右向け右をする。そこから新しい方向へ五十米なり百米なり直線に行ってみる。それでも道らしい感じの所がないと引返して第二の地点から反対の方へ歩いてみる。それでも分らないと、再び第二の地点へ引返し、更に第一の地点へ戻ってくる、というようなことまでしてみたことがあった。

そのようにして歩きながら、無理に出かけて来てまたこんな羽目になったことを後悔したが、

それでも帰る気にもなれなかった。三時間程は、身体にこそ大した骨折ではなかったが、全く非常に緊張した努力の連続だった。風の方向にも油断なく注意したし、斜面の向も常に意識していた。風当りの強いために、古い雪の露出している個所などがあると丹念に調べてもみた。小さな一本の木の形にも何かの手掛りを求めようとした。そんなにして、何処をどう歩いて行ったか分らないが、真夜中の二時頃になって、一寸した尾根の様な所からすぐ目の下に、青山温泉の電燈を見附けた時は、全く躍り上る程嬉しかった。

上手の方の入口へ行って声をかけてみたが、中々返事がないので、下の川縁の方へ廻ってみた。すると果してそこにも玄関があった。家の前の流には手摺の附いた小さな橋があった。起そうと思って戸口へ立つと、後に何かものの気配を感じたので、振向いてみると、橋の向側に熊がいる。ギョッとしたが、落着いて見ると、そのおとなしい鈍重な動作から、どうやら橋の袂へ鎖で繋がれているものらしいことが分った。しかし電燈の反射を受けて時々目玉が鋭く光る。何れにしても暗闇の熊なんていうものは余り気味のいいものではない。

やっと起して泊めて貰ったが、もう重ね重ねの失敗に、翌日も吹雪いていたのを幸い、ゲレンデの見物もそこそこにして、さっさと引上げて帰って来てしまった。

三　スキージャムプ入門

　その次の年の冬だったと思う、赤城の家の前のスロープで練習中、斜面の中途

に薪が積んだままになっていたその上に、雪の被っていたのを気が附かないで滑って行くと、それが自然のジャムプ台になっていて、不意に身体が空に浮いた。「おやっ」と思ったらもう下で転がっていたが、その一寸浮いた瞬間に何ともいえない魅力を感じた。それでもう一度登って、こんどはわざと飛んでみた。また転がったが面白いのでまた登った。そうして何度か繰返しているうちに、立って滑走が続けられるようになった。すると愈々面白くなって来たので、少しずつアップローチを延ばして行った。そしたら段々馴れて来て四米位は飛べるようになった。

そうなると段々欲が出て、もっと余計に飛んでみたくなったので、附近のよさそうな斜面を選んでは、いくつも小さな雪の台を拵えてみた。こんどはこれが私のスキージャムプ病みつきの始まりで、以後十年近くの間、膝関節の習慣性半脱臼で愈々ジャムプの出来なくなる迄、殆どそれに没頭し切って離れることが出来なかった。

しかし当時はまだ、前年大鰐の大会で見たジャムプ位よりほか何の予備知識もなかったので、短かい軽いスキーにリリエンフェルトを附けて飛んだのだから、うまくゆく筈もなく、少し飛ぶ距離が延びてくるともう全く不安定で駄目だった。

第三シャンツエを作る　でも仕合せなことに、その後北大の広田氏の「スキージャムピング」という本が手に入ったので、それを唯一の参考資料として、こんどは夏のうちに合理的なシャンツェを作り、スキーもビンディングもジャムプ用のものを用意しておくことにした。

それからシーズンが終るとすぐ、シャンツェの出来そうな場所の選定に取掛り、心当りの斜面を根気よく探して歩いた。そのうちに幸い近くの山に、よさそうな斜面が見出せたので、自分達の手で測量をしてみた。別に機械があるわけではなかったから、傾斜の角度等は大型の分度器に

重りを取りつけて苦心して計った。でもその結果大体よさそうな見当がついたので、設計に取りかかり、何十枚とも知れないシャンツェのプロフィルをかいてみた。でもその仕事は、私に高等数学の知識があるわけでもなく、また指導して貰えるような人もなかったので、一通りな苦心ではなかった。いくらかいても中々これならばという自信の持てるようなのが出来ないので、眺めてはかき、かいては眺めた。食事の時はテーブルの脇におき、寝る時は枕元においた。そしてそんなことだけが日課のような日が大分続いた。

その挙句漸くどうやら自信の持てるものが出来たので、その夏は自分で鍬を担いで行って高い所を掘ったり、シャベルや畚で土を運んだりしながら、家の男達を相手に大小三つのシャンツェを拵えた。しかもそのうちの一つの、私達が第三シャンツェと呼んでいたものは、当時としてはまだ類のない程大きく、五十米のジャムプも可能なものであった。私は愈々出来上ったその台の上へ立ってみて、これを飛べる日が自分に来るだろうかと思った。それは前年札幌で怖気を震って見て来た北大のシルバーシャンツェよりも、更に大きかった。

やがてその仕事があらまし済むと、暇を見て信州へ出掛けて行って、飯山のスキー屋で長いジャムプスキーを作り、ビンディングもみんなフィットフェルトに取換えた。

間食を絶つ　なおジャムプには、先ず身体のコンディションを良くして置かなければいけないと考えたので、大いに摂生もし、トレーニングもする気になった。私は酒は前から飲まなかったし、煙草も既に止めてしまっていたが、甘いものが好きだったので、間食が多くなり過ぎるといけないと思ってそれも止めてしまった。その上お茶を飲むと、ついお菓子も欲しくなるからと思ったので、序でにお茶も止めてしまった。そのほか夜更しの原因になりそうなトランプとか、骨

牌というような類いのものも一切手にしないことにした。
そうしているうちにまた、待ちに待った冬が来た。こんどは今までの遊び半分のスキーとは違って、真剣な練習が始まった。それは大正十五年、私が三十七になった時だった。大概の人なら、ジャムプどころか山スキーだってもうそろそろ切上げようとするかも知れない年配なのに、狂気の沙汰と一部の人に思われたのも無理はなかった。でも私はそんな人の言葉には一切構わないで、一生懸命に稽古を始めた。しかし始めてみるとつくづくむずかしいものだと感じた。色々と予期しなかった問題が、あとからあとからと出て来て、その度に何かしら苦い経験を舐めさせられるのであった。

初めて大シャンツェを飛ぶ 小さいシャンツェでどうにか七八米ぐらい無事に飛べるようになったので、思い切って大きい台へ行ってみた。アウトランに立って見上げると、真白に雪の附いたシャンツェは、実に雄大な感じがした。見ただけで威圧されてしまいそうになる。でもあまり見てゐると怖くなりそうだから、もう見ないことにしておいて、先ず半日は丹念に斜面の手入をした。あとから考えてみれば、五十米も飛べようという台を二人や三人で半日位手入れしたって、どうせ碌なことは出来ない筈だったが、知らないということは人を大胆にするものだった。
午後になると再び行って、愈々スタートに立ってみた。見下すと台の端が見えるだけで、その先は遠景だ。滑って行ってそのまま空へ飛び出したら、垂直に向うの谷まで墜落しそうな気がする。癪だけど何としても怖い。ややしばらくは躊躇していたが、それでもついに観念の目を閉じてスタートした。
「ああ台の傍へ来た」と思った。「とうとう台から離れた」と思った。だがそれっきり後は一切

夢中だった。どしんと強いショックを全身に感じて気がついた時は、あたり一面の雪煙で目も開けず、身体は凄い速さで着陸斜面を滑り落ちていた。やっと下へ来て止まったので、立上って台の方を見上げると、殆ど上から下まで擦り落ちた跡だけだった。その跡で判断すると、飛んだのはほんの六七米で、あとの七八十米は、ただ身体で滑り落ちたのだった。何とも情けない初飛びではあったが、これでやっと安心出来た。先ず命だけは大丈夫だという見当がついたので、急に気が大きくなった。見ていたものも安心したらしい。凄い勢だったといっていた。

身体に附いた雪を払い落すと、スキーを担いでまた元気で登って行った。こんどこそは、と思って飛んだがまた転がって擦り落ちた。しかし何度かそれを繰返してるうちに、やっと立つことが出来た。しかもこの日の最後には、今まで十米を飛んだ経験もなかったのに、二十一米余りのスタンディング、ジャムプに成功してしまった。それこそ鬼の首でも取った気持といおうか、何と形容しても及ばないような嬉しさだった。見ているものも喜んだが、帰りは正に凱旋将軍のような足取だった。

それからは御天気さえよければ毎日大きい台の練習に行った。無論立ったり転がったりだったが、それでもいくらかずつは飛躍距離も延びて行った。そのうちに段々台にも馴れてくると、もう始めの時のような怖さはなくなった。

しかしジャムプが怖くなくなると、こん度は不完全なアウトランが怖くなってきた。ジャムプの怖かったのは、全く意味のないことで、自分の業の未熟さからであったが、アウトランの怖いのは本当のことだった。それは今考えても、よく命が無事だったと思う位で、全く現在の常識では想像も出来ない程無茶なものだった。夏の工事の時の労力不足と無智だった事の結果だが、何

しろ五十米級のシャンツェのアウトランが、クニックの少し先から幅三米ぐらいで、しかも終りの方は同じ幅でカーブしていた。その上その両側には大きな樅の根株や、岩石が点々とあったのだから、その間を時速六七十キロの速さで滑り抜けることは、当時の技術では全く容易なことではなかった。一度でもやりそこなえばそれっきりだ。今もしこんなシャンツェがあったとしたら、誰も飛びもしないだろうし、また飛ばせもしない。或る時は猛烈に転がり込んで行って放り出され、顔を上げてみたら目の前一米半位の所に切株の出ていたこともあった。片輪にもならずに、こうして済んで来たことは、全く私の運が良かったのだと思う。

番人をおく　或る時、私はこの大きい台を一人きりで飛んでいて、手首をひどく捻挫してしまって医者へ行ったことがあった。これが手だからまだ良かったが、足でも折って雪の上に寝ていれば、ジャムプ姿の薄着のままでは凍えてしまう心配があった。それから必ず一人は番をしてることになった。殊に大きい台は、スタートから下が見えないので、もしも他の人でもいると危いからその合図をする必要もあった。そしてこの役目は大概の場合、妻が引受けてやった。妻は私の二度目の妻で、まだ若くって元気だった。

それから妻の仕事にはもう一つ大事なものがあった。それは側面から私のフライト（空中姿勢）の写真を撮ることであった。帰ってから毎晩それを現像しては、そのネガで自分の飛んでいる時の姿勢を調べるのだ。コーチしてくれる人のない練習では、こうでもするよりほかなかったのである。

そのうちに、妻にも段々ジャムプというものの概念が摑めるようになり、見ていて参考になる注意がいえるようになったので、その点非常に都合がよくなった。しかし、もっとよく本格的に

呑み込んで貰えば、一層工合がいいと思った。それには妻自身でジャムプをしてみることが一番早道だったから、そのことを話して勧めてみた。すると妻も毎日私の飛ぶ番をしていて面白いと感じていたのだったろう、間もなく自分でもジャムプスキーを穿いて小さい台を飛ぶやうになった。

そのほかにもう一人、私達のジャムプになくてならない人間がいた。それは以前から私の家にいた男で、紋ちゃんという名だった。よくみんなから少し御目出度いといわれていたようだったが、中々良い所のある男で、意気に感じては水火も辞さないという質だった。だからシャンツェの手入れ等には絶好な(にんやく)役で「俺の番をしてる台で、バーンの手入れ不足から怪我をさせたとあっては、第一自分の気が済まない」といって、全く献身的な努力を続けて働いてくれた。或時は風邪をひいて熱があるのに、いくら止めても聞き入れず、無理に手伝いに出て行って、頭から湯気を立てながら雪運びをしたり、着陸斜面の踏み固めをしていたこともあった。始めの頃は自分でも小さい台を飛んでいたが、ジャムプをしてると手入れの方が疎かになるからといって、後には止めてしまった程だった。

こんなにして、みんな力を合せて努力してみたが、コーチャーなしの練習は中々効果が挙らなかった。でもこのシーズンの最長不倒距離二十八米六〇は、同じ年の豊原にあった全日本選手権大会の最長不倒距離二十五米一〇に比べればいくらか多かった。勿論発表されない記録には、何処にどんな立派なものがあったかそれは判らなかった。

ブランコ シーズンが終るとシャンツェの改造を始めた。第三シャンツェの命掛けのアウトランだけは、何としてでも直さなければならなかったので、この夏は主としてそれに労力を集中し

た。

スキーも結局、買ったものでは物足りなかったので、大工を連れて来て自分でも一緒になって、思うような寸法に作ってみた。服装も顚倒の際、背中や脇腹に雪の入らないように、色々と工夫して上着を拵えてみたり、手袋も手首で締めただけでは、猛烈に転がると脱げて飛んでしまうので特別に長いのを作り、肱のずっと上まで嵌めて強いゴムで締めるようにしてみた。

このようにして、来るべきシーズンに対して準備を進めながら、一方摂生とトレーニングに専心した。しかし何でもやる気だけはあるのだが、どんなことをしたら一番いいのかそれが分らなかった。だからただ湖では舟を漕いだり、泳いだり、山へ行っては崖を飛んだり、走ったりしていた。また家の中では、布団を沢山積んでおいて、サッツの練習から、フォアラーゲして、積んだ布団に飛びついたりしていた。

でも何とかして、空中を浮いて少しでも飛んでみたかったので、前の斜面の立木に高いブランコを作り、うんと振っておいて、腰掛けて前へ飛ぶ稽古を始めた。その場所は十二三度位の下り斜面だったので、飛ぶ距離は木の根元から七八米に過ぎなかったが、一度斜上に放り上げられてから落ちて行くので、相当時間もかかったし、飛んだような感じもした。しかし下はただの土の斜面で小石などもまじっていたし、ランディングしてもスキーの様に滑り出してくれないので、よく転がって、手や足を擦り剝いていた。

無論当時でもそれを賢明なトレーニングだとは思っていなかったが、そのこと自体面白くもあったし、瞬間的な意識の把握、というような意味では万更無駄でもなかったという気がした。

だが雨が降るとブランコにも乗れないので、畳の敷いてある広間で色々なことをした。そのう

らに、提灯蹴りという愉快なことが始まった。それは最初敷居の上に立っていて「上の鴨居が蹴れるか」といって始めたら、暫くするうちにみんな蹴れるようになってしまった。それでは、というので、こんどは高い梁から紐で提灯を吊して「これが蹴れるか」ということになった。それも始めの頃は、蹴らない方の足を畳の上に置いて蹴っていたのが、段々提灯が上るとそれでは間に合わなくなってきて、両足とも畳から離すようになり、終いには助走して来て踏み切って、身体を仰向に倒しながら飛び上り、上り切った所で更に片足を挙げて提灯を蹴った。こうすると、かなり高くまで足が届いたが、落ちる時は大抵頭からだった。でもみんな無意識のうちに身体を捻って、柔道の受身の様なことはしていたが、随分乱暴なやり方で、これは少し野蛮な感じもあった。しかし、また落ちる時のことなんか始めから度外視してかかり、捨身な気持で上れるだけ上って蹴って、「あとのことは、俺は知らない」というようなところに、何か面白い気持もあると思った。

四　スキージャムプ練習時代

目を突く　朝起きて庭の白い霜を見たり、山の上から上越国境に来る早い初雪を眺めては、ひたすらシャンツェに雪の積もる日を待ち焦れていた。するとその希いが天に通じたものか、この年は思いの外早く雪が来て、十二月の半ばにはもう大きいシャンツェが飛べるようになった。幸先よしと喜んだ私は、今年こそはという意気込みで真剣な練習を始めた。妻も紋ちゃんも張

り切って去年にも増して熱心な協力をしてくれた。アウトランも夏の手入れのお蔭で、怖い根株はなくなって美しい一面の雪野原となっていた。それに手製のジャムプスキーの穿き心地もよかったので、間もなく三十米も越せるようになった。しかし馴れて来て飛び方が乱暴にでもなったのか、痛い目に遭う割合も多くなって来た。

そのうちに、赤城山としては珍しく深い新雪があった。台が大きいので短い時間に二人や三人の力で充分な手入れをすることは、とても無理だったのだが、経験の足りない私達にはそれがよく解らなかった。でもその日は朝から自分でもジャムプスキーを穿いて、一生懸命着陸斜面の踏固めをした。そして昼頃になって略〻手入れが出来たと思った。事実見掛けは非常に綺麗になったので、つい一本飛んでみたくなった。無論この場合、一度家へ帰ってスキーの手入れをして、昼でも食べてゆっくりと休み、それから出て来て飛ぶべきであったので、あとから考えると全く軽率の限りだった。スキーの滑走面は半日のバーンの踏み固めですっかり蠟も落ちてしまっていたし、斜面の堅さもまだ不充分だった。紋ちゃんは一通り手入れが終ったので一足先へ家へ帰って行った。

私がスキーを担いでアップローチを登りかけると、妻が心配して「今は止めて、御飯を食べてからにしたら」と注意した。私もそうしようかと思わないでもなかったが「なあに、少し飛んでおけば大丈夫だろう」と考えて、それでも何時もよりは下からスタートした。出てみると昨日までの古い凍った雪と違って感触はいいがスピードが出ない。慣れていれば何とかなるのだが、初心者の悲しさにその加減が出来なかった。どうやら踏み切って出るには出たが、着陸した途端に前方へのめり込み、何か非常に大きなショックを受けたと思ったら、スキーと身体がバラバラに

なって、もんどり打って落ちて行った。クニック迄行ってやっと止まったので、ふらふらと立ち上ってみたら、足下の雪の上が点々と血で赤くなっていた。そしてなお顔の辺りから血がポタポタと流れ落ちて、見る見る赤い斑点が拡がって行った。自分の気持では最初頭をガンと擲り附けられたような感じがしただけで、あとは痺れてしまってよく解らなかったが、なんでも額の辺りに穴があいてるような気がした。妻がびっくりして飛んで来たが、血を見てすっかり周章ててしまって、「何処に疵がある」と訊いても、「そこだそこだ」と私の顔を指差すばかりで、こっちにはちっとも呑み込めない。そこで「自分の顔としたら、何処の辺に疵があるのか」と再三たずねて、やっと左の目の上だということが判った。そのうちに段々両眼とも霞んで見えなくなってくるような気がしたので、僅かに見える右の目だけで見当をつけて制動しながら家まで滑って帰った。

それから鏡を出して見て漸く分明り（はっきり）と疵の様子が解った。疵は左の眼の上目蓋だった。それも実に際どい所で睫のある端からやっと三ミリ位上で、長さは横に二十ミリ余りもあった。眼球がどうなっているかと心配だったので、手で上下に開けてみようとするのだが、腫れ上った上目蓋に、目位の疵口が開いてしまって、どうしても目まで開けてみることが出来なかった。

放ってはおけないので、瓶に硼酸の稀い溶液を用意して疵口を乾かさないようにして、三里の山道を妻に手を引かれながら水沼の駅まで下りた。私は途中で幾度か軽い脳貧血を起しそうになったので、その度に休んではまた歩いた。それから前橋まで汽車で二時間、やっと親戚の家へ辿り着いた時はもうすっかり日が暮れていた。

早速心当りの眼科医へ電話してみたが、何処もここもみんな不在だという。よく訊いてみる

と、運の悪い時は仕様のないもので、丁度その晩は町中の眼の御医者さんの会合だったのだそうだ。でもやっと最後に「お爺さんなら居るから、来て御覧なさい」というのがあったので、すぐ行ってみると、もう中風で疾っくに現役を退いている、隠居株の御老体の眼医者さんだった。

万更知らない人でもなかったので、早速手術に取掛って貰ったのだが、運わるく看護婦まで銭湯へ行ったとかでみんな留守だった。仕方がないので、丁度帰省していた女子大へ行っている娘さんが電燈持をして手伝ってくれた。しかし真黒に日焼のした顔の、大きな生疵は、余程凄惨な感じであったのだろう、忽ちその娘さんの方が卒倒しそうになって引込んでしまった。そのあとは誰もいないので、止むなく妻が電燈持の役目を引受けるよりほかなかった。

やっと一通り疵の手当が済むと道具を集めて来て縫いにかかった。一昔前なら腕に覚えのある名医でもあったろう。しかし今は中風のため手先が震えるので、針が思う所へ中々うまく刺さらない。それに手先ばかりではなく、眼の方も相当怪しくなって来てるらしい。「目蓋と一緒に眼の玉まで縫われやしないかと思って、ハラハラしていた」と、あとで妻が言っていた。なお「危なっかしいその様子を見てはいられないのだが、脇を向いてしまえば電燈持の役が勤まらないし、どうしたらいいのか胸が詰って泣き出したい様な気がした」ともいっていた。

そのうちに縫い始めてから三針目位の所で、どうも同じ側の糸を結ぶらしいのだが、横から口出しも出来ず、妻が心配しながら見ていると、矢張り案じた通りで引張ったら折角縫った糸が抜けてしまって、また縫いなおしをしていたそうだ。私も一生懸命我慢していたが、かなり痛かった。結局縫ったのは四針だったが随分長い間のように思った。でもやっと縫い終ってから上瞼を引上げたら、かすかに目が開いて新鮮な電燈の光が見えたので、眼球に異状のないことが判り、

やっと安堵の胸を撫で下した。

思えば軽率なジャムプの一本だった。瞼を切ったのはスキーの先端だと思う。そしてもしもあの場合、その先端の位置がもうほんの五ミリか十ミリ違っていたとしたら、片目を失う位はまだしも、運がわるければ即死であったかも知れない。夜なんか一人で目を醒ましてそう思うと余りいい気持もしなかった。

でもまた、物は考えようだとも思った。あの場合、その五ミリか十ミリを何の力が除けさせたのか、それは決して自分の力ではなかったし、そのほかの何の力でもなかった。ただものの機勢(はずみ)であり、運であったのであろう。果して運であったとすれば今後も自分の関わり得る所ではない。止めてしまうのならそれまでだが、やるとすれば別に恐れる理由はない。無論最善を尽して軽率な行動は避けなければならないが、その上でのことなら大いに勇敢にやっても宜しいと考えた。

だから五日目に糸を抜いて貰うと、その足で山へ帰り、翌日からまた小さい台を飛び始めた。なお幾日かは眼帯をしていたので、飛ぶ時だけそれをはずしておいたが、二三日する中に眼帯もいらなくなったので、また大きい台を飛ぶようになった。それは目を突いてから丁度十日目だった。シーズン中の一番雪のいい時だったので、惜しい十日間だと思った。

頤を突く　それからも雪のコンディションは中分なかった。暫く休養したので身体の調子も却ってよくなっていて、毎日のように記録は伸びて行った。そしてもう目を突いたことなんか忘れてることが多かった。でも、こんどは前に比べると大いに慎重に練習をしたつもりだったが、まだ油断があったのだろう、暫くするとこんどはまた頤を突いてしまった。また雪の上に赤い斑点

が出来た。その時は顔が少し、ひん曲った様な気がしたが、前の日の時程の怪我ではなかった。家へ帰ってきて疵の手当をしながら、何故こう屢々怪我をするのだろうと考えてみた。ここにいればどうせまたすぐ飛出すに違いないし、飛べばまたどうも怪我をしそうな気がする。何か大きい原因があるように思われるので、これは一つ赤城山を離れて、台のない所で落着いて考えて来ようとそう思った。

そこで早速仕度をしておいて次の朝出かけて行った。峠の手前で振返ると、大きいシャンツェがよく見えた。雲一つない紺碧の空にクッキリと上も下も一杯に雪が着いていていい恰好をしていた。じっと見ていると、人を惹き着けないではおかないような魅力があった。すると「お前は、この台とこの雪をおいて、何処へ行こうとするのか」という声が心の隅から聞えてくる。すぐにも引返してジャムプスキーを担ぎ出そうか、という衝動を感じて、しばし躊躇ったが、まあまあと思いなおして峠を越えて山を下りた。

さて駅まで来てみたが、何処へ行こうというはっきりした当もなかった。真黒な顔に大袈裟な繃帯をしているので、余り人中へ出るのもいやだった。それで兎も角も信州か、越後辺りの山へ行ってみようかと思ったが、切符を買おうとして訊いてみると雪のため信越線が不通だった。それでとりあえず渋川から草津へ入った。二三日湯に入りながら近所の山を歩いているうちに汽車も開通したので軽井沢へ出て関温泉へ行ってみた。そこで前から噂を聞いていた笹川の英さんの家へ泊って、始めてよその人と色々ジャムプの話をした。当時はまだ内地でジャムプをする人は甚だ稀だったので、飛ぶ人はみんなお互に仲間位に考えていた時代だった。そこでまた二三日温泉に浸りながら、軽い山スキーを穿いて裏のゲレンデでクリスチャニヤの稽古をしたり、神奈へ

登ったりしていた。

そして考えるともなく、今後の練習の方針に就いて色々と思案してるうちに、やっと一つ気が附いたことがあった。それは今まで飛んでいた程度の台は、初心者の練習には大き過ぎるということだった。考えように依っては真に馬鹿々々しい話だが、これは大きな問題だった。しかし家の前の小さい方の台では余りに小さ過ぎるから、もう一つ中位な台を作らなければいけないと考えた。

第四シャンツェを作る　そう気が附いたので急いで赤城山へ帰って来た。帰りの汽車の中でも中位のシャンツェの出来そうな所を、色々と考えながら来たが、帰るとすぐまた心当りの斜面を捜して廻った。生憎山の方には思わしい所もなかったが、いい塩梅に大沼の西側の湖畔に適当な場所が見附かったので、早速台を作り始めた。雪の深い中の仕事は大分余計な労力を要したが、出来てみると思いのほかいい台になった。斜面の向が東北なので日光の直射も避けられたし、大きな楢林の中だったので風の影響も少なかった。その上アウトランが広々とした湖水の上の雪野原だったので、始めて伸々とした気持で練習することが出来るようになった。この台は始めから勘定して四つ目だったので、私達は第四シャンツェとも呼び、また着陸斜面のすぐ傍に綺麗な清水が湧出していたので、清水の台ともいっていた。

台の大きさも手頃だった。小さいといっても後には三十米は楽に越せた。ずっと後の話だが、私が三十五米飛んで、幾分無理な着陸をして、もうこれがこの台のレコードだろうと思っていたら、コルテルードが来てもう半米、三十五米半あっさり飛んでバッケンレコードを作って行った。

やがてこの台は妻も飛ぶようになったし、ほかの人達も幾人か飛んだ。その後関温泉の英さんも飛んだことがあったし、今は亡くなられたが近衛さんの下の弟さんもよく来て飛んだ。それから当時麓の村の学校へ行っていた私の子供も時々は帰ってくると飛んでいた。今までは殆ど一人きりでやっていた練習が漸く軌道に乗り始めた。

前に第三シャンツェの命がけのアウトランの事を書いたから、こん度は世にも珍しい朗かなアウトランの情景を一つ話してみよう。先にも一寸書いたが、この第四シャンツェのアウトランは広々とした湖水だった。湖や池がアウトランになってる例はほかにもあろうが、ここは結氷時期や積雪の関係で、ジャムプが出来るようになっても、湖はまだ一面の鏡のような油氷のことがあった。油氷はスケートには絶好だが、スキーには苦手だ。私達も始めのうちは暫く敬遠していたが、折角台の雪がいいのに飛ばないのは如何にも惜しいので、何とかならないものかと思って着陸斜面の途中から恐る恐る滑り出してみた。最初はクニックから、いきなり氷の上へ飛出してしまうので勝手が違ってあわてたが、度々稽古してるうちに段々要領を呑み込んできた。

先ずクニックの先だけは、そのままではどうしても困るから、岸から十五米か、二十米ぐらいの間、水を撒きながら橇で雪を運んで来て氷の上へ附着させて、兎も角も着陸斜面と油氷の連絡を附けた。こうしておいて少しずつ工夫して行ったら、しまいにはどうやら不安なしに使えるようになった。でも最初の頃は一寸面喰らった。上からジャムプして来た勢でここを越して氷の上へ出たら最後で、何処まで行ってもスピードが落ちない。何しろ五六十キロの速さでジャムプスキーのまま油氷の上へ走り出すのだから堪ったものではない。それに氷の上ではスキーのエッヂが絶対に利かないから曲がる訳にもいかない。うっかり変な動き方をしたら足を浚われて、それ

こそ酷い目に遭う。といってておとなしく立っていれば構わないが帰りが困る。そこで色々と考えた挙句、いい方法を発見した。何処まで行ったたって行きは構行ったら機をみて、そっと氷の上へ寝てしまうのである。すると背中のスエーターや、お尻のズボンの摩擦はスキーの滑走面より甚だ大きいから、寝てから三四十米も滑れば大概止まってしまう。油氷の上へ楽々と寝転んだまま滑走して行く気持は、駄々っ子の昔に帰ったような何か楽しいものがあった。滑っている方も愉快だが、見ている方も亦何ともいえない朗かな気分になるのだった。

氷に親しんだことのある人なら誰でも知っていることだが、氷の上で何か一寸音をたてると、その場ではたゞ平凡な摩擦音でも、少し離れて聞くと微妙な美しい音色になって聞えてくる。だからジャムパーが氷の上へ出ると、途端に軽快ないい音をたてて滑って行く。そして転がるとまた転がる時のいい音がする。それが湖水を囲む外輪山に木霊して余韻を残して響いて行く。

だが寝て滑って行って止っても、その恰好ではまだ帰ることは出来ない。だからアップローチにいるジャムパーがみんな飛んでしまうまで、そのままの位置で見物しながら待っている。そうすると一通り飛んでしまった後から、台の所で番をしていた人が、全部の人の杖を待って直滑降で下りて来て、みんなに杖を分配してくれる。杖を貰うとやっと自由が利くようになって、みんな揃って杖で漕ぎながらスキーを滑らせて帰って行く。それがお天気のいい静かな日でもあると、みんな不思議な程和やかな気分になるのだった。

足首の曲り　練習は略〻順調に進みフライトの写真もどうやら飛んでいるらしい恰好のものが、たまには出来るようになった。しかし其の後と雖も無論幾多の難関は続いた。

この話もそのうちの一つだが、私が合を離れて空中へ出ると不思議にスキーの先が開く。始めはスキーの狂いか、バッケンの取付け方が悪いのかと思って調べてみたが、どうもそうでもないらしかった。それではリュックラーゲのせいか、それとも踏切ってからの膝の伸び方が足りないので開くのかと思って、或る時思い切って真直ぐに膝を伸ばして飛んでみた。するとフライトでなお分明とスキーの先が開いた。それでやっと気がついた、「これはきっと自分の膝の向きと足首の向きが違ってるのかも知れない。」そう思ったので、片足ずつスキーを穿いて木の枝へぶら下り、目を閉じて、膝を真直ぐに伸ばしておいては、そっと目を開いてみた。果して、左足の場合はいつも略〻スキーが真直ぐだったが、右足でやると必ず八九度爪先が外へ向いてることが判った。そこで早速バッケンを直して、ほんの僅か右の靴だけスキーの上に斜に取付けてみた。そうしたら、それ以来フライトで先の開く癖が殆ど直ってしまった。老練なコーチャーでもいたら、こんなことは立所に発見して貰えるのだろうに、何事も一人で進むものは余計な苦労と時間が要るものだと思った。

こうして話してくると、ついどうもわるいことや、失敗したことばかり多くなるので、素人にスキージャムプとは危険なもの、むつかしいものと思い違えられる心配がありはしないかと思う。しかしスキージャムプというものは、順序を踏んで行きさえすれば、決して特に危険なものでもなければ、そんなにむつかしいものでもない。私の今までの乏しい経験から考えると、ジャムプの怪我の大半はシャンツェの手入れ不足にあったように思う。その次はスキーの手入れ不足、不合理な形の台、スキーの狂い、締具の不完全、天候の不良、自分の実力を無視した大ジャムプ等で、そのほかの場合の怪我というものは、もしあったとしても実に稀なものだったと思

う。なお私達はいつも、余り人のいない所ばかりで稽古していたからそんな心配はなかったが、私の友人には着陸してアウトランへ出てから、ふらふらと脇から滑って来た人を除けようとして転がって足を折ったのがあった。

要するに、「いいコーチャーさえあれば」ということになるので、一人ぼっちの練習や、素人同志の研究は、先ず思い止まった方が無事だと思う。なお序でだからもう二つ三つジャムプに就いて思い出す話をして見よう。

女のジャムプ 妻がこの清水の台を飛び始めた時のことだが、二日間に連続顚倒十六回、十七回目にやっと立てたという記録がある。これが全く初めてジャムプするものなら珍しくないかも知れないが、既に小さい台なら無事に飛んでいたのだから、記録といってもいい価値があると思う。随分根気もいいと思ったが、然も妻はこの間に一度の捻挫もしなければ、たいして痛い目にも遭わなかった。だからジャムプで転んだってそんなに心配する程のものでもないと思った。しかし妻のジャムプに就いてはもう少し大きい意味の記録がある。それは妻の眼は片方だけしか視力がないということだった。お医者さんによく調べて貰ったら、右の眼だけは人並だったが、左は暗室へ這入って強力な電燈をつけても感じ得ない全くの無視力だった。片眼では左右のものの区別はつくが、遠近の感じは甚だしく鈍くなる。しかもそれがスキージャムプのようなスピードの速いものには、一層不自由が大きくなること勿論であった。だからこれは随分大きなハンデキャップだと思う。なおその上妻は根気のいい質ではあるが、人並より臆病な性質だった。牛も怖い、犬も怖い、高い所も怖い、暗闇も怖いといった調子である。それでも妻は、しまいにこのシャンツェで二十五米位まで飛んでいた。二十五米という距離は短いに違いない。けれどもその僅

か二三年前の全日本の最長不倒距離が略々それくらいだった当時の女の飛ぶ距離としては、先ずそんな所で相当だったのではないかと思う。そこで私達の小さい一つの経験は、スキージャムプというものは、女、片目、臆病と、こんな条件のもとにでも、やる気さえあればこの程度には出来るものだということであった。

もう一つこれは更にむつかしい問題で、軽々しくはいえないが、大概のスキーの本を見ると、「女も大いにスキーをやる方がいいが、ジャムプだけはしてはいけない」と書いてある。シュナイダー等もかつて女の人にジャムプを教えて、あとで何か身体に異状でもあったかして、恨まれたことがある、という様な自分の経験の一例を話したことがあったそうだが、私は逆に、女がジャムプをしても何等認められるような故障はなかった、という反対の一例を報告しておきたいと思う。

後頭部を打つ話　余談に亙るようだが、これもジャムプで経験した面白い話である。ほかの運動等の場合にも、これと同じようなことが起るものだかどうか知らないが、ジャムプで着陸して転んだ時、どうも後頭部辺りを雪の斜面に打ちつけた場合に起る現象らしい。それは近い過去のことだけを、すっかり忘れてしまう不思議な精神状態である。それでいて判断力や、そのほかのことは大体普通に近いのだから、傍で見ているとまことに変なものである。

これは私の子供や、友人も三人程やったし、しまいに私自身もとうとう一度経験したが、その私の場合はこんな風だった。——

或る時、清水の台の着陸斜面の下の端に転んでいたので起上ってみた。別に何処も痛くはないが、様子が少し変てこだ。気が附くとジャムプスキーを穿いている。そして身体中雪だらけだ。するとどうもおかしい。「今この台を飛んで転がったのかな」と思う。しかしそれにしてはちっ

とも飛んだ覚えがない。「変だなあ」と思って着陸斜面を見ると、ちゃんと三十米の標しを少し越して着陸したばかりの跡がある。たしかにどうも自分のらしい着陸の跡である。台の所を見上げると妻が少し心配そうな様子をして、何か話しかけているようだがよく解らない。
それから湖の反対側の山を見ると、黒檜山にも、駒ヶ岳にも、一面に日が当っている。だから「今はたしかに午後だ」と思う。すると「今日の午前中、自分は何をしていたろう」と考えてみても全く記憶がない。（本当は午前中もこの台で練習していたのだった）こんどは「自分はこのシーズンに入ってから、この台を飛んだろうか」と思ってみるが、それも全で覚えがない。（勿論毎日のように飛んでいた）だがこの積雪の状態を見ると、「今はたしかに真冬に違いない」、「ではどうしてジャムプの練習をした覚えがないのだろう」、「それとも覚えがないのだから、まだやらなかったのだろうか」、「いやそんな筈はない」、「自分のこの服装はちゃんと練習の時の仕度だ」といった調子で、自分では一生懸命考えを纏めようと努力するのだが、さっぱり纏らないで、また同じことを繰返して考えている。いくら考えてもきりがないから、いつもするようにスキーを担いで台の方へ登って行く。途中で着陸の跡を見て「丁度三十二米位だな、先へ行って開いてるからリュクラーゲだったのだな」などと思う。
それから妻の所へ行って、大真面目で今下でさんざん考えて解らなかった自分の疑問とする所を訊いてみる。返事をしてはくれるのだが、その返事を聞いた瞬間にまた忘れてしまう。訊いたということさえも忘れてしまうのだから、何時までたっても疑問は解決されない。だからまた五秒か十秒たつと前と同じ質問をする。そしてこれを何十回でも繰返すのだった。妻はもう以前に、ほかの人の場合で経験済みだったものだから、にが笑いしながら遇っている。しかしその苦

笑いが理解出来る程の判断力はないものらしかった。私のは軽かったとみえてそれでも二時間位で直ったが、長い人は半日位かかった。傍で見ているると本人が真面目でいるだけ随分と滑稽なものだった。或る人は「今日は何日です」と訊くから、「××日です」と返事すると、「では今日が火曜日、明日が水曜日と……」といって少し考え始めるかと思うとまたすぐ「今日は何日です」と始めて、それを人の顔さえ見れば繰返し、ついに寝床へ這入るまで止めなかったのもあった。それから着陸斜面を転がり落ちて来て、立上った途端に「数字がわかりません」と呶鳴って夢遊病者のようにふらふら歩き廻っていたのもあった。

眩暈 なおこれは私がやっただけで、果してジャムプと関係があるかどうか判らないが、シーズン中の或る朝、寝床の中で目を醒まして天井を見上げたら、急にグラグラッと眩暈がした。それ以来寝ていても起きていても、上さえ見れば目がまわった。多少いやな気持だったが起きている時は自分の目の高さより上を見なければ大丈夫だったので、ジャムプにはたいして差支えなかった。(飛ぶ時はいつも下さえ見詰めていればいいのだから)でも飛んでから、どんな着陸をしたろうなどと思って、うっかり　面を見上げると、すぐグラグラと来た。

どうも不便でもあり、不安でもあったので、シーズンが終るとすぐ東京へ出て、知人の紹介で大学病院へ行って診てもらった。でも中々原因が判らなかったので、幾日もかかって根気よくあらゆる科を廻ってみた。そうしてしまいには飛行家の資格テストのようなことまでして貰ってみたが、ついにその原因が不明で、従って療法も判らないでしまった。ただこの夏のトレーニングには、ダイビングを計画していたのだったが、それだけはよせと注意されたので思い止まった。

この頃は町へ出て、トラックの荷物の上へ仰向けになって気持よさそうに寝転んで行く人夫な

どを見ると、堪らなく羨しかった。その後赤城へ帰ったが、どう養生していいのか判らなかったのでそのままにしておいたら、二三年経つうちに何時の間にか癒ってしまった。

迷信の始まり　私は小さい時から迷信の類（たぐい）は嫌いだった。「日」とか「方角」とかいうものを、凡そ一遍でも気にしたことはなった。

スキージャムプをする人達の間に、迷信があるか、ないか、それは知らないが、私自身「これが迷信の始まりかな」と思うようなことを経験したことはあった。

私の叔父の一人は軍人だった。日清戦争、北清事変、日露戦争と三度戦争に行った。歩兵の将校だったので幾度となく前線へ出て白兵戦をやったが、運がよかったとみえてついに一度も負傷しなかった。その叔父の思出話にこんなことを聞いた。

前線にいて、いざ出発という時に、「今日は相当手強い戦いになりそうだな」と思うと、つい以前の激戦の時着て出た服を着て行きたくなる。つまりそれは、「前の激戦にこの服を着て戦って無事だったのだから、こんどもこの服を着ていれば無事に戦えるだろう」というような気がする。そして「馬鹿なこと」と思いながらも、ついその服を着て行くことが多かったといって、「あれが迷信と云うものの始まりかと思ったことがある」と述懐していた。

日本で最初の頃の飛行家が、よくお守りを持って飛ぶとか、誰々は姓名判断で改名したとか、また四の数字のつく日を嫌ったとかいう話を聞いて、別にそれが悪いとも思わなかったが、もしも自分が飛行機に乗るようになっても、それはやらないだろうと思ったことはある。

しかし前の叔父の話を聞いた時は、如何にもありそうなことだと同感出来た。事実私もジャムプがうまく行って、いい距離の出た時着ていたセーターや手袋なんかを不思議と覚えていて、同

じ様な気持を経験したこともあるし、また反対に、酷い目に遭った時着ていたものは、何とはなしに敬遠したくなるような気持もあった。それればかりでなく、ジャムプスキーを担いで登って行く途中、何の気なしに或る木の枝へスキーを立てかけておいて小便をしながら、「この前転んで酷い目に遭った時も、この枝にスキーを立てかけて小便をしたっけ」というようなことまで覚えていて思い出すことがあった。

更にそれが段々昂じてくると、他人のことまで気になって「この前ここでこうやって見ていた時妻がひどく転んだっけ」等と思うと、つい少し別な場所へ移って見ていたいような気もした。然始のうちは、これも人間らしい心の弱さで、却って何か潤いのある気持だ位に思っていたが、小便し終いには、そんな気持を放っておくと、段々着るセーターや手袋の数が減って行ったり、小便する場所に制限されたりもするし、それよりも精神的に不純な雑念の跳梁する心配もあったので、「これは今のうちに直さなければいけない」と思うようになった。それからこんどは殊更に、一番酷い目に遭った時の着物を着たり、わざわざこの前痛い思いをした時と同じ場所まで行って小便したりするようにした。所がどうせその為に何事もあろう筈もないのだから、何時の間にかまた気にかからないようになってしまった。

しかしこれがジャムプであったから出来たので、命を賭す時ならどうだったろうということになると、私にはまだその経験がないのだから何ともいえないが、今からなら一度ジャムプで経験済みになっているから多分大丈夫だろうと思う。人間の心の弱さというものにも亦美しい方面もあると思うが、こんな場合にそれを甘やかしてはいけないと思う。

それからこれはただ単に癖であって、迷信とは性質が違うような気がするが、私は沓下や、特

に靴を穿く時、どうも左の足から先へ穿かないと逆なような気がするので、一寸手を出して取上げた靴が、もしも右のだと、もう一度取直して左から穿くことがある。これは別に今のところジャムプと関係もなさそうだし、大して精神的な影響もないようだからそのままにしておくが、こんなことでも、もしも癖以上になりそうだったら、矢張り矯正しておく必要があると思う。

それにこれはほんの一寸したことだが、その頃の私達のジャムプ練習時代の懐しい思い出の一つである。なお沓下のことに就いては後に詳しく話すつもりだが、私はその頃スキー用の沓下の研究にも没頭していた。それでジャムプの練習から帰ると地下室のストーブのある部屋でよく編物をしていた。あんまり私が熱心に編んでいたものだから、女も男もみんな釣られて編みはじめた。

豪壮な、見方によれば荒々しいともいえるスキージャムプの練習の後で、優しい、綿密な(私達の沓下は本当に綿密なものだった)編物などすることは、結果として心を落着ける上にも多少の効果のあるものだと思った。

烈しい練習で疲れて帰って来て、みんな暖かい部屋へ集まってくる。そして真黒な顔をした男達が朗かに、今日のジャムプの話などしながら編物をはじめる。するとその傍でこれも黒い顔の女の人達が紅茶を入れてくれたり、いいレコードをかけてくれたりする、こんな風景は、一寸浮世離れのした、楽しい、和かな気分を醸し出すものだった。

第五シャンツェを作る　中位な第四シャンツェで、落着いて練習するようになってからは、あまり怪我もしないようになった。台や斜面を手入れする時のこつも漸く呑込みかけて来た。大きい台の春の練習の時など、慣れてきてその急所だけを丹念にやるようになった。労力が足りない

からということもあったが、着陸斜面の雪が段々消えて来ても、台に近い辺りはもう放っておくようになった。しまいには台から下二十五米位は土のこともあった。踏切ってフライトへ出ると足の下は土で、向うの方に着陸斜面の雪が見えている。というとちょっと大袈裟の言葉のようだが、本当にそんな感じのこともあった。でもこの頃はもうそんなことぐらい、あまり不安も感じないようになっていた。決して加減して練習した訳でもなかったのに（毎日飛んだ回数も距離等も記録していた）、百数十回、半月以上に亙って一度も転がらないということもあった。

飛び始めてから三年目の昭和三年には、待望の四十米を越せるようになったので、更に第五シャンツェの設計を思い立った。なお当時、ほかでまだ四十米を越す練習をしているという話は私の耳へ入らなかった。

それから雪が消えると、また新しく測量をし直して設計を始めた。また長いことかかって設計が出来上ると、思い出の多い第三シャンツェを取崩して、その近くに新しく第五シャンツェの工事に取りかかった。これは第三シャンツェよりも一層規模も大きく、六十米のジャムプも可能なものになると予想された。

一寸話は戻るが、まだ雪の沢山あったこの年の三月頃だったと思う。県の学務部長の岡本さんと、体育協会長をしていたお医者さんの桑原さんが、スキーを担いで遊びに来たことがあった。家へ入ると、地下室のテーブルの上においてあったシュナイダーの「スキーの驚異」の時の「ジャムプ篇」の表紙を見て、独逸語のうまい桑原さんが「あ、靴屋の広告か」と言ったのでみんな笑い出した。そして靴の意味ではないと、大いにジャムプの効能書を述べ立てると、それでは行って見ようということになり、早速清水の台へ出かけて練習をはじめた。所が多分三十米前後の

ジャムプだったろうと思うが、スキージャムプというものを始めて見た御両人は、すっかり感心してしまったことがあった。

この時以来、県庁でもスキージャムプということに関心を持ち始め、この第五シャンツェの工事に着手する頃は、私の新しい計画を認めて経済的にまで大きな援助をしてくれるようになっていた。そのお蔭で、こん度は五十人程の人夫を集めて工事を進め、霜の来る頃には、当時としては珍しい大きさの赤城シャンツェが出来上ったのだった。

第六シャンツェを作る　なおこの計画の途中、冬大きい台の練習をしている時でも、お天気の悪い日や一寸した時間に踏切の稽古ぐらい近い所で出来るといいと思ったので、家の庭へも小さい台を作ることにした。所がどう工夫しても斜面が短か過ぎるので、ありったけの斜面の長さを着陸だけに使うことにして、その上へ細長い家を作り、その屋根をアップローチにして庭へ飛び下りるようにした。これはマキシマム十六七米の小さな台だったが、便利な位置だったので、その後かなりみんなに喜ばれた。

アップローチにした家はスタートの辺りでは充分三階になる高さがあったので、中にいくつかの客間を作り、ベランダや、バルコニーをつけて面白く利用することが出来た。私達はこれを第六シャンツェと呼んでいた。

五　二つのジャムプ大会

ジャムプ大会　やがてまた第四シーズン目の雪が近づいてくる頃、私達は天来の吉報を耳にした。それは大倉さんの招聘でノルウェーの選手が来朝するということだった。その上、ことによったらその選手達が赤城山へも来るかも知れないという耳寄りな話だった。

十二月になると、その為の下検分という訳だかどうだったか、前年、サンモリッツのオリムピヤシャンツェや、オスローのホルメンコーレンで活躍していた麻生さんが、第五シャンツェを見に来た。同氏には多分前にも一度位会ったことはあったと思うが、また改めてあちらの色々と参考になる話をゆっくりと聴くことが出来て大分元気附けられた。

愈々雪が来て、真白になった第五シャンツェの手入れをしてみると、我ながら見惚れる程立派なものになった。八分の自信はあったが、飛んでみると予想通り工合がよかったので涙の出る程嬉しかった。

そのうちに愈々赤城へもノールウェーの選手達が来るということが略々確実な話になって来た。その上、この年の高田の全日本選手権大会に出場した一流選手が一緒に来て、赤城山でジャムプ大会をやるということになった。何でも朝日新聞社後援、県体育協会主催というようなことだったと思う。

私達は躍り上って喜んだ。だがそれからというものは、練習と大会の準備のために目のまわる様な忙しい日が続いた。

やがて大会間際になると、主催者側の県の人達も登って来たし、前日には日本の選手達も集まって来た。麻生さんはこの時もまた少し早くから来て、まだ実際を知らなかった私達を指導して、シャンツェの手入れその他、何くれとなく骨を折ってくれた。大会に際して幸いに大過なか

ったのもその御蔭が大きかったと思う。
愈〻大会の当日になると、驚く程大勢の見物人が集まって来た。何処からどう聞き伝えてこんなに来たものか、雪の赤城にこれだけの人が集まったのは、開闢以来始めての事に違いなかった。
私達が台の手入れを終えた所へ、大勢の人達と一緒に、ノールウェーの選手三人が登って来た。ヘルセットが一日見て満足していたという話を聞いて私達も嬉しかった。
間もなく準備も整ったので大会は開始された。お天気は曇っていていい方ではなかったがみんな元気でよく飛んだ。私もシャンツェの設計者だというので最初に飛ばされた。しかし私の何よりも楽しみにしていたのは、ルード達二人のジャムプだった。一番いい場所から見るつもりで、私は台の横の少し離れた所に陣取って待ち構えていた。ついに番が来て二人が飛んだ。たしかによく見ていたつもりだった。何でも私達のジャムプとは少しものが違うという気がした。素晴しく張りのあるジャムプだと思って感心した。だがそれだけだった。
あんなに楽しみにしていて、果してこの二人の技法の、何を見届けることが出来たろうかと、私はあとで考えてみた。だが、何も分明(はっきり)したものが印象に残ってはいなかった。よく覚えていたのはたった一つ、コルテルードがアップローチを口を開いて滑って来た、ということだけであった。
これではあまりに情けないと思ったが、何処へ尻の持って行きようもなく、自分の腑甲斐なさを諦めるよりほか何とも仕方がなかった。しかしそれよりも同じ様なお仲間だと思って、楽な目で見ていたせいか、北大の元気な学生達や、樺太の若い選手達の飛び方の方が、却っていい参考

になったような気がした。

ヘルセット達と飛ぶ　あっけなく大会も済んで、山はまたもとの静けさにかえった。私達が面白かった色々な思出話を繰返しながら練習を始めた所へ、また更に思いもかけない吉報が齎され た。こんどは近日中に、秩父宮、高松宮両殿下の台臨を仰いで、台覧ジャムプをするという知らせであった。

私達一同、身に余る光栄に感激したことは勿論だった。両殿下御揃いで赤城山へ御成りになるというようなことも亦、開闢以来初めてのことだった。私達のスキージャムプがこんな結果を生み出そうとは、全く夢想も出来ないことだった。私は生前、心配ばかりかけていた七年前に亡くなった母に、せめて今日まで生きていて貰いたかった、と沁み沁み思った。そしたら、あの生真面目な母が何と言って喜んだことだろうと、それを想像すると残念でならなかった。

しかし私達の喜びはまだそれだけではなかった。この前の大会の時には日帰りにしたノールウエーの選手達が、こん度は一両日の余裕をもって泊りがけに来るということであった。

私達は待ち侘びたその日の夕方、練習が済んでからヘルセット達を迎えに、みんなして峠の下まで降りて行った。もう前に顔馴染でもあったし、こんどは日本の選手の数も僅か三四人だったので、もう大会などという気分ではなく、言葉こそ通じないが御互にすっかり親しい気持になってしまって、みんなニコニコしながら坂を登って暗くなる頃家へ帰った。

私はスキージャムプを始めて以来、この三四日程楽しかった日の思い出は、前にも後にもなかった。翌日はいいお天気だったので、朝から出てみんなして庭の第六を飛んだ。二人のルードは流石にうまかった。各〻かなり違った感じのジャムプをしていたが、同じように見事だった。私

はそれを見て、何時になったら日本人もこの程度のレベルに達しられるものかと思ったが、事実はこの日一緒にいた秋野さんの、その後の献身的な努力によって、余りにも早くその日の来たことはこの上もない欣びでもあり、日本人として真に力強い限りである。なおこのことは、ジャムプ以外の一般のスキー技法にも大きな示唆を与えるものだと思った。

そのうちに、すっかり機嫌をよくしたヘルセットが、コルテルードのジャムプスキーを穿いて飛び出した。あまり脊が高いのでシャンツェが小さく見えた。大してうまいという程でもなかったが、みんなも悦んで思わず喝采した。何でもヘルセットは、これが日本へ来て初めてのジャムプであったばかりでなく、ノールウェーにいても、もう五年位一度も飛んだことはなかったのだということだった。

暫くしてこん度は第四シャンツェへ行った。ルード達のジャムプは台が大きくなる程冴えて見えた。前の大会には心の落着きがなくて見ても解らなかった二人のジャムプの細かい所も、私はこん度こそよく見ることが出来た。そのうちにコルテルードが、クニックの近くまで飛んで、前を用心しながら特別に大きなテレマーク姿勢で、安定な着陸をして行ったので私達は感心した。

夜は地下室のテーブルの上で交る交る腕押しをしたり、レコードをかけて遊んだりした。スネルス、ルードが、グリーヒのソナタをかけて、懐しそうにして聴いていた姿も未だ目に残っている。

台覧ジャムプの前日の午後、みんなして小沼の方へ出かけて行った。私達が血の池辺りで遊んでいる間に、麻生さんとコルテルードが、地蔵岳の南側の急な斜面へ登って行った。私達が峠の上へ帰って来た時は、二人とも殆ど斜面を上り切るあたりに見えた。何気なく見ていると、突然二人の足元辺りから、雪が横に割れて滑り出した。すると見る間にそれが拡がって、幅広い大き

な崩雪になってしまった。物凄い勢で落下してくる雪の塊の動きは、遠くから見ていると、流動する水のような滑かさが感じられて、あの猛烈な破壊力などとは、むしろ縁遠い程の美しささえあった。

しかしみんな驚いてしまった。上にいた二人は倘驚いたことだろう。斜面を登ってしまってからだからよかったが、もしも途中にいた時だったらと思うとゾッとする。でもまだ全く安心という訳にはいかなかった。今のは幸い二人の下から出たのだったが、二人のいる上にはまだ大きな雪庇がある。勿論二人だってそれに気の附かない筈はない。片唾を呑んで見ていると、一通り崩雪の動きが静まるのを待って、凹凸の烈しいデブリの上を、コルテルードが矢の様な速さで斜めに南側の安全地帯へ滑って行った。麻生さんもすぐ後を追って飛ばした。

あとで聞いたのだが、麻生さんが行った時、コルテルードは内ポケットから許婚者の写真を取出していて、それを片手に麻生さんと握手して、お互の無事を祝し合ったという話だった。

台覧ジャムプ 愈〻今日は、両殿下が御登りになられるという日の朝、飛び起きて窓を開けてみたら、空には雲の子一つなく、地蔵岳の頂に美しい朝日がさしていた。

一同前橋道の峠の上まで御迎えに出て、御元気な、両殿下の御英姿を拝し、予定の時間に第五シャンツェへ御案内申上げた。

この日は前の大会の時とは違って風もなく全くの日本晴れで絶好なジャムプ日和だった。ノールウェーの選手が二人、麻生、秋野、伴の三氏と私で四人、合せてたった六人で、飛ぶ人の数こそ少かったが、みんな張りのあるいいジャムプをした。あまりお天気が良過ぎたので、雪の滑りは充分でなかったが、それにも拘らずみんないい距離を出した。ルード達は五十米を越し、私達

も五十米に迫った。それはレコードから見ても、今までの日本に嘗て前例のない大ジャムプだった。それなのに誰一人として転ぶものもなかった。三回ずつ飛ぶことになっていて、三回飛んでしまったのに、誰からともなく、またみんなスキーを担いでシャンツェへ登って行った。

時間の御予定もあらせられたので、御附の方がその趣きを言上申し上げた所、殿下にはジャムプを見に来たのだからもっと見ようと仰せられ、なお来年は日本でも五十米だね、とも仰せられた由、後で伺って恐懼した次第であった。それから私達のジャムプが終ってしまうと、秩父宮殿下には、その朝ヘルセットが献上したばかりの、まだ御足に御馴染みにならないスキーを御穿きになられて、あの大きなランディングバーンの上に御立ち遊ばされた。御附きの方が心配して駈け出して来て何事か申し上げようとした時には、もう、飛ぶような速さで着陸斜面を滑り始めていらせられた。なお、高松宮様もそのすぐあとへ御続きになって、バーンの途中から御滑り遊ばされた。御二方とも御見事な直滑降でアウトランへ出られ、逆斜面へ滑り上って悠々と御止りになられた時は、一同驚いて感歎申し上げた。

午後は一同打揃って小沼へ御案内申し上げたのだったが、両殿下には終始御機嫌麗しく、そのため私達の様な野人も伸々とした気持で、御供申上げることが出来たのは真に有難い極みであった。なおここにもう一つ、私達が生涯忘れることの出来ないのは、今はもうすっかり一人前になっているが、当時十二三の小学生だった私の次男が、道々恐れ多くも、両殿下の御間に従い奉って、色々と有難い御言葉をいただきながら御供申上げたことだった。当人の光栄は申すまでもなく、私達一同ただただ恐懼感激申し上げるばかりであった。

なお、秩父宮殿下の御健脚には驚歎申し上げるほかなかった。御帰りの時も家を出て半キロも

行くか行かないうちに、御附の方々もみんな遅れてしまって、殿下のお後へ御続き申し上げることの出来たのは麻生さんと私と二人だけだった。やがて新坂へ着いたが、あとはまだ暫く間がありそうだったので、そこから更に姥子峠へ登ってみた。

この日は珍しく、午後になっても仕合せとよく晴れ渡っていたので、峠の上からの眺めは素晴らしかった。日は既に西に傾きかけていて、斜めに差してくる光線は、附近の雪に飾られた山肌を生き生きと浮き上らせていた。遙か麓の雪のない、夜の様に暗く見える関東平野には、利根川の流れが一筋白く光っていた。

私達はそこから坂を下りて、一里程下の箕輪部落まで御見送り申し上げて山へ帰り、これで滞りなくこの晴れの大会も終了したのだった。

私達はこの思いもかけなかった光栄に心から感激したのだったが、そのあとは何故か寂しかった。或は余りにも恵まれ過ぎた幾日かの後だったせいかも知れないが。

過ぎたるもの　私はジャムプについてこの数日間に、非常に有益な幾多の貴重な経験を得られたが、そのほかに更にもう一つ大きな、稍々にがい現実的な教訓を体験した。それは誰でも知っている「過ぎたるはなお及ばざるが如し」と云うまことに平凡な事実だった。

当時の私の商売が、山の宿屋であったのだから、もしもゲレンデの設備もせず、自分達も碌に滑らないでいて、ただスキー客を集めようとばかり考えていたとすれば、それは「及ばざるもの」であったろう。

しかし又実質的な内容の充実ばかり考えて、あんまり熱心になり過ぎると、真面目なスキー家は心から歓迎するが、そうでない分子はつい疎んずる傾向になってくる。こうなると「過ぎたる

もの」になる。

このことは少し以前から感じていたのだったが、同じことの一層深刻な体験をしたのは、こんどの最初の大会の時だった。私の考えでは、ノールウェーの選手達は日本の国の御客様であると思った。その遠来の御客様を迎えての大会だから、私達は及ばないながらも、誠意を尽して少しでも手落ちのないように、またその大会に活躍する日本の選手にも静かに休息させて、出来るだけ純一な気持で競技に臨めるようにと思った。それで当日は大会関係の選手だけしか私の家へは泊めないで、あとの人には事情を話して、全部ほかの宿へ行って貰うことにした。

だから自然、県の御役人も断ったし、営林署の人達も断った。警察から来た人も断った。私の考えでは、これ等の人達は、日本の国の御客様に対しては全く内々の人だと思ったからだった。私の従ってこの私の考えは、何処からも全く文句なしに理解もせられ、協力して貰えるものと簡単にきめてかかっていた。

なお単に私の宿屋と云う商売からだけ考えれば、こんな際には折角集まって来た人達だから、誰彼構わずに一人でも多く泊まらせれば、それだけ利益もある訳だった。それをしないで、空いたままの部屋を放っておいても、大会の気分を尊重したことは、むしろ御役所あたりからは賞められてもよさそうなものとさえ思っていた位だった。しかし、現実の世の中はそう簡単な理論通りには行かなかった。この辺一帯の官林を受持っている営林署の分担区員が、ジャムプ大会があると云うので大勢の上役を案内して来た。また、村の駐在巡査が署長さんや部長さんのお供をして来た。そして自分の管轄内の宿屋で断られたとあっては、案内役の面目は丸潰れとなり、自尊心が台なしにされてしまうことになる。誠に御気の毒な立場の人達を拵えてしまったものだっ

た。私にそこまで気が附く賢明さがあればよかったのだが、結局、人の感情を害したことは、私の考えの至らなかった為というよりほかなかった。

なおこれで私達のささやかな誠意が、この大会に果して何れだけ役立ったか立たなかったか、それは判らないが、私としては自分の気の附いた範囲に於て、一番いいと信じる所に従ってやったのであった。しかしその結果はこれも亦明かに「過ぎたるもの」であったと思う。世の中の義理人情はジャムプよりもむずかしいものだと思った。

五十米を目指して　その後もまだ雪がよかったので、前にも増して猛練習をした。ルードが五十米を越したのだから、自分にだって越せそうなものだと思った。それに、秩父宮様が、折角、日本でも来年は五十米だと仰言ったのだから、来年なんかを待たずに、今年のうちに是非越しておきたいと云う気持になった。あとで思えば、その気持に腰の浮いた所があったような気がする。

それから数日後の練習中甚く不安定な着陸をしてしまった。むしろ素直に転んでしまえばよかったのかも知れないが、それを強引に頑張って無理に立って行った。しかし既に大きく崩れてしまった姿勢は、年をとって身体の利かなくなってる私の力ではついに持ち直し切れなかった。そのまま怪し気な腰つきでクニックを越してアウトランへ出てから、しどろもどろになって前へのめり込んで行った。そこはもう殆ど平地のような緩斜面だったのに、三四回もんどり打った様だった。実に下手な、そして猛烈な転がり方だった。

みんなが心配するといけないと思って、痛いのを我慢して「大丈夫だ」と言いながら立ち上ってみた。しかし自分にもやっと聞える位な嗄れた声しか出なかった。立ってはみたもののあんま

り痛いのでまた雪の上へ寝ようと思った。だがもう一寸でも身動きすると身体中に耐えられない程の激痛を感じるので、転ぶことさえ出来ないで進退谷まって立往生してしまった。それからみんな心配して駆け附けて来てくれた人の手を借りて、やっと雪の上へ寝せて貰った。

あとで家へ帰ってから数えてみたら、この一転がりで捻挫と打撲で痛む所が九カ所あった。まだ骨折をしなかったのがせめてもの仕合せだったと思う。だがこれで取返しのつかないことをしてしまった。と云うのは、愛用の二貫五百匁近くもあった手製の大事なスキーが両方とも折れてしまった。バッケンは曲り、フィットフェルトの皮は切れ、頑丈なオーストリー製のエレフゼンの尾錠も一つは折れて飛んでしまっていた。

やっと家まで連れられて帰って、エキホスや、サロメチールを塗って床に就いた。暫くはレコードをかけて貰ったり、またこの間中の面白かった話をきいたりしながら、痛さを怺えて、雪の反射で明るい天井を眺めていたが、連日雪の上へ出る癖のついている身体には、いくら痛くも昼間寝床の中に我慢しているのは辛かった。それで、さんざみんなに止められるのも聞かず、ほんの一寸だけだからと言って、痛い足にやっとの思いで靴を穿かせて貰い、軽い山スキーを穿いて、妻と紋ちゃんに両側から支えられながら、虫の這うようにして湖水の上へ出て行った。

非常に静かな夕方だった。空気は澄み、空は冴えて、沼向うの外輪山は斜陽に深い襞を見せていた。黒檜山は身体一杯に夕日を浴びて慈父のような温容で、小さな私達を見守っているように見えた。私は子供の時から黒檜山が大好きだった。今までにも何度キャンバスの上にその肖像を描き、何十遍カメラのレンズを向けたか判らなかった。殊に秋の終りになって、木の葉の散ってしまった後の落着いた灰色の姿と、冬の雪に覆われた時の素朴な恰好は私の心を強く惹いた。

それなのにその黒檜山を、冬も終りに近づこうとする今、しかも毎日何処のシャンツェからも見えていた筈のその顔を、「この冬になって始めて見た」と云う気がした。すると急に何か昔懐かしい気持が湧いて来て、次から次へと子供の頃のことまで思い出された。やがて亡くなった母の面影もありありと頭に浮かんできて、甘い涙が頬を伝って流れ落ちると、身体中の痛みが快よく疼いて来た。

妻が心配して「もう帰りましょう」と促したので、惜しかったが帰途についた。家の近くまで来て振返って見たら、黒檜山の胸のあたりに、色褪せた夕映えの光が寒む寒むと残っていた。

大島行　これでこのシーズンは、身体の方が早く恢復したとしても、もう五十米を越す望みはなくなった。それは自分の身体によく合った、重いスキーをなくしたからだった。私は早くまたいいスキーが欲しいと思った。それから二三日はおとなしく家で我慢していたが、妻の肩に掴って散歩に出る位がせいぜいで、当分は小さいジャムプも出来そうな望みもなかった。どうせなら、この間にいいスキーでも探したいと思ったので、跛を引きながら妻と一緒に東京へ出てみた。

痛い足を引摺って心当りの運動具屋を廻ってみたが、もうシーズンも終りなので思うようなスキーは得られなかった。

この身体ではまだ赤城山へ帰っても飛べないし、ほかのスキー場へ行ったところで山スキーも駄目そうだった。それで仕方がないからもう諦めて、方向を換えて久しぶりで大島へ渡ってみた。雪の気もない三月の大島は、すっかりもう春めいていて、何処か遠い国へ渡って来たような気持がした。磯臭い浜の匂いも久しぶりだと思った。十四五年前まだ母が在世の頃、子供達と一

緒に一冬借りていた、泉津の家へ行って見たら、人の住んでいる気配はなかったが、家の様子も、前の畑も、その周囲の柵もまだその時のままの姿だった。懐しさにあたりを見廻している と、裏の崖の上の松林に当る風の音も、その崖下から聞えてくる砕ける波の甲高い響きも、胸に応えてくる聴き覚えがあった。私は思わず耳を澄まして、熟とその音に聴き入っていたら、そこらの物蔭からひょっこりと母が出て来そうな気さえして来た。

しばらくは妻を相手に、思い出の昔話をしていたが、ふと思い出して、昔時々買物に行ったこの村で唯一の雑貨屋へ寄ってみた。あの頃いつも親切によく世話をしてくれた、いい娘さんがいた筈だと思って見たら、確かに昔の面影はあるが、もうすっかり、おばさんらしい感じに落着いてしまったその人が出て来て、向うでもまだ覚えていた。暫く、と挨拶をすると、お母さんは、と訊くから、あの時はさんざ御世話になったが母はもう亡くなったと話したら、まあ、と驚いて寂しそうな顔をした。この頃は私も何故か妙に感傷的な気持になるようになっていた。

三原山　私は大島へ来ると、どうしても一度は三原山へ登らないと気が済まなかった。それに妻はまだ始めてだったので、二三日してから、跛を引きながら緩くりと、湯場まで登って行った。この日もよく晴れていたので、広々とした海の向うの伊豆半島から、富士へかけての景色は、雪ばかり見ていた私達の目には珍しかった。

湯場の噴気孔を利用した蒸風呂も、昔はただ岩穴へ格子を敷いただけの簡単なもので、中へ這入って入口の鉄の扉を閉めると、いやに荘重な、があーんと云う音がして急に真暗になるので、何だかもうこれで、永久に閉じ込められてしまうような心細い気がしたものだったが、もうすっかり改造されてそんな凄味はなくなっていた。

翌朝は早く湯場を出て登って行った。外輪山の尾根から中を覗いて見ると、私の好きな頂上附近一帯の沙漠の眺めは、昔と変らず懐しいものだった。しかし火口丘の上へ出て見ると、まるで様子が違っていた。私は昔のことを思い出して、見覚えのある個所を探し当てようとして、辺りを見廻したが駄目だった。

私がまだスキーを知らない前だったから、もう随分古い時の話だが、私は二三人の画家の友達と一緒に、大風の吹く日にここへ来たことがあった。それは矢張り冬だった。ここまでやっと登って来たが、寒いのと砂が飛ぶので御弁当も拡げられなかった。それで私は内輪の崩れかけてる壁を伝って、風の当らない所がありはしないかと思って、少し下りて行った。見ると途中に大きな岩穴があった。最初見た時は崩れやしないかと何となく不安な気がしたが、這入って行って調べてみるとそんな心配もなく、思いの外落着いたいい所だった。穴の中は風もなくって暖かだったし、砂埃もここまでは飛んで来なかった。怖がるものもあったが、無理にみんなを連れて来てそこで握飯を食べた。しかし食べ終る頃には、みんなも馴れて来て平気になっていた。

私はまた何の気もなしにその壁の割目を伝って少しずつ降りて行ってみたら、とうとう内輪の壁を下り切って火口底まで出てしまった。周囲の断崖を見上げると一寸凄味があると思った。でも何となくいい気持だったので下から「面白いぞう」と呶鳴ったら、そのうちにみんなも降りて来た。そして始めは左右を見廻しながら恐る恐る火口底へ踏み込んで行ったが、段々ずうずうしくなって来て遊び出してしまった。そこからつい百米程先の、また一寸盛り上った様な小山の上からは、猛烈な勢で噴気していた。その噴気孔の周りには焼け爛れたような黄褐色の硫黄が附着していて、物凄い形相を呈していた。私はその硫黄の塊が一つ欲しいと思った。

小さい噴気孔は足下の到る所にあった。冷たい手をそこへ翳すと、ほんのりと暖かくっていい気持だった。誰かがそれをマントで蔽って炬燵だなんて言っていた。私にはその火口底の、生々しい有様は百パーセントの魅力があった。あたりは色こそ黒褐色だが、丁度捏ねたての粉のお団子か、搗きたての餅でも引きち切って、そこへ叩き附けたような恰好の巨大な熔岩で一杯だった。一寸触ったらまだ指の跡がつきそうなので、つい突っついてみると堅いので驚いた。

みんないい気になって暫くそのお団子のような石の上を飛び廻っていると、風の吹き廻しで急に噴煙がこちらへ、大袈裟に覆い被って靡いて来た。みんなそれに噎せて咳が出たので、誰かが窒息しやしないかと言い出した。すると火山の煙なんかに就いて、何の予備知識もない私達は、俄かに怖気がついてきて慌てて逃げ出した。私もみんなの後について一旦駈け出したのだったが、走り出すと、先刻見たあの焼け爛れた硫黄がまた欲しくなった。だからその場の事情が困難になればなる程、一層興味は大きくなる訳だ。そこで又取って返して逆な方へ向って走って行った。足場の悪い石の上の、煙の下を掻い潜るようにして噴気孔へ辿り着き、夢中で一塊の硫黄を掴み採ると、機関車の安全弁が百も一度に吹き出したような烈しい音に追いかけられながら、死物狂いで逃げ出した。

でも結局崩れかけた内輪の壁の下へ来た時には一番遅れた一人に追い着いたし、頂上へ出てみたら私が一番先だった。しかも右の手にはちゃんと硫黄の一塊を持っていた。

私はその晩床に就いてから、「何故あんな馬鹿なことをしたのだろう」と考えた。いつか母に、「お前は畳の上では死ねないよ」と言われた言葉などを思い出した。「今日の行動はきっと、

別に何の危険でもなかったのであろう」「だがそんな気持を持ち続けている限り、何時本当の馬鹿馬鹿しい危険に曝されるか知れない」「なおそうした気持は、単に一時的なこの種の問題だけでなく、自分の将来の社会生活にだって、同じ様な危険な結果を齎すかも知れない」、そう思いながらその時は大いに悟った様な気持になって、眠りに就いたことがあった。

そんなことを思い出して妻に話しながら、また執念深くあたりを見廻してみたが、何処がどうなっていたのやら、さっぱり見当も附かなかった。ただ以前よりずっと物凄い感じになっていて、もう壁を伝わって下りるどころではなかった。その後いつも新聞で、ここの火口へ飛び込んで自殺すると云う話を読んで、何処からどう入るのだろうと考えていたが、成程これではやりいい筈だと思った。

それでもまだ中が一目見たいのだが、危くって思う程縁まで出られなかった。そこでリュックから繩を出して腰のバンドを縛り、後で引張って貰っていて、這い出して行って火口の中を覗いてみた。その日は煙が渦巻いていて底までは見えなかったが、厳めしい垂直な断崖の遙か下の方が煙の中へ消えてしまってるのは却って凄味があると思った。妻は一目覗きかけてみたが、足の裏がムズムズして駄目だと言ってよしてしまった。

私達はそこから波浮へ下りて泊り、また浜伝いに元村へ戻って来た。二三日すると身体も大分よくなって来たので、郵便船で伊東へ渡って赤城山へ帰った。

六　赤城山を出る

立山行　大島から帰るとまた暫くの間、清水の台で練習した。しかし身体もまだ本当に恢復していなかったし、それにスキーの軽いのが気になって思うようには飛べなかった。そのうちに、いくらかスキーにも馴れて、元気が出て来た頃にはもう雪が消えてしまった。

何かの手紙の序でに、麻生さんへ、もう少しジャムプの練習がしたい、と書いたら、それでは立山へ入ろうかと云うことになって、忽ち相談が纏まり、五月の上旬に妻と三人で弥陀ヶ原へジャムプスキーを担ぎ上げた。まだこの辺りには豊富な雪があったので、私達は弘法の小屋の裏の谷へシャンツェを作って、半月ばかり飛んでいた。その終り頃にとても暖かい日があって、雪の滑りがわるかったものだから、急に思い立って、昼から山へ登ろうと云う相談をした。人夫達は今からではとても無理だから、「明朝早く出て登った方がいい」と再三勧めていたが、私達が、駄目なら途中から引返してもいいが、「このお天気を遁す手はない」と云ってきかなかったものだから、ついに仕度して出かけることになった。

麻生さんは駄穿きの山スキーも、アイゼンも用意していたので、一人の人夫を連れて剣へ行くことにした。私と妻はもう一人の人夫と一緒に雄山へ向った。スケールの大きい弥陀ヶ原の緩い斜面を登り切って、今の天狗の小屋の辺りで両方へ別れた。

出る時は自分でも少々無理な時間かなと、案じていたが、お天気がよかったのと、春の日長のお

蔭で、丁度夕映えの色の美しい頃雄山の頂上へ着いた。頂上からの雄大な展望は非常に立派だった。見ているとあまり美しいので凄味さえ感じた。妻は山の大きさに威圧されて怖いと言っていた。殊に足元の急斜面から続く黒部の谷を見下した時は、言いようもない感激に打たれた。何処を見ても、とても真昼では見られない眺めだったので、私達は遅く出掛けて来た僥倖を喜んだ。何時まで見ていてもあきない景色ではあったが、もう日暮が迫ってきているので、そう長くは止っていられなかった。帰ろうとして仕度をしていると人夫が、「女で雪の雄山へ登ったのは貴女が始めてだ」と言った。私は、「それよりも一の越まで、ヒッコリーの三本溝のジャムプスキーを、夫婦して穿き上げた奴はまだないだろうし、これからもきっとそんな馬鹿はないに違いない」と言って笑った。

しかしそのジャムプスキーの御蔭で帰りはとても楽だった。室堂へ一寸寄って、軽い夕食をしてまた出掛けた時はもう暗かった。

斜面は広いし、たいして急でもないし、そこをジャムプスキーで飛ばすのだから全く快適な下りだった。途中まで行くと月が出かかってきて、大日岳の頭が美しく輝き始めた。国見の肩も明るくなりかかって来たと思ってると、見る見る、微かな月の光が斜めに長く浮き出して来た。

凍りかかったザラメ雪は申し分なくよく滑る。どうせ暗いのだから足元は見ようとしたって見えない。でもスキーが大きいお蔭で全く安定だ。左右の山の夜の景色を眺めながら、大船に乗った様な気やすさで滑って行った。

こちらはそれでよかったが、人夫のスキーが滑らないので弱った。出かけて五分も滑るともう見えなくなってしまう。そして寒くなる程話しながら待っていると、一生懸命杖で漕ぎながら息

を切ってやってくる。気の毒でならなかったがどうしようもなかった。
その人夫は八郎と云った。その時もう相当な年配だったがおとなしくって親切な、実にいい人間だった。麻生さんと剣へ行ったのは福松だった。これも少し、のんびりしていたがとても気のいい男だった。
ずっと後の話だが、私が千島から帰って、また立山へ行った時に訊いたら、気の毒に福松は人を助けようとして地獄谷の毒瓦斯の中へ落ち込んで死んだが、八郎の方はまだ丈夫でいると云う話だった。昔さんざ世話になったのだから、会って行きたいと思ったが、時間の都合でついそのまま帰って来てしまった。それからその翌年の春また行ったので、こん度こそはと思って訊いてみたら、その年の冬、雪の谷間へ滑り落ちて惜しくも死んでしまったと云うことだった。私は何だか取返しのつかない、悪いことをしてしまった様な気がしてならなかった。
追分の近所まで来ると月が高く上って明るくなった。スキーもよかったが、ラックがうまく利いていたので妻のスキーが一番よく滑った。小屋の近くまで行ったら先へ行った妻が、あたふたと慌てて引返して来た。精を切っているので、「どうしたの」と訊いてみると「熊らしいものがいた」と言う。「そんな筈はなかろう」と言いながら行ってみたら、それは福松について来ていて、少し間の抜けた大きな犬だった。
翌日になって帰って来た麻生さん達は、剣もとてもよかったと言っていた。
五月も末になったら弘法の裏の台も段々雪が滑らなくなったので、諦めて山を下りることにした。途中称名の滝の向側辺りで、ほいほいと云う人声がするので、あれは何だと訊いたら、熊を追ってるのだろうと言っていた。その晩、下の村へ泊ったら夕食に肉を馳走してくれた。卵など

かけてあって、おいしかったが、あんまりその量が多いので、何の肉だろう、と話してる所へ丁度御上さんが上って来たので、訊いてみたら熊だと言った。それを聞いて妻はびっくりして「あれどうしよう」と言ったが、もうその時は半分位食べてしまった後だった。それから追分の下で犬を熊と間違えた話が出てみんなで笑った。

妙高へ登る　それから和倉温泉へ寄って二三日休んでから高田へ出てみた。だがまだ私達は赤城山へ帰る気になれなかった。それでジャムプスキーだけ先へ送り返しておいて、ゾンメルシーを買って関温泉の速雄さんとこへ行ってみた。その翌日速雄さんに案内して頂いて妙高へ登った。帰りの雪溪でゾンメルを穿いて滑ってみたが、ジャムプスキーに慣れた足には全で張合いがなかった。そのせいか私達はそれ以来一度もまだゾンメルを使おうと思ったことがない。

関山の駅まで下りて麻生さんとお別れした。だがまだ私達の足は赤城山へ向おうとはしなかった。それでまたゾンメルも先へ送り返しておいて、一度日本海の海岸へ出てから、栃尾岐の温泉へ行った。行く時はそこから銀山平へ出て、尾瀬を廻って赤城山へ帰ろうか、と話していたのだったが、いざとなると未だ出掛けるのが億劫だったのでそこに二三日滞在していた。

ここの宿の庭に、この春、銀山平から掴まえて来たと云う熊の子が一匹繋がれていた。まだやっと猫位しかない小さな身体をしている癖に、真赤な口を開いて湯治客の女達を追いかけて、キャアキャア言わせていた。時々そこへ自分の身体の七八倍もある大きな犬が傍へ来るのだが、「何だ犬共か」といったような顔をして臆揚な態度をとっていた。この場合、もしも犬の方に積極的な敵意があったとすれば、一撃のもとに自分の命は無くなってしまうのに違いないのだが、見ている私がハラハラする程傲然と構えていた。それは生れながらの気位とでも云うか、伝統的

な性質の遺伝とでも云うか、何の力がそうさせるのかと思いながら、私は二階の窓の手摺に寄り掛って何時までも眺めていた。

祖父母　私はそのうちに、ふと、こんなことを思い出して考えていた。

私の祖父は四国の伊予の産で、祖母は岐阜の人だった。その二人が何処でどうして知り合ったかは分らないが、兎も角も一緒になって東の方へ歩き出した。何をしながら、どの位の時日を費して行ったかも聞かなかったが、途中いくつかのお関所を越して北へ北へと旅を続けて行った。汽車も何もないその頃の旅は、色々と不便もあったに違いないが、また嘸楽しかったことだろうと、私はいつもそのことを想う度に羨ましい気がした。そして何かしら祖父母に対して朗かな親しみが感じられるのだった。

祖父母達は、やがて長いことかかって秋田まで行った時、「国を出て何百里とか来た」「もうこの辺でそろそろ戻ろうか」と言って帰途に就いたが、上州の前橋まで帰って来たら蓄えの路銀がなくなってしまった。そこで祖父は漢学者で俳諧師だったし、祖母も漢学をやっていたので、とりあえず小さな塾を開いた。暫くそうしているうちに、段々知られて前橋藩の殿様に仕えるようになり、明治の初年の頃には赤城神社の神主になって、赤城山へ登って行った。それが始まりでとうとうそれ以来上州の住人になってしまったのだと云うことを、私は子供の時よく母から聞かされた。

当時の新婚旅行としては、どうも少し大袈裟過ぎる気がするし、何のためにはるばる秋田辺りまで行ったか、今はもう訊く訳にも行かないが、兎も角も私はいつも愉快な話だと思って聞いていた。

祖父母とも丈夫で長命の方で、どちらも七十を越して、私が十三か十四の時、同じ年の秋、第二の故郷の前橋で亡くなったが、今にして想えば、その二人の亡くなり方もよかったと思う。祖母の方はその数年前から少し弱って床に就きがちだったが、祖父の方はとても丈夫で、亡くなる年の夏、飄然として足駄穿きで赤城山へ登って来た。そして翌朝湖水へ行くと言うから、顔でも洗いに行くのだろうと思って、私も後をついて行ったらいきなり裸になって、ジャブジャブと冷たい湖水の中へ入って行ったので驚いたことがあった。

それから祖父は山を下って、麓の村や、町や、東京辺りに散在していたお弟子さんの所を、一渡り片端から丹念に廻り終って前橋へ帰り、帰ると間もなく風邪気味だと言って床に就いたが、幾日も経たないで、本当に眠るようにして息を引取ってしまった。すると祖母もそれに力を落してか、半月も経たない同じ月のうちに、老木の枯れて行くようにして祖父の後を追った。二人共善良な質の人だったし、仕合せな人生を送った人達だったと思う。

祖父の道楽は俳諧と行脚だったと云う。してみると私の血の中にも祖父母からの隔世遺伝があるのかも知れない。私は学者でもないし、俳句も作れない。けれど行脚と云うものの気持だけは解るような気がする。

何も今更祖父母達の真似ではないが、自分達も秋田の方へ行ってみたくなった。そこで銀山平行きは止めにしてまた日本海の方へ出た。それから裏日本を段々と北上して、何時の間にか秋田も通り過ぎて青森へ出てしまった。これがずっと歩いたのなら素晴らしいのだが、俳句も作れない私達は、俗人らしく、車窓から外の景色を眺めて、あの斜面に台を作ったらいいシャンツェが出来るだろうなあ、などと思いながら、汽車へ乗ったり下りたりして行ったのに過ぎなかった。

七　北海道へ渡る

駒ケ岳へ登る　ここまで来るともう赤城山のことは忘れ勝ちだった。私達は海を越えて北海道へ渡った。先を急ぐ旅でもないので、先ず大沼の岸の宿へ落着いて駒ヶ岳へ登ってみた。私は活火山が大好きだった。度々大島へ行ったのも三原山の魅力が大きかったのかも知れない。かって阿蘇の火口壁の美しさに魅されて、何時迄も一人でその縁に立ちつくし、雨が降りかかってもまだ帰ろうとしなかったこともあった。

だから駒ヶ岳の上もすっかり気に入った。釘のない滑り勝ちなスキー靴で、砂礫の急斜面に足場を切りながら、煙の吹出す穴の中を一つ一つ丹念に覗いて歩いた。そして「これっぱかりしか煙が出ていないのに、なんて底力のある音がするのだろう」などと話していた。そのうちに昼になったので、その中で最もいい音のする穴の前で腰を下してお弁当を食べた。お天気はよかったし、面白かったので、帰ろう帰ろうと言いながら、つい四時間程遊んでいた。

所がそれから丁度十日目の朝だった。私達が札幌の駅で汽車を待っていたら号外が出た。買ってみると、駒ヶ岳の大爆発と書いてあったので、私達はびっくりして顔を見合せた。そして「あの時空へ吹上げられたらどうだったろう」「そうしたら上で手を廻したろうか」（スキージャムプでは、安定を保って飛ぶために空中姿勢で手を廻す）などと話しながら笑っていた。

だが考えてみると火山という巨大な活物にとっての十日間は、私達の時間にしたらほんの一瞬

という位のことになるのかも知れない。「もしもあの時私達がその道の学者だったら、爆発することが予知出来たろうか」「だからあんなに底力のある音がしていたのだろう」、こんな話も出たが、無論私達に解決の出来る問題ではなかった。そしてその時は、そんな話をしただけで、たいして怖いとも思わないで済んでしまった。

それから一年程経ってからのことだった。私は友人の家で偶然或る科学雑誌の口絵に、この時の写真が大きく出ているのを見た。ムクムクと天に冲して湧き上る巨大な煙の塊の中に、岩石の墜落しているらしい垂直な線が、分明(はっきり)と認められた。始めは綺麗な写真だと思っていたが、その線を見詰めているうちに私は急に怖くなって、お尻の辺りがムズムズするような気がして来た。勿論満足な身体で空へ吹上げられて、この岩石のように落ちて来られる気遣いはないのだから、あながちその怖さではなかったと思う。多分その写真に鋭い実感が溢れていた為であったろうと思う。

私はこのことに就いて何時も考えるのだが、写真の生命は実にこういう所にあるのだと思う。私も拙いながら写真もやるし、絵も描いた。それで大概の場合は、所謂芸術写真というものより も絵の方が、表現する力が強いものだと思っている。だがしかし記録というような分野になると、写真の方が勝っている場合が多いと思う。早い話が、例えば如何に立派な前傾をして飛んでいるジャムプの空中姿勢でも、それが描かれたものであっては、私達に何の感銘も与えはしない。

あの十日目に札幌で号外を見た時、若しもこの写真を一緒に見ていたら「上で手を廻したろうか」なんて冗談は出なかったろうと思う。そんなことを考えながらなお写真を見ていると、段々

実感的な想像が次々と逞しく湧き上って来た。

若しも私達があの時、秋田辺りにもう十日程いたとして、丁度その爆発した日に登って行って、噴気孔の穴を覗いて歩いている時、突然、素人の私達にもそれと分るような、爆発の前兆があったらどうしたろう。勿論私達はびっくりして逃げ出したに違いないと思う。すると足場の悪い砂礫の間を、スキー靴で転んだり起きたりしながら一生懸命に走る自分達の姿が目に浮んでくる。どうせ足が長いだけ私の方が速いだろう。そしたらまた取って返して、妻の手を引いて走り出すことだろう。そうしてるうちにも刻々と鳴動は烈しくなり、大地は揺り動き、目の前の崖が崩れ出したりして、凄じい情景になるだろう。やがて私達の足は疲れ、呼吸は迫り、絶望的な顔を見合せて、それからどうするだろう。そんなことまでつい考えて来た。そして笑っていた自分達の態度が不遜であったように思えて悔やまれた。

鎖を切る　駒ヶ岳での思い出はまだ一つある。私達はさんざん煙の出る穴を覗いて歩いた挙句、こん度は外輪山の西端に聳えている、一番高い尖った峰の頭へ登って行った。ここは人の登る所ではないらしい。途中まで行くと軽い石ころの急斜面で、後滑りがして登れなくなった。それこそしまいには、一足登れば完全に一足擦り落ちた。仕方がないからスキー靴のまま右へトラバースして尾根の岩場へ取りついた。岩場にも少しは面倒な所もあつたが、どうにか先端まで攀じ登った。お天気はよかったし、相当に風もあった。それなのに、岩の途中から虫が煩くって困った。頂上へ出たら居なくなるだろうと思って行った所が、案に相違して頂上は更に夥しい虫だった。魑のお化けみたいなのや、蚊の大きいようなものが、何種類かいたようだった。別に刺す様子もなかったが、余りの大群なのに恐れをなして、こんどは行者の登るという裏側の崖を下り

ることにした。

だが頂上の見晴らしはとてもよかった。先刻歩き廻った火口原は目の下にあって、白い噴煙が点々と可愛らしく動いていた。南には箱庭のような感じのする大沼が、沢山な小島を浮べて午後の陽に光っていた。遥か東北の方噴火湾の向側には室蘭辺りの山が雲の様に霞んで見えていた。

私達は虫さえ居なければもっと見ていたかったのだが、諦めて降り始めた。狭い岩の割目の所へ来ると鎖が下っていた。私は何の気なしにそれに摑まって、一足三足降りて行くうちに、ぐっと体重がかかると私の身体が重かったせいか、何処かでその鎖が切れてしまった。「しまった」と思う途端に、鎖がガラガラッと胸元へ集まって来た。上体は完全にリュックラーゲになった。咄嗟に身を沈めながら夢中で両手を拡げたら、仕合せなことに岩の割目が狭かった御蔭でどうにか身体を支えることが出来た。そこへ青くなって駆け着けて来た妻に手を借りて辛うじて事なきを得た。私もびっくりしたが、見ていた妻の方が余計に驚きもしたし、恐怖も感じたらしかった。緊張した二人の顔に薄笑いが浮び上ってくる頃になって、ヒリヒリ痛いので気が附いてみたら、両肱共夏シャツが破れて皮が赤く擦り剝けていた。それから鎖がなくなって困るかと思ったが、下りてみたら大してむずかしい所ではなかった。自分の不注意はいう迄もないが、こんな所に鎖なんか無い方がいいと思った。

大沼の宿へ帰ってから、詰じるつもりで番頭に「あんな鎖をかけておいては危いじゃないか」といったら、何と思ったか、その返事はこうだった。「三四年前ここの家の親類のものも、あそこで落ちて死んだそうですよ。」　私はそれっきり言葉を継ぐ気になれなかった。

ヘルベチュアへ　私達はそれから小樽へ行って、冬のジャムプ大会で懇意になった秋野さんを

訪ねた。始めて伺ったのに、余り色々と家中で親切に御世話して頂いたので恐縮してしまった。小樽に数日間滞在してゲレンデや町の見物をした上、朝里の小屋へも案内して頂いたし、ヘルペチュアへも連れて行って貰った。ヘルペチュアへ行く時、私が暫くもうレコードも聴かないと言ったら、秋野さんがどんなものが好きかと訊くから、山で聴くのは荘重なものがいいと答えた。そうしたら、ベートーヴェンのミサソレムニスと第八と、それにコロムビヤのポータブルを借りて来てくれた。私は慾張ってそれを全部自分のリュックへ入れた。私のリュックが一杯になってしまったので、食料品は殆ど、秋野さんと、妻に押しつける結果になってしまったが、私はそれでも荷が重くってやっと二人の後について登った。しかしその御蔭で小屋では楽しかった。代る代る当番になって、昼も夜もかけて聴いた。私はその後もミサを聴くとヘルペチュアを思い出した。この小屋は実によく設計されていた。北大の先生をしていたスイス人が作ったという話だったが、僅か七坪半程の小さい面積なのに驚くべき収容力を持っていた。それでいて中々居心地もよかった。一方の屋根裏みたいな高い所のベッドを指して、あそこに、秩父宮様が一晩御休みになったことがある、と秋野さんが話していた。小屋の廻りの白樺の林も実に綺麗だった。裏を流れてる小川の水はまだ冷たかったが、それで身体を拭いたりした。

三晩程泊って帰りは定山渓へ下りた。秋野さんと私は万一熊でも出たらと思って、銘々短刀を用意していた。途中の如何にも熊の出そうな谷川の傍へ来た時、秋野さんが、「去年の春はここへ熊が出たそうだ」と言いながら、リュックを下して短刀を出した。私も出した。そうしたら人の好い妻が自分のリュックを捜して大形なパンを切るナイフを取出した。「それでどうするの」と訊いたら「みんなに手伝うの」と真顔で答えた。すると秋野さんが「あんたがそれを振り上げ

たら熊が笑い出すだろう」と言ったので、ナイフを振り上げている妻の恰好と、その前へ立上って笑ってる熊を想像してみんな笑いこけてしまった。

私達は山を下りてから札幌へ出た。そして大倉シャンツェの出来るという場所へも行って見た。

八　阿寒附近

アトサヌプリ　秋野さんに厚く御礼を述べて、私達は阿寒の方へ行くことにした。私達の間には、この頃はもう、赤城山へ帰る話は余り出なくなっていた。むしろ慣性の法則によって、段々と遠くへ離れて行くのが私達の常態であるような気がしてきた。

札幌を出たのは朝だったが、汽車が狩勝峠へ近づく頃はもう夕方近くなっていた。車窓から見える外の景色は、段々北海道の山奥らしい素朴な感じになって来た。新しい開墾地の所々に枝を払い落されて幹だけになった根の焼け焦げた大木が立っていた。時たま目に入る山あいの小さい部落には、追々と豊かな感じが少くなり、目につく人影も稀になって来た。駅から駅の間は遠く、汽車の速力はのろかった。その気で見るせいか、乗客の顔にも寂し気な色が濃くなってきた。谷あいの停車場を出る時、汽笛の音が両側の山に高々と谺を交して消えた。何もかもが旅愁を誘うような景色だった。私達は何ということなしにそれに心を惹かれて、狩勝峠のすぐ手前の小さな駅に下車してしまった。石ころだらけな往還の向側にただ一軒だけあった、暗い感じのす

る宿屋に入って、二階の窓から、暮れて行く山の景色を眺めていたら、如何にも自分達が、永久に流浪の旅を続けて行く哀れな人間であるような気がしてきた。

翌朝はまた汽車に乗った。汽車は同じ様な地形の所を、右に左にカーブしながら喘ぎ喘ぎ登って行った。暫くすると、やがて追々両側の山が狭まって来て、ついに狩勝国境のトンネルへ這入った。

石炭の煙に噎びながら、長い長いトンネルをやっと出抜けると、みんな先を争って窓を落した。すると、いきなり眼前に広漠とした景色が開けて来て、急に目の覚めたような気がした。トンネルへ這入る前と、あんまり景色の変り方が大きいので私達の視線は戸惑いした。この辺の車窓からの展望は流石に雄大で立派だった。汽車は開豁な帯広の平野へ向って、スラロームしながら下りて行った。

釧路から山へ入って最初に落着いたのは、屈斜路湖に近い川湯温泉だった。そこには目の前にアトサヌプリの活火山があった。宿からは二キロ位も離れているのに、風の工合で蒸気機関の安全弁が噴き出してる様な音をたてていた。私達はリュックを下すと早速また行ってみた。噴気孔はいくつもあったが、その大きいのに近寄ると蚁鳴っても話の出来ない程烈しい音だった。「この山は破裂しないでしょうね」と妻が言い出した。私は「まさか」と言って打消して、そんなことはありっこないと思いながら、あまりに猛烈なその勢いに圧倒されて、そわそわした気持が中中収まらなかった。それでも私達は歩きにくい岩角に摑まって攀じ登ったり、硫黄まじりの土の急斜面で滑ったりしながら、大きい魅力に惹き附けられて中々帰る気になれなかった。

ここの温泉はとても強くって、劇烈なとでもいいたいような感じのする泉質だった。川湯と云

う名の通り、湯が川になって流れていたが、湯槽に漬って一寸口へ含んでみたら、酸っぱくって、渋くって口が歪みそうだった。出る時も立上ってから手早く身体を拭かないと、皮膚がヒリヒリしてくるのだった。何だか劇薬の薬湯にでも這入ってるような気がした。その代り蚊や蝮子に刺された痕なんか一遍に治ってしまう。この辺の小学校の児童にはトラホームがないという話だった。

宿の人が「湯槽が出来ないで困ります」と言っていた。木では駄目、鉄でも駄目、コンクリートでも保たないのだそうだ。それで川床の岩磐に穴を掘って使っていたが、それももう周囲が腐蝕して刺々になっていた。

斜里から阿寒へ　ここで四五日の間附近の山を歩いてから、重い荷物は宿に預けておいて、北の方の峠を越して斜里へ出てみた。丁度まだ途中の山の中で鉄道の敷設工事をしている所だった。峠の向うからはバスがあった。

ここへ来たのは、今すぐ行く心算もなかったが、知床半島の山が面白いと聞いていたので、その様子も調べてみたい為でもあった。斜里も寂しい感じのする町だった。

狩勝峠附近の山あいを通る時、車窓から見た村落の景色は、時間の関係もあったかも知れないが暗い滅入るような淋しさだった。だがここの北海に面した漁村的な町の風景は、明るい白けたような寂しさであると思った。

鄙びた宿の中庭に、アザラシが一匹繋がれていた。私達は、その皮には、毎度冬山へ登る時スキーの裏へ貼って御厄介になるのだったが、こうして親しく生きて動いている姿を、目の前で見るのは始めてだった。或は動物園で見た事があったのかも知れないが忘れてしまっていた。私達

は仲よしになろうと思って暫く傍で眺めていたが、犬や猫とは少し勝手が違って、中々どうも親しめそうにもなかった。それに何か特に気に喰わないことでもあったのか、頻りに憤慨したような様子をしていた。

私達は斜里から網走へ出て、ここの海岸にも一両日滞在していたが、裏の方から廻って阿寒へ入った。その頃の北海道の、汽車の出る回数は少かったが、途中美幌から分れて入る線などは、一日に二回しか発車しないということだった。

雌阿寒へ登る　阿寒湖畔の温泉宿へ着いたのは昼過ぎだった。これから雌阿寒へ登りたいと言ったら、もう今日は時間が遅いから駄目だと言われたが、それでも折角お天気はいいし、地図で見ると大したこともなさそうなので軽装して出掛けてみた。道は思った通り山としては楽な方だった。でも楽に来られた割合に、山上の風物はとても立派だった。勿論これも堂々たる活火山だ。到る所噴気孔があったが、一番上の火口の中のは凄味もあり、魅力も大きかった。

山の高さは千五百米に過ぎないのだが、眺望は実に雄大だった。南の方の目の前に阿寒富士の端麗な姿が夕日を浴びて立っていたが、そのほかには目を遮ぎる何ものもなかった。足下から西方へ長く展びて行く裾野の樹海は実に美しかった。振返ると目の下に阿寒湖が拡がり、その向側に雄阿寒岳が聳えていた。

如何にも広々とした北海道の山の景色は見ているものの気持までのんびりとさせて、何時まで立っていても厭きないような眺めだった。それにまた日没近い夕方の光線は実に綺麗だった。私はよく定石外れと云うか、時間外れの山登りをするが、一つはこの夕暮時の山頂の眺めが好きだったからでもあった。

やがて、惜しい山上の景色に別れを告げて途中まで下りてくると、登りには気がつかないで通ったが、とある山あいの小さな沢の落口に、大きな四角な風呂桶が置いてあった。そして左の方の沢から引いた樋には温泉が、右の方の沢からの樋には水が、湯槽の中へ流し込んであった。どちらも量が十分で、そのどちらの樋にも、湯槽に近い手の届く辺りに手頃な石が一つずつ入れてあった。これがこの風呂の湯加減の調節バルブなのだった。私達はこの原始的で、簡単明瞭な調節装置が気に入った。感心して見ていると急に這入ってみたくなったので、早速裸になって飛び込んだ。

暮れかかる、あたりの山の景色を眺めながら、谷川の流れの音を聴きながら、私達はいい気持で湯槽の中で伸びていた。そして「こんな風に湯と水の湧いている所に自分達の住いが欲しいものだ」などと話していたが、ふと、目を落すと湯の中に、チラッと一つ星影を見た。気がつくと私達は、まだ山をいくらも下りてはいなかったのだ。

大急ぎで仕度をして、駈け出すようにして下りて行ったが、森林の中でとうとう暗くなってしまった。しかし私達は赤城山にいて、いく度も暗い山道を歩く練習をしていたから、たいして困りもしなかった。殊に先刻登った道でもあるし、暗くなるに従って落着いて歩度を緩めて行った。(この暗闇の歩き方に就いては後で稍〻詳しく書くつもりだ。)

真暗になってから宿へ帰ったら、宿の人達は案じていたが、山の上で野天風呂へ這入って来たと言ったら呆れていた。

ここの温泉はいいお湯だった。丁度井戸水を沸かしたような湯で、そのまま薬罐へ入れて来て火鉢にかけておけばお茶も入れられたし、このお湯で御飯も炊けるのだった。御勝手へ這入って

見たら大きな流しへお湯が滝の様に引込んであった。見ているとそれが如何にも豊かな感じがして羨ましくなって来た。私達は別に病気でもないのだから何にも効かなくってもいいが、こんな温泉が欲しいと思った。

雄阿寒へ登る　翌日もお天気がよかったので雄阿寒岳へ登った。途中迄は、国立公園になった為か弟子屈の方へ通じる広い新道が出来かかっていた。その道の上に暖かい日を浴びて、とても沢山な蛇が出ていた。これ位沢山な数の蛇を見たのは私も始めてだった。その種類は青大将と、黒い身体の少し小柄な蛇の二通りだけだったが、それが一カ所に塊っているのではなく、ずっと道の向うを見渡すと木の枝か杖でも放り出してあるように一目でいくつも数えられるほどだった。近寄ると、まだ穴から出たばかりなのか、のろのろとしていて、みんな非常なスローモーションで渋々と逃げて行った。妻は蛇が大嫌いなので私の後について来て、傍へ来ると右へ寄ったり、左へ避けたりして弱っていた。私は「その代り、尺取虫がいると、こっちが困るのだからお互様だ」と言って笑ったが、私も決して蛇が好きな訳ではなかった。ただ見附けても目の敵にする程でもないと云う程度だった。だからこの日はずっと私が、道の先払役を引受けて行った。

あんまり屢々目の前へ出てくるものだからつい注意して見ることもあった。その美事な斑紋に飾られた細長い身体は、周囲の土や石ころに対して驚くばかり水々しく、嫋かで、弾力に富み、生命と云う感じが満ち溢れているような気がした。少し変なたとえだが、南京豆や、軽焼せんべいの間に、艶々とした黒羊かんがおいてあるような感じだと思った。

雄阿寒岳は真昼のせいか、雌阿寒程の印象は残らなかった。ただ頂上から裏側の方の足下に見下した樹海の中のペンケ、ペンケの両湖はとても魅力的だと思った。西南の空には昨日登った雌

阿寒岳が阿寒湖の向側にいい恰好をして聳えていた。お天気もよく、時間も早かったので、私達はゆっくりと休みながら夕方宿へ帰ってきた。

湖は綺麗だったし湯はいいし、気持がよかったので、私達はここに四五日滞在していた。宿の女中さんのうちに、他人の空似というのか、赤城山の家にいる子と非常によく、それこそ声から話し方から、歩き方までそっくりなのがいたので懐しい気がした。それが丁度私達の部屋の係だったから、大事にしてやったら、向うでもよく懐いて、とても親切に世話をしてくれた。愈〻帰る日の朝、門口まで見送って出ていたから、「左様なら」と言ったら一杯目に涙を溜めていた。

屈斜路湖へ越す　この日は少し無理な道かと思ったが、二三日前、雌阿寒岳から見下したパンケ、ペンケの湖水の傍が通ってみたかったので、序でに、そこから山を越して屈斜路湖へ出てみようと思った。五万分の一の地図には途中までしか道の記入がしてなかったが、宿の人に訊いてみたらどうにか行けるだろうと云う話だった。

宿を出ると、前の晩から話しておいた、アウトモーターのボートを頼んで湖水を横断した。岸を離れるとすぐ舵を任せて貰って、島を廻ってみたり、寄り道をして、有名な毬藻のある岸に舟を止めて水底を覗いてみたりした。爽やかな朝の湖の上は気持がよかった。

ペンケ湖から流れて来るイベシベツ川の、川口近くに舟を着けて岸へ上った。愈〻山へ這入ろうとする手前に農家が一軒あった。庭に人がいたので、又道の様子を訊いてみた。「行けないことはないが、とても藪が甚いだろう」と言って岐れ道の様子など色々と親切に教えてくれた。「熊はいるだろうか」と重ねて訊いたら「それはどうせいるさ。ついこの間もこの裏の山で馬を取りゃがった」と事もなげに言っていた。私はその無造作な調子に驚いたが、それはつまり「雷

に思えた。

が鳴ったって落ちるとはきまらない。注意は要るが恐れるにも及ぶまい」という位の意味のように思えた。

篤く御礼を述べて、暫く這入って行くと道跡こそあるが成程ひどい藪だった。無論刈払いも何もしてないので朝露で頭から濡れてしまった。それに蜘蛛の巣は顔に引っかかるし、足下の道はじめじめしているし、余り気持のいい所ではなかった。そのうちに恐しく大きな蕗のある所へ出た。秋田の蕗と云うのもこんなのだろう。葉の差渡しが七八十センチから一米近くもあって、背は人よりも高い。その中へ這入ると先の見通しもつかなくなってしまう。でもそれを通り越すと段々道端に熊笹が見え初めて来て、ようやく山の路らしくなった。

ほっとする間もなく、こん度は大変な藪蚊の群に襲われた。初めのうちはハンケチで追い払いながら行ったが、行くに従って益々その数が殖えて来て、しまいには、どうにもこうにもならなくなった。大体東北地方から北の方は、北海道でも、樺太でも、千島でも、山へ這入れば大概の所には蚊がいる。それは覚悟の上だったが、いるといっても程度がある。いくら蚊だってこんなに沢山いられては、何とも手におえない。前に歩いて行く妻のリュックの下に、数えきれない程の蚊の群がもやもやと沸き立っている。それがみんな大きな藪蚊で、たかったと思うと立所に刺す。妻のリュックの外のポケットに「モスキトン」があるのだが、それを出すだけの隙がない。何度か出しにかかったのだがついに成功しなかった。ポケットの蓋の尾錠をはずそうとしているうちに、もう手も刺されるし、顔も刺される。気が苛々してきて神経衰弱になりそうだった。空は何時の間にか曇って、あたりは急に暗くなって来た。

やがて左手から谷が来ている気味の悪い地勢の所へ出た。藪蚊も困るが先刻「どうせいるさ」

と言われた熊に出られてはなお困る。それで腰に用意の豆腐屋さんのラッパを吹きながら行く。自分達のいる位置が分らなくなるといけないから地図からも目が離せないし、たまには磁石も見なければならない。それに絶え間のない蚊の襲撃だ。随分と忙しかった。

間もなくペンケ湖の西北岸へ出た。湖は稍〻明るい緑色系統の美しい水だった。鬱蒼とした原始林に囲まれて幽邃な感じがした。向岸の雌阿寒岳の麓の辺りは凄味さえあるように思った。しかしあれ程憧れて来たペンケ湖であったが、猛烈な蚊軍に攻め立てられてもうそれ以上見ている余裕がなかった。「一日こんなだったらどうしよう」と妻が心配して言った。「これじゃ腹が減ってもお弁当も食べられないね」と私も合槌を打ったが、又思い直して「でも尾根まで出たら何とかなりそうなものだ」と附け足しといた。

ここから先はもう地図の上にも道がなかったが、凡その地点は図上でも見失わないようにしながら、微かな踏跡をたよりに熊笹を分けて登って行った。そのうちに段々と針葉樹が減って、水楢が多くなって来た。高くなるに従っていくらか空気の肌触りもよくなったが、それでもまだ蚊の攻撃は依然として続いた。途中でラッパ係を妻に頼んでから少しは楽になったが、それでもまだ手も足も中々忙しい道中だった。

こうして私達は休む暇もなく四時間位も歩いた頃、やっと峠の尾根筋へ出た。曇っていたので遠望はきかなかったが、晴れていたら嘸いい眺めだろうと思った。しばらく瘠尾根を伝わって行く中に、芝という程でもないが、道傍にいい草原があったので腰を下した。何と云うこともなしに極めて自然に腰を下したのだったが、何か物足りないような、忘れものでもして来たような気がした。それは気が附いてみたらいつの間にか蚊がいなくなってしまったのだった。あんまり長

い間ハンケチを振続けて癖になっていた手が、急に暇になったので、いやに静かになったような気がした。丁度カチュカチと動いていた柱時計が急に止まった時のような感じだった。でも私達は安心して伸々とした。御蔭様で緩くりと御弁当も食べられたし、甘いものも頬張れた。大体、下る道の谷の見当もついたので、すっかり気持にゆとりも出来た。もうこれで登りもないし、緩くり呑気に行けばいいと思った。すると突然妻が「大変だ」と言いながら慌てて立上って、自分のシャツやズボンを両手でバタバタと払い出した。見るとこん度はダニの襲撃だった。蚊がいなくなったと思って油断していたらまた新手が出て来た。足の方を見るとニッカーの下の沓下から列を作って登ってくる。早い奴はもう襟首の近くまで進出して来ていた。私達は代る代る後を向いて銘々の背中にいる奴を捕って捨てたが、そうしているうちにも後続部隊が登ってくる。気持は無論よくないが、しかし此奴はいくらいても蚊程の強敵ではなかった。何故ならば立所に喰いつくようなことはなかったからだ。

二人とも気が附かなかったお蔭で緩くりと御弁当が食べられたが、もしも最初から気がついたら休むことも出来なかったろう。「ぼんやりしてるのも善いことがあるものだ」と笑いながらまた歩き出した。それからも、いくら払い落してもまた別な奴が登ってくるので、しまいにはもう襟首の近くをうろついている奴だけ捕って、あとは放っておいた。

そのうちに谷へ這入って下って行くと、小さな河原へ出たので、私達は石の上へ腰を下した。そして何気なく膝のあたりを見たら面白いことを発見した。ダニと云う奴は登れる所まで登ると云う習性でもあるのか、折角股の辺りまで登った奴が、私が腰を下したのでこん度は膝の方が高くなったものだから、これは道が違ったとでも思ったのか、みんな廻れ右をして膝頭目掛けて帰

って行く。

「こいつ等も、あんまり頭のいい奴ではないね」と話してまた笑った。

でも数は随分いた。山を下り切った所で妻がズボンのバンドを取ってみたら腰の廻りにだけ四十八四いた。少し下ると山仕事に行くらしい二三人連れの土地の人に逢った。道を訊いたあとで「随分ダニがいますね」と言ったら、「心配ありませんよ、沢山くっついたら駈足するに限ります」と教えてくれた。ダニは塩分に甚だ弱いもので、駈足をして汗を掻くと、それでみんな参ってしまうものだそうだ。

その晩は屈斜路湖畔へ出て、ポントの駅逓へ泊った。夕方アイヌの丸木舟を借りて、和琴半島へ遊びに行き、砂浜にある野天風呂みたいな温泉へ漬って来た。

夜私達が床に入ってから、向うの方の部屋へ三四人の山男らしいのが集まって酒を飲み始めた。困ったなあ、と思っていると、その中に歌の得意らしいのが一人いて、追分だの、そのほかのは何だか私には分らなかったが、鄙びた歌を、哀調を帯びたいい声で歌い出した。ほかの仲間もおとなしくして聴いていたようだったし、少し間延びのしたような調子が却ってその場の気分に調和して、うつらうつらと快く聞きながら眠ってしまった。私は旅の宿で酒飲みの歌を快よく聞いたのはこれが初めてだった。

湖畔の洗濯　次の日は朝から晴れて静かなお天気だった。宿を出ると間もなく周囲六十キロ余りもあると云う大きな屈斜路湖唯一の、表面排水口釧路川の出口を渡り、コタンと云うアイヌ人部落を通って、湖の東岸を北上した。空は青く、湖は紺色をして、相変らずのんびりとした長閑な景色だった。途中小さな農家らしいものを一二軒見かけたが、そのほかはただ広々とした荒地

だった。それから熊が湯治に出て来ると云う湯の池もあった。
愉快だったのは十時過ぎ頃になって、もう大分歩いたような気がしたからというので綺麗な小石の浜で休んだ。そして多分手でも洗う心算だったろうが湖水へ手を入れてみたらお湯だった。急に愉快な気持になって靴を脱いで這入って行くと段々微温くなって、膝位の深さになると略々水の感じだった。試みに石鹸を溶かしてみたらよく溶けた。川湯まで帰ると水がなくって御洗濯が出来ないから、ここで洗濯して行こうか、というので、リュックに残っていた汚れ物や、昨日以来汗になった下着類を出して洗濯した。妻が岸で洗うと、私が沖の方でそれを濯いだ。そして石の上や、木の枝へかけておいて、河原の木の下で寝転んで遊んでいたら、そのうちにみんな乾いてしまった。
川湯へ帰って二三日した或る晩、宿のお上さんが、御話をしに来たいという人があるが、連れて来てもいいかと訊きに来た。どうぞと言ってやったら、やがてお上さんに案内されて年配の温厚な紳士が這入って来た。先刻宿の入口に脱いであった私達のスキー靴を見て、話してみたくなって来たのだと云う。暫くスキーや山の話をしたあとで、自分はエトロフの斜名の測候所長をしていたことがある、と言って色々珍しい島の話をしてくれた。そして私達にも暇があったら是非一度は行ってみるようにと熱心に勧めてくれた。
その話をきいたので、私達も、では行ってみようかな、と云う気になった。今は名も忘れてしまったが、もしもこの晩この人が来て千島行を勧めてくれなかったら、或は私達の生涯に六年余りという千島の生活は這入らなかったかも知れない。

九　摩周湖

摩周湖を見る　それから間もなく私達は、川湯から二十キロ程南の、弟子屈温泉の一寸先の当別温泉へ移った。弟子屈は、先日札幌から来て川湯へ入る途中一晩泊った所だった。弟子屈もいい温泉だったが、少し賑かなので奥まって静かな当別へ入った。

その翌朝、起きて見ると快晴だったので、私達はこの間から行ってみようと話していた摩周湖へ出かけた。村を離れると、麓の潤葉樹の間に、緩いだらだら登りの道が続いていた。登るに連れて段々視野は開けて来たが、相変らずのんびりとした眺めだった。この辺の山にも熊が多いと聞いていたので、私達はラッパを吹き鳴しながら緩くりと登って行った。

やがて二時間余りも歩いてから、幾分道が急になって来たと思うと、そこはもう摩周湖南岸の尾根だった。尾根を伝わってなお少し行くと、湖水を俯瞰出来る高い岸の上へ出た。

私達は湖を一目見て、その堂々たる姿と、物凄い有様に驚いてしまった。「これは素晴らしい」と言って、私達は声を上げて感歎した。それにしても、外側の寧ろ平凡過ぎる風物とは、何と云う相違だろう。私はこの間、雄阿寒岳へ登る途中の道で見た時の蛇を思い出した。摩周湖は正に、砂礫の間の蛇、南京豆の中の黒羊羹のような存在だと思った。

私はまだこれ程迫力のある湖を見たことがない。その周囲を、ぐるっと取囲む山の内側は、二三百米から四五百米の高さの、全部削り立ったような急傾斜だった。そしてその底に淀む巨大な

湖水は、満々と濃紺色の水を湛えていて、飽くまでも清澄な感じだった。尾根の上から遥かに漣の動くその水面を、じっと見詰めていると、摩周湖は生物だというような気がして来た。
しかもその周囲二十数キロに及ぶという大きな湖の真中には、神話にでもありそうな、小さな島がたった一つ聳え立っていた。
私は暫く見ているうちに「これはどうもただの湖じゃない。面白い相手だ」と思うようになった。
それから私達は林の間の踏跡を伝わって湖畔へ下りて行った。段々水際に近づくに従って辺りは愈々凄味を増して来る。やがて林の間から岸を覗きこむと、水の中へ陽が差しこんで底の小石がギラギラと光っている。岸から倒れこんだ白骨を連想させるような枯木の先が、波の下で無気味に揺いでいる。非常にまだ若い湖水だということは素人の私にも解った。波打際に立って試みに手を入れてみたら、びっくりする程冷たかった。
ここには妥協的な感じなどは薬にしたくもない。溌剌としていて挑みかかって来そうな気さえする。アイヌ達が、神の住む湖と怖れているのも尤もだと思えた。私達は何故もっと早く来てみなかったかと後悔した。
暫く辺りの生々とした景色にみとれて立っていたが、向うに見える島の様子がもっと知りたかったので、また下りて来た道を戻って尾根の上へ出た。そしてその尾根を西へ伝わって行って、出来るだけ近い距離から島の様子を観察した。
見れば見る程不思議な島だった。小さな癖に周囲は殆ど断崖らしい。そして中程から上にだけ樹木が茂っている。その中には相当大きい針葉樹もありそうだ。それからよく見ると南に面した

崖下に、ほんの僅かな小石の浜が発達している。
私はすっかり感心してしまって、長いこと眺めていたが、見ているうちに、何だかその島へ渡って行ってみたくなってきた。
「あの島へ行ってみたいね」と私は妻を顧みて言った。
「本当にね。だけど行けるかしら」と、妻はとてもそのあてはなさそうだと云う調子だった。
「そりゃ、これから考えて工夫してみるさ。」私はそう言って、なおそれからも色々な話をしながら暫く見ていたが、本当に何時まで経っても見あきることはなかった。
湖には舟は無論のこと、筏もなかった。しかし考えていると色々な案が私の頭に浮んで来た。真直ぐな枯木二本と、空気枕二十で特殊な筏を造っては、というようなことも考えられた。それから、小さい丸木舟をいくつか作ってそれを横に並べて繋いだらどうかとも思った。
私は山を下りて宿へ帰ると、どうしたらあの島へ渡れるかということに就いて、二日ばかり案を練ってみた。私は何か思いつく度に妻に話して相談した。すると妻も釣られて段々熱心になって行った。
準備 そうしているうちに、どうやら略〻自信の持てる計画が立ったので、準備に取りかかることにした。
それから私達は釧路の町へ買物に出た。そして鉈、鋸、マニラロープ等を始め、薬罐、鍋、飯盒、細かい食器、それに三畳用の蚊帳、木綿の布、油紙等と、相当のパン、バタ、罐詰、菓子、砂糖等々の食糧品を仕入れて来た。まだそのほかに丈夫なテントも欲しかったのだが、それはとても持ち切れないと思って止めにした。

これで大体材料は揃った。そこで今度は島で露営する為めのテント代用品を作ることにした。しかもそれは代用品といっても、テントよりずっと快適なものになる筈だった。もしも島に適当な岩穴でもあってくれればこの上もないのだが、それはとても望めないことだった。それで今までの経験をもとにして色々と考えてみた。

この辺で露営するのにどうしても避けたいものは、蚊、虻、蛲子、ダニ、それから蛇、尺取虫等であった。なお一番敬遠したいのは熊だったが、これは戦車のようなものでも揃えない限り、望みはないので諦めることにした。

先ず買って来た三畳用の蚊帳の裾を適当な長さに切り、立山以来持って歩いていた毛布を、その下端へ厳重に縫い附けてしまった。そして縦の一方の中央へ出入口を設け、その出入口には切り取った蚊帳の布を利用して、大きい簡様の底なしの袋を揃えて縫い附け、出入の際は簡単に開閉出来るように工夫した。それから綱と油紙で屋根だけ作ったが、それは雨に風が伴えばとても保てない程度のものだった。どうせ完全は期し得ない場合なのだから、あとは現地で臨機応変の処置を執ろうということにした。しかしこれで、もしも雨さえ降らなかったら、普通のテントに較べて、箱型自動車とオープンのような差があるばかりでなく、蚊や、その他の虫類を完全に防げる点に於て遥かに快適なものであるだろうと思った。そして私達はあの島の頂上で、夜寝ながら星を眺めたり、真昼木の蔭の洩れ日の当る青い蚊帳の中で、のんびりと寛ぐ様子を想像して楽しい夢を描いていた。

これで一通り準備は出来た訳だが、もう一つむずかしい大事なものがあった。それは南風だった。あの湖畔へ下りる道は南側に一ヵ所あるだけだった。まだほかにも下りられる地形はあった

としも、熊の巣だと云われてるあの辺の山の中を歩く気にはなれないし、折角下りて見ても浜がわるければ筏が作れないから、それは問題にならなかった。
出発予定地の南岸から島までの距離は凡そ三キロ半位と思われた。あの辺の浜にある白骨のような枯木を集めて鈍重な筏を作ろうと云うのだから、風に逆って漕いで行くことはとても出来ない相談だ。だから往きには南風が、そして帰りには北風が是非とも必要な訳だった。
それから二日ばかり雨が続いた。妻が時たま思い出して「うまく行くでしょうか」と言う。そう言われると私もうまく行きそうな気もするし、中々むずかしそうな気もする。「心配しないで兎も角もやってみようよ」と云う訳で静かに天候の恢復を待った。

カムイッシュへ渡る 間もなく天候は恢復した。愈々明日は大丈夫と見当をつけた晩、私達は早目に床へ入った。
翌朝起きてみると予定通りの上天気で、風も、ちゃんと南だった。宿の人にはこの計画は内証で暫く又山を歩いて来るからと言って、早目に出発して山へ登った。この日は二人共荷が重かったので多少手間どったが、十時半頃には湖畔へ着いた。私達は著くとすぐ予定の仕事に取りかかった。浜を伝って手頃な枯木を切っては、水の中へ引きこんで一ヵ所へ寄せ集めた。二人だけでは相当骨の折れる仕事だったが、四時間余りの不休の労働でやっと筏が出来上った。試験してみると浮力も充分だったし、ちゃんとリュックを載せる台まで出来て思いの外立派なものになった。荒削りながら櫂も出来た。
これでいいと思ったら、二人とも腹がペコペコになっていた。大急ぎで貪るようにしてパンを噛り、風向のいいうちにと思って猶予なく漕ぎ出した。先へ荷物と妻を乗せておいて、力任せに

筏を押出して飛乗った時は、大きいシャンツェのアップローチをスタートした時のような、一寸捨身な、さっぱりとしたいい気持がした。この風に一度乗り出したらもう後へは帰れない。

しかし万事は順調に行った。岸を離れて少しの間は吹返しの逆風もあったが、沖へ出るに従って安定な南風が快く利いて来た。でも一つ驚いたのはその水の透明度だった。筏の真中へそのつもりで作っておいた穴から覗いて見ると、もうどんなにしたって二十米は越している深さに違いないのだが、まだ明瞭と水底の小石まで見えている。赤城の湖だって岸に立って見れば、綺麗な水に見えるが、その透明度はたった六米余りしかない。金精峠の下の菅沼の水も随分深い所まで底が見えたがこれ程のことはなかった。覗いてるうちにそれが何か、あり得ない不可思議なことのような気がして来て、その点少々気味がわるくなった。妻に話すとまた怖がるから、なるべく下を見ないようにして、早くもっと深くなって底が見えなくなってくれればいいと思った。ずっと後で何かの本で読んだのだが、ここの水の透明度は四十何米とかで、湖水では世界一だということだった。

行くに従って風は益々強く筏の足は中々速かった。今はもう漕ぐ必要はなくただ舵を執っていさえすればよかった。周囲の神秘的な景色を眺めながら私達は得意そのものだった。妻もリュックを開けてお菓子を捜し出す位落着いていた。

一時間余り行くと島が近づいて来て、追々と細かい所も見えて来た。案じていた南側からの崖もどうやら登れそうだった。一つ気掛りなのはもしも熊でもいたらという心配だった。こんな小さな島の中で熊と同居はやり切れないと思った。たとえ熊がいたからといっても今更風に逆らって後へ帰ることは出来ないし、向岸の断崖には尚更漕ぎつける訳には行かない。これも口に出す

と妻が心配するから、私は黙っていて出来るだけ島の様子に注意していた。
やがて刻々と島が目の前に迫ってきた。私はいい島だ、凄い感じだと思った。島だけ見ていると、とても湖の中の島だなんとは思えない。私は嘗てジャワの東部南海岸の無人境を小さい帆船で伝わった事があった。そして或る日の夕方一人でカヌーへ乗って、或る湾の奥へ漕いで行ったら、深い海の底から立上っているような怪異な小島があった。近寄って行くとそこの水底に赤い色の不気味な暗礁が見えたので怖気を震って逃げて帰ったことがあったが、その島を思い出した。遠くから見ても高いとは思ったが、傍へ来てみると見上げるばかりに聳え立っている。北側だけは見えないが、東側も西側も断崖が殆ど水中から直立している感じだった。高さは五六十米位もあろうか、島の長さよりもその背の方が高そうに見えた。
崖下の小石の浜は来て見ると思ったより狭い。その浜の小石を噛む波の音が、後の崖に谺して、甲高い反響が耳を打ってくる。何とはなしに身体中の神経が緊張してきて、私達はいつの間にか口数も少なくなってしまった。
無意識のうちに正確な舵を取って、ついにその石浜の真中へ着いた。筏の先が、ガリガリッと小石の上へ乗り上げて、ぐんと止った。時計を見ると、南の岸を出てから一時間三十五分、この種の筏としては稀な速さだったと思う。
明るいうちに島の中の様子を調べておかなければ安心がならないので、私達は短刀や、鉈だけ持って正面の崖を攀じ登った。そして叢を掻き分けて注意深く、足跡らしいものはないか、糞等はないかと思って見て廻ったが、幸いそれらしいものは見当らなかった。中を歩いてみると島は思ったより狭く急斜面ばかりで殆ど平らな所はなかった。頂上は瘠せ細った東西に長い稜線で、

裏側は殆ど直立した断崖だった。でもその稜線の西寄りの端にやっと一坪程の緩斜面を見附けて、草を刈り松の枝を組み合せて敷いて、どうやらテントを張る位な場所を拵えた。落着いてみると、この島の狭さではとても大きな動物などの棲める筈はないと思ったので私達は安心した。

嵐の一夜　筏の所から荷物を運び上げて、テントを張って用意が出来た時にはもう辺りは暗くなりかかってしまった。炊事する暇がなくなったのでまたパンで夕食をすませた。七月も中旬だというのに暗くなると寒かった。私達はありったけの着物を出して着て毛布に包まって横になった。三畳敷の蚊帳のテントは、二つのリュックを中へ入れてもまだ充分な広さがあった。偃松の枝のスプリングに、厚く草を敷いた上の毛布の床(ゆか)は中々工合がよかった。その上へ楽々と疲れた足を伸して寝転ぶととてもいい気持だった。だが私は何となく目が冴えて眠りにくかった。思い通りうまくやったと云う気持と、何かまだ不安な気持が残って、ごっちゃになっていた。空は晴れていたので屋根は作らず、蚊帳だけだったからよく星が見えていた。私達は何故か余り話しもしなかった。そのうちに昼の疲れで暫くは眠った様だった。

烈しい風の音に目を覚してみると、多少暴れ模様になった様子で、お星様も所々に一つ二つ見えるだけだった。風は大分強くなって来たらしく、時々島中を揺がすような突風が来る。木の下のテントが今にも吹き飛ばされそうに揺れ動く。蚊帳の目から吹き込む風が頬に当って冷たい。崖下の浪の音も凄い程荒々しく聞えてくる。妻も目を覚しているらしいが、この場合人間の話声など立てない方が自然であるような気がした。暫くは黙っていたが、それでもしまいに低い声で「ひどい風になって来たね」「雨は大丈夫でしょうか」「寒くはない？」「いえ大丈夫」というような短かい言葉を交わしたが、それだけでまた黙ってしまった。

暗い空に大きな塊のようになって揺れる真黒な松の梢を見上げながら、私は考えるともなく考えていた。この島の名は「カムイッシュ」と云う。よくは解らないが、神様の島とでも云う意味らしい。湖の東側に聳えている一番高い山（死火山のようだった）を「カムイヌプリ」と云う。これはつまり神の山の意だろう。昔から土着のアイヌ人達がこの湖を畏怖してそんな名を附けたのだと思う。兎も角もこの辺一帯を昔の人が神域と見たのは如何にも自然なことと思われる。嘗て元気のいいアイヌがカヌーを漕ぎ出して、吹き流されて死んだ例もあると云う話も聞いた。なお言い伝えによるとこの摩周湖は女が岸まで登っても山が怒って暴れると云うことだった。それなのに筏で渡ってこの島まで女がやって来たのでは暴れる方が当然かも知れない。と、そんなことを思っていた。そしてそれが理窟に合ってるとも、だから怖いともいう訳ではなかったが、そんなことを考えながら風の音が甚いので中々眠れなかった。

明け方近くなってから、ぐっすりと寝こんでしまったらしい。目を醒ました時はもうテントの中へ朝日がさし込んでいた。風も何時の間にか静まって、裏の崖の方で小鳥の声が聞えていた。夜中に考えたことなんか遠い夢のような気がした。そして、完全に島の王様になってしまったような、鷹揚な軽い気分になって、私達は朗かだった。この朝もいいお天気だったし、蚊帳製テントの居心地は満点だった。島には無論藪蚊もいたのだが中へは一匹も入らなかった。見上げると蚊帳の天井の角を緑色の尺取虫が這っていた。私は勇を鼓して中から爪で弾いてやると、二三米も先へ抛物線を描いて飛んで行った。私は「ざまを見ろ」と思った。別にこれと云って急ぐ用もないので、暫くはいい気持になって話していたが「顔でも洗ってきて、今朝はおいしい御飯を炊きましょう」と言って、妻はテントを出て一足先に崖の方へ下りて行った。

途中まで行ったと思ったら妻が大形な声で、「大変だ大変だ」と呶鳴り出した。どうしたのかと思ったら筏が毀されてしまったのだと言う。私もすぐ駈け下りて見たら、昨夜の風で波に揉まれて枯木を縛り合せておいた綱が切れて、筏はバラバラになり、木も大半は流されてしまっていた。「これは手強いぞ」と思ったが、私は強いて落着いて、水際に立って驚いてぼんやりしている妻に「早く御馳走でも拵えて食べようよ」と言った。妻が「大丈夫」と訊くから「心配ないよ」と言ったら、妻はやっと安心したらしく炊事の仕度をし始めた。

再準備 私はひそかに流れ残った枯木がどれだけあるかを調べてみた。それから切れた細引を丁寧に拾い集めたり、なおこの島のうちに立ってる枯木が何本位あるかと思って見て廻った。無論充分とは思えなかったが、石浜を伝わって西側近くへ行くと小石に半分埋まっていつか流れ着いたものらしい稍々大きい枯木が二本あった。念のため鉈を持って来て木口を大きく削り取って、水の中へ放りこんでみたら兎も角も浮いたので、これも乾かせば役に立つと思った。そして「何とかなるよ」と独り言して自分にも安心させようとした。

それからまた毎日働いた。先ず小石の中の木を一生懸命掘り出してよく乾くようにしておいて、崖の上の枯木を切っては引き下した。二人で三日程その仕事を続けたらどうにか材料が集まった。また浪で流されるといけないから一本ずつ石浜の奥へ引上げておいた。綱も充分ではないが、テントに使っているのまで集めれば略々足りそうに思えた。

こんどは来る時とは逆に北の風を待つばかりとなった。この間中、一度夕立があったきりで、仕合せとずっとお天気はよかった。でも風は南ばかりだった。働いてるうちに何時とはなしに島とも馴染んできて、始め程珍しいとも思わなくなった代りには居心地のいい落着いた場所になっ

た。ここへ着いた時緊張して短刀を持って島中を廻って歩いたことを考えると不思議な気がした。私達は風のことを気にしない時間は楽しかった。出歩く時のほかはテントの中で本を読んだり、編物などをしていた。

それからまた三日待ったがまだ北風は吹かなかった。食料もそろそろ心細くなって来たし、それにお天気もどうやら崩れかけてくるように見えた。しまいの日の午後には、もう周囲の山の頭は霧に隠れ勝ちになり、暗雲低迷というような穏かならない感じになって来た。私達はこのまま嵐にでもなられてはやりきれないと思った。

風を突いて出る それでついに私達は意を決して七日目の朝、暗いうちに起きて腹ごしらえして、空模様は怪しかったが筏を作って漕ぎ出した。

これはしかし相当冒険的な企てだった。筏も来る時のような確かりしたものは無論出来なかった。風に逆って南へは、とても行けないことは解り切っていたから、斜めに東のカムイヌプリの麓へ向った。出かける頃には雲は濃くなり、風も幾分強くなって来た。ここでもし筏が毀れたら、先ず助かる当てはない。私達はもう運を天に任せておいて夢中になって漕いでいた。だが重い筏は中々思うようには進まない。そのうちには腕も疲れるし、息も切れてくる。しまいには二人とも、口をきこうともしないで黙ったまま、ただ機械的に手だけ動かして頑張っていた。

筏の進みの遅いのだけならまだいいのだが、いくら風に対して、最もいいと思う角度に筏を向けて進んでも、少しずつ北へ北へと流されている。一番心配なのはカムイヌプリの北麓の岬を外れてしまうことだった。それを外れて、もしも北へ流されたら、その後のことが、例えいくら、

うまく行ったとしても、事態は何倍か悪化するにきまっている。それにもし一寸でも躓きがあれば、遭難する危険が多分にあった。

段々山へ近づいてからは、吹き返しの突風が真正面から襲いかかって、漕いでも漕いでも筏が後ずさりすることもあった。

しかし私達の命がけの努力はついに報いられた。強風に弄ばれて一進一退の難航の後、辛うじて岬の手前の崖の下へ、筏を毀されもしないで着くことが出来た。島を出てから三時間余り、全く一瞬の休みもなく漕ぎ続けたのだった。思えば我ながら意外な気のする程の頑張りだった。

だがこれでまだ済んだ訳ではなかった。ここから元出た南側の岸までは八キロ位もあった。しかしもしこの岸を伝って東へ廻りこめば一キロも行くと上陸出来る地点がありそうだった。そこからカムイヌプリの裏へ登れば、やがて道へも出られるだろうと思った。そっちへ出たらきっと熊は沢山いるだろうが、もう居ても止むを得ないと思った。それで岬の岩の鼻を廻って、東側の岸へ取り着こうとして苦心したが、岩にも手掛りがないし、棹を使おうにも岸から深いので突くことも出来ない。そこで風の合間を見ては漕ぎ出したのだが、三度試みて三度とも廻り切れない前に、突風に吹返されてしまった。その上うっかりするとそのまま沖へ吹き出されそうな危険もあったので、東行きはついに断念して引返し、カムイヌプリの裾を廻って遠い岸を南へ向うことにした。

難行苦行　それからは歩ける岸は綱で引張り、岸の浅い所は棹で棹さして行った。棹も届かなくなると止むを得ない所だけを櫂で漕いだ。そうして私達は逆風に向って力限りの努力を続けた。

途中には岸から倒れ込んでる大木があって、筏はどうしてもその先を廻わさなければならない所がいく度かあった。私が岸で綱を引き、妻が筏の上で、棒で倒木の先を突きながらそれを除けて通っていた。すると丁度そこへ猛烈な煽り風が来て、筏を沖へ吹き流そうとする。細い綱は綻りが戻りそうな程ぴんと張った。私にその筏を引止める力はあるが、もしもここでこの綱がポッンと切れたらどうだろうと思う。

筏は妻の力では絶対に漕返せない。私は無論すぐ飛び込んで筏へ泳ぎ着こうとするだろうが、ズボンを穿いたままのこの疲れた身体で、もしも筏の流れ方が速くって、泳ぎ着けなかったらどうだろうと思う。そのうちに私は力尽きて溺れてしまうだろう。そして妻一人だけ乗った筏は加速度がついて西北の断崖へ向って流されて行くだろう。それを思うと溺れる自分よりも流されて行く妻の気持の方が傷ましい。言葉にすると大分長いが、瞬間にそんな想像をすると、ハラハラして綱を持つ手の力が抜けてしまいそうになることがあった。あとで考えて、あれは確かに横に延びた命の綱だったと思った。まだいく度かそんなことがあった。

それから更に四時間の難行苦行を続けて、やっと前出た南の岸へ辿り着いた。朝島を出た時から実に七時間余りの猛烈極まる労働だった。私達の両手の皮は薄くなり、肉刺は剝げてヒリヒリと痛んだ。途中で腹も減るし、ムキになって漕ぐと胸がわるくなってきて、嘔吐しそうになったことも二三度はあった。

上陸して、愈ゝこれで済んだと思ったら、私達はそこの石河原へ寝たっきり、がっかりして暫くは動けなかった。頭を冷たい石の上へ載せたままで沖の方を見ると、カムイッシュの島影が霧の間から見え隠れしていた。一週間あそこで生活していたと思うと懐しい気もしてきた。湖は何

時の間にか他人のような感じではなくなっていて、もう挑みかかっては来なかった。
私達は精力の続く限り自然の力と闘って、どうやら無事に帰って来た。しかしこんな場合、ともすれば使われることのある「征服して来た」と云う言葉を私は思い出して、これ程不似合なものはないと云う気がした。なる程私達は摩周湖と四つに取組んで頑張り抜いて来た。しかしそこにはお互に微塵の敵意があった訳ではない。私達は摩周湖の暖かい懐に抱かれながら、朗かに腕押しをして来たまでだ。私達は摩周湖の歌う力強い歌の一節に、声張上げて合唱して来たのだ。
だからもしもこの場合、私達が力尽きて遭難したとしても、それは「征服」の反対ではなく、本当は偉大な自然の懐へ融合して行くことになるのだろうと云う気がした。
そう思って見ると、岸に打ち寄せる小さい波は、私達に向って「嘸草臥れたろう」と私語きかけているような感じがした。
我ながらよく行って来たものだとも思った。また馬鹿なことをした様な気もしたし、相当なことをして来たと云うような気もした。私達は「人間の身体もよく続くものだね」と話し合って感心した。
暫く休んでから私達はそこで、僅かに残っていた米でお粥を拵えて食べて、熊除けのラッパを吹きながらまた山を下りた。
当別の温泉宿へ帰ってからも、流石に過労が祟って二三日は二人共半病人みたいだった。しかし仕合せにこの日に帰ったからよかったが、その後はまた暴れ模様の雨降りで、もしもずっと島に残っていたらどうなったか判らなかったと思う。
やがて十日余りして疲れた身体が恢復してくると、この間川湯の温泉宿で勧められたエトロフ

の話を思い出して、こんどは千島へ渡る相談をした。だが手元には地図も何もなかったし、私達には何の予備知識もないので、どんな計画を立てたらいいのかさっぱり見当がつかなかった。それで兎も角も根室まで行ったら、細かい様子が訊けるだろうというので、荷物を纏めて弟子屈を出た。

顧みると、始めてこの阿寒の山へ入ってから、もう二ヵ月近くの日が経っていた。

第二篇　千島時代

一　千島へ渡る

根室　山を下りてから私達は、厚岸へ途中下車して二三日居たが、間もなく根室へ行った。根室の海岸へ出て見たら、東北の方角に島が三つ見えた。どれが国後島だろうと思って訊いてみたら、それは三つ共、みんな国後島の中の山で、つまりその高い所だけが見えているのだと言われた。私達は、千島と云えば小さい島の集まりのような気がしていたのに、あんまり大きいので、びっくりした。私達は知らず識らずの間に、島というから、今迄に自分達の行ったことのある、伊豆の大島や、小笠原島のことを考えていたのだろうと思うが、自分では常に地図も見たり、ちょっとは物を数字的に考えているような気がしていた癖に、随分迂潤な話だと思って恥ずかしい気がした。宿へ帰ってからその話をしたら、国後島の長さは百五十キロを越していると聞かされて成程と思った。さっぱり様子が分らないので地図が欲しいと思って、本屋を尋ねてみたが千島のものは何もなかった。仕方がないから、宿の人に話を聞きながら、どういう道順を探ろうかと色々計画を立ててみたが、誰からも余り詳しい様子は聴けなかった。それで結局、国後島の一番近い端の泊村という港へ上って、そこから島を縦断して、島の東北端まで歩き、そこで便船を求めてエトロフへ渡ろうということにした。

所が待っていても泊村行の船は中々出そうもない。でもその次の東沸（とうぶつ）という東海岸の小さい村へ行く船なら間もなく出るということだったので、泊村から東沸の間を歩くことだけ割愛してそ

れに乗ることにした。
船は夜中に出帆した、船といっても無論客船ではなく、五十噸足らずの石油発動機の附いた漁船に便乗させて貰うのだった。だから狭い船員達の部屋へ、十二三人の乗客が鮨詰にされていたので随分窮屈だった。話を聞いていると多くは島の人で、根室へ用足しや買物に出た帰りらしかったが、中には御医者さんへ行って来たという、青い顔をした御上さんらしい病人もいた。
室内があんまり息苦しいので、私達は毛布を一枚ずつ持ってデッキへ出て行った。空は一面に濃い雲が低く垂れて曇っていた。隅の方へ蹲まって暗い海の上を見渡すと、港の出口の燈台の青白い燈が規則的に明滅していた。波が船縁りに打突かって砕けると、その度に底力のある震動が私達の背中へ伝わって来た。湿気を含んだ夜の潮風が冷々と頬を撫でて行く。船は暗い闇の中へ向ってぐんぐんと這入って行った。私は段々と遠ざかって行く根室の町の電燈をながめながら、愈々北海道を離れて行くという気がした。私達は暫く話していたが、そのうちに単調な石油エンジンの爆音に子守られる様な気持になって何時の間にか眠ってしまった。
明け方近くなって、寒いので目を覚ますと、身体がガタガタと震えて止まらなかった。船酔という程でもないが、続けざまに生欠伸が出て少し胸がわるかった。深呼吸をしながら立上って見たら、もう目の前に黒々と島が見えていた。眠ってる間に空はすっかり晴れて星が一杯光っていた。西方の水平線遥かに国後島の南端、ケラムイ岬の燈台の燈が明滅していた。
少し明るくなると長い長い岸の断崖が見えて来た。その崖の根一帯には、一筋の白波が立ったり消えたりしていた。一瞬の休みもなく打寄せる太平洋の荒浪に、島は少しずつ蚕蝕されて行くのだろうかなどと思った。その崖の背が段々低くなってきて尽きる辺りから、東へずっと砂浜が

続いていた。その砂浜の始まる所に東沸の村があった。

東沸へ上る　東沸は小さい、感じのいい漁村だった。立つと頭の閊えそうな宿の二階から、寝不足な眼で茫乎と、打寄せてくる波頭を眺めていたら、まだ身体が舟で揺られてるような気がした。暫くすると、私達を乗せて来た船は、又ポンポンと忙しそうな発動機の音を残して更に東の方へ出て行った。私は一杯に日の照りつけて来た眩しい広い砂浜へ目を移すと、急に裏海岸へも一度出てみたくなった。ここから山を越して十四五キロ行くと、反対側の海岸に古丹消という温泉のある部落がある筈だった。

朝食を運んで来た宿の御上さんに聞いてみると割合楽に行けそうな話だった。色々と道順などを尋ねた後で、「古丹消は景色のいい所ですか」と聞いたら、「さあ」と言って黙って私の顔を見ていたが、その様子は、「景色が何かの役にでも立つのですか」と言っているような感じだった。私はその時斜里の町を思い出して、古丹消も矢張り白けた感じのする平凡な漁村だろうと想像していた。

折角の機会だから兎も角も行ってみようということにはなったが、荷物を半分この宿へ預けて行こうか、どうしようかと相談した程私達は別に古丹消に期待は持っていなかった。それでも結局先へ行ってからまた、例によって予定を更えないとも限らないからというので、重いリュックを背負って出かけて行った。

山の様子は北海道とよく似ていた。湿地を越えて椴松の森へ這入ると、大きな木の幹に熊の攀じ登った鋭い爪の跡があった。私達はまた豆腐屋のラッパを出して吹きながら行った。島には、山を歩く時いつも持ち慣れた五万分の一の地図がないので、少々勝手がわるい気がしたが、その

割に道は分りよかった。起伏する緩るい坂道を登ったり下ったりしながら、三時間程歩くと、山の合間から北側の海が覗いてきた。遙か水平線の彼方には北海道の知床半島の山が霞んでいた。附近に高い山こそないが相当の急斜面もあって、何処となくきりっとした感じの景色になってきた。

やがて海を背景に古丹消の背の低い家の屋根が見えかけて来ると、思いのほか落着いた感じの部落だった。「これは中々いい所らしいね」と話しながら、私達は感心して下りて行った。でもまだこの時は、ここでそれからの六年余りを暮そうなどとは、二人とも夢にも思わなかった。

古丹消　温泉のあるという、この村で唯一軒の宿へ着いてみたら、最初は頼んでやっと泊めて貰うような恰好だった。私達は今までと少し勝手が違う気がしたが、愈々座敷へ上ってみると家内中して、とても親切に扱ってくれたし、温泉も極く穏かな硫黄泉で入り心地もよかった。

夕方になって、すぐ裏の浜辺へ散歩に出てみたら、南側の海と違って何処となく引緊ったいい感じがあった。この村の位置は、後に低い山を背負って左右に岬の出た、しかもその間に充分な平地を持つ程よい地形であった。海の向側を見ると、知床半島の山々が長く横たわっていて、丁度ラウス岳の肩に赤い大きな太陽が沈んで行く所だった。夕暮の海辺の景色は美しかった。温泉はあるし、静かだし、私達は「いいとこだね」と繰返して感心した。でも北海道にいる時はまだ別に何とも思わなかったが、古丹消の浜に立って夕日の沈む景色を眺めていると、何だか遠い所へ来たような感じがした。

部屋へ帰ると、何かコソコソとした話声がするような気がしたが、宿帳を書いた時やっとその訳が分った。宿の人達には髪の毛を短かく切って完全な男装をしている妻が、女か、男の子か、

どうしても分らなかったのだ。

そういえば多分二度目に川湯温泉に滞在していた時だったと思う。或朝私達が庭へ出てそこに積んであった材木に腰掛けて話していたら、近所の小さい子供が来て「オジチャンオジチャン」と呼びかけた。ほかに誰もいないようだったので、私のことかな、と思って振り向く途端に妻が笑いながら「ハイ」と返事した。子供は小さな草花を一つ手に持っていて、北海道弁の片言で妻に何か言っていた。私はまた間違えたな、と思って笑い出すと、傍で洗濯物を乾していた宿のお上さんも一緒になって笑い出したことがあった。よっぽどゴッい顔でもしているのか妻はよく男の子と間違えられていた。

なお、これはずっと半年も後で懇意になってから聞いた話だが、この日私達が通るのを見ていた村の人達は、「あれは何だろう」「行商人だろうか、浪花節語りだろうか」「どうも荷物が少いから浪花節語りだろう」ということにきまって、その晩はみんな楽しみにしていたのだったという。今までこの村へ這入って来るものは、大概行商人か、浪花節語りの二通りだけだったのだそうだ。私も時々色々なものに間違われるが、浪花節語りと思われたのは始めてだった。

丸山の断崖　翌朝になると宿の若主人が、面白い所があるからと言って、村から二キロ程離れた東北側の丸山の岬へ案内してくれた。そこは丸山の見事な高い断崖の下に続く、岩石の大きな段丘のような所だった。行くに従って、非常に変化に富んだ巨大な岩石の群が、日の届く限り続いていた。雨風に腐蝕されて、カルメ焼きのように穴だらけになっているもの、大きな丸石を一つ抱いて、その石が絶えず波に揉まれるために、石臼の様な穴の掘れているもの、海へ向って大砲の様に突き出しているもの、重なり合っている岩の下が覗き眼鏡のような隧道になっているも

の等々、そうした数限りのない形相の岩石が、オホーツク海の荒浪の洗礼を受けて、タワシで洗い清められたように綺麗になっていた。その岩石の間を攀じ登ったり、飛んだり潜ったりして行くコースの面白さは、私達をすっかり狂喜させてしまった。その摩擦の大きい、さっぱりとした岩肌の感触は、手で撫で廻した位では足りないで、身体をすり附けて横に転んで歩きたいような気がした。私達はこんな愉快な所があるだろうかと思った。それから三人で随分暫くの間、岩虫のように岩の上を這い廻っていたが、帰りには、その断崖の東端の相当な岩場を攀じて丸山へ登り昨日来た道の途中へ出て宿へ戻った。私達はこれで一遍に古丹消が好きになってしまった。

小屋　私達があんまり喜んでいたものだから、当分この村で遊んで行かないかと宿の人が言い出した。その上、丁度宿のすぐ側に、拵えたばかりの空いてる小屋があるから、なんならそれを使ってもいいという耳寄りな話だった。万事がお誂え向きだったので、私達はもうエトロフへ行くことなんかどうでもよくなってしまって、早速その小屋を借りることにした。

小屋は古材木を集めて作った、八坪程の小さい粗末なものだったが、まだ完成しきっていなかったのを幸い、自分達の住みよいように直し始めた。私達は厚い板を持って来て急造の寝台を拵えた。空箱と板を集めて、テーブルや、腰掛を作った。海の方の壁へ窓を開けてガラス戸を入れた。入口近くに流し場を拵えてお勝手も出来た。そうして一つ一つ片がついて行くと、段々人の住いらしい恰好がついて来た。

それから大きい道具、例えばストーブ、畳、寝具等々、要るものは宿で何でも気前よく貸してくれた。その上、家族総掛りで手伝ってくれたので、私達の新らしい住居は見る見るうちに出来

上ってしまった。そこで直ぐ様、リュックサック二つだけを担いで引越して来た。私達がリュックから、鍋、ヤカン、飯盒、そのほか鋸、鉈等々、摩周湖以来の山のお道具を拡げ出すと、宿の人達は呆れて見ていた。

こうして立所に私達の新世帯は出来た。思い掛けなくも、北海の荒磯の新居に納まった私達は、夢の続きを地で行っているような気がしてならなかった。僅か二日前の朝千島へ渡って来て、同じ日の夕方にやっと頼んで泊めて貰った宿の人達が、今は十年の知己のような気がする。流浪するものの生活が、何か人生の運命を暗示しているような気がした。

私たちのすぐ後は海だった。初めての土地の、極端に単純化された小屋の生活は新鮮で楽しかった。しかしまたいい知れない寂しさもあった。摩周湖の島のテント生活を、小屋の中へ持ちこんだもののような気もした。夜寝床へ這入ってランプを消すと、急に波の音が耳についた。心なしか北海の波の音というようなものがあるような気がした。

いつも朝目を覚ますと裏で鷗の声がしていた。鷗という鳥は、すっきりとしたいい形をしてる割合に鳴き方が鈍重なので、私は裏の浜へ出てそれを見る度に、何ということもなくそれが気の毒なような気がした。

そのほかこの辺には沢山な鳥がいた。それが毎日毎日小屋の周囲へ集まって来ては鳴いていた。私達は暫く経つうちに、姿では分らないのだが、その鳴き声に個性的な特色があるので、聴き覚えが出来て来た。やがてそのうちの幾つかの声は、特に分明と聴き分けられるようになった。

或る朝そのうちの一羽が来て鳴いたら、妻が「あれは×さんに似ていますね」と言い出した。

そう言われてみると、私も本当にそんな気がした。よく聴いてると声からの感じで、その名の人物を想像することが出来た。それからまたほかのがやって来て鳴くと、こんどは二人で「あれは×ちゃんだ」「今のは××さんだ」と、鳥の声を自分達二人共知っている人のうちの誰かになぞらえて名を附けていった。大概の場合その感じは、極めてよく二人の意見が一致した。そして一度名を附けてしまってから、その鳴声が聞えると、不思議にその人柄から、肥ったり痩せたりしている恰好や物ごしまでその人を連想するようになった。

朝などよく「×ちゃんがもう起しに来たよ」などと、私達は床の中でいうことがあった。それからまた散歩に出て、村からかなり離れた場所の山や、海岸を歩いていながら、思いもよらない所でその声を聞いて、「おや、こんな所へ×ちゃんが来てるよ」と言うようなこともあって、その頃は全で鳥が自分達の友達みたいな気がしていた。しかし私達は声だけでお馴染になっていたので、鳴きさえすればちゃんと区別がついのだが、姿では全っきり判らなかった。

それからもっずっと後のことだったが、「あれは×さんの声とそっくりだが、少し違うような気がしませんか」と又妻がいい出した。「風邪でもひいたのじゃないだろうか」と私は言ってみたが、成程注意して聴くと一寸違うような気もした、だがその時はそれだけでよくは分らなかった。するとそのうちに、こんどは二四一緒に来て鳴き出したことがあるので、やっと気が附いたが、それは親子に違いなかった。それからなお気を附けて聴いていると、兄弟らしい子供の声も聴き分けられることがあった。

筋子を埋める　小屋へ移ってから二三日すると、もう近所の人とも親しくなって、逢えば挨拶を交し、時々は立話位するようになった。同じ日本人だから大概の事は解ったが、言葉が違うの

で困ることもあった。それでも私達に向って話す時は、気を附けているらしいのでまだよかったが、村のお婆さん同士の話などは、側で聞いていても全く何の意味か解らないことがあった。

或る時、近所のお上さんに「あんた方はお酒を喰べないか」と訊かれてびっくりしたが、島では御酒を飲むとは言わなかった。それからまた「あんた方はマカナイがいいから、山へ這入って蚊や虻がいても大丈夫だ」と言われた時も、どう云う意味か解らなかった。マカナイを賄だと思ったから、御馳走を喰べてるということかと考えてみたが、御馳走と蚊や虻に刺されることと何の関係もある訳はなかった。あとでよく訊いてみたらマカナウということは、厳重に身仕度をするということで、妻の男装をさして言っていたものと解った。

段々懇意になると、海鼠や、筋子を持って来てくれる人もあったし、大きな鱒を一尾ぶら下げて来てくれた人もあった。だが私達は二人とも山の中育ちだったから、生きている魚の作り方なんか知らなかった。鱒の大きな奴を持て余して、流しの中じゅう転がし廻ってやっと首を切落してしまったら、丁度そこへ近所の人が遊びに来て、「首を取ってしまっては駄目ですよ」と笑いながら手際よく切って行ってくれた。やがてその話が伝わったものとみえて親切な村の人達は、それから何時も、ちゃんと細かくしてすぐ煮たり焼いたり出来るようにして持って来てくれた。その後ホッキ貝の生きているのを貰った時もとうとう持て余して、しまいにナイフの先を挟まれて折ってしまったことなどもあった。

困ったのは、筋子や海鼠を時々貰うので、今考えれば勿体ない話だったが、私達には磯臭いのが気味がわるくって喰べられなかった。筋子が生臭いから煮たら直るかと思って、野菜物と一緒に煮てみたら、堅くなってしまって喰べられなかった。たとえ困っても折角親切に私達を喜ばそ

うとして、持って来てくれることを思うと、訊かれても嫌いだとは言いにくかった。後になってからは、最初に嫌いだと言ってしまえばよかったと後悔したが、途中からではなお言い出しにくかった。でもそのまま置いといて腐らせても困るし、さりとて人の目に附く塵捨場へも捨てられず仕方がないから夜中にそっと起きて行って、砂の中へ穴を掘って埋めてしまうことにした。

しかし、こんな私達を親に持った子供でありながら、その後島で生れた子供達は、みんな海鼠も筋子も大好きだった。海岸で雲丹を採ってやると、その場で潰して海水で洗って喜んで食べていた。私達はそれを見て、生れと云うか、育ちと云うか、争われないものだと感心したことがあった。

散歩　海岸で散歩していると、アザラシが砂浜へ上って日向ぼっこをしてるのをよく見かけた。アザラシの無愛想な顔は、この間斜里の宿屋の庭でもうお馴染だったが、ただこうしてホームグラウンドにいる奴はとても元気がよかった。私達が逸速く海の方へ先廻りしてしまうと、逃げ場を失ってまごまごしながら、例によって憤慨しているが、そのうちに両肩を前へ窄めるようにして、不器用に居坐りながら妻の方へ寄って行く。すると妻は悲鳴をあげて逃げ出してしまう。やっと一方に血路が開くとそのまま慌てて海へのめりこむが、一旦水へ這入ったら最後、今までの不恰好さとは凡そ似てもつかない柔軟な逞ましさをもって、泳ぐと云うよりは水中を滑り抜けて行ってしまうように見える。全く驚くべき奔放な運動の美しさだ。陸に上っては田舎者のような、気の利かない醜男のアザラシではあるが、所を得れば恐ろしくスマートに見えてくる。

私は嘗て動物の本の写真で犀を見て、よくもこんな不恰好な動物がいるものだと思ったが、その後映画でアフリカ辺りの曠野を疾走する犀を見た時、それが波濤を蹴って進む戦闘艦のよう

な、堂々たる迫力をもっているのに驚歎したことがあった。私達もせめてジャムプスキーを穿いた時ぐらい、ちっとは迫力をもちたいものだなどと思った。
私達は、珍しいものが多いので、厭きずによく散歩した。海岸を行くと温泉も到る所に出ていた。砂浜に湧いてるのもあったし、岩の間から吹き出してるのもあった。海の中から出て、空中まで噴き上げてるようなのもあった。そして誰にも、何にも利用されずに、ただ海へ流れこんでるのを見ると勿体ないような気がした。
波打際を歩いて行くと、古い難破船などを見附けることがあった。すると私達は不思議に惹きつけられて、その船の縁を渡ってみたり、日に曝されて白くなってる船体の継ぎ目を、コツコツと石を拾って叩いてみたりして、何時頃、どんな風にして難破したものだろう等と想像して話しながら、何か感慨深いものがあるのだった。
私達は半月もこうしているうちに、段々と小屋の生活の安易さと、便利さが身についてきて、そこに合理的な、数々の長所のあることに気が附いた。そして「一生涯この種の生活がしたいね」とよく話し合った。考えてみると、私達の性格には、賑かな宿屋の経営というようなことは、似合わしくないと思えた。
しかし、その時の望みが叶ったと云うのか、結局宿屋も止めてしまうことになったし、なお、それ以来既に十五年、現在に到るまで、私達は小屋に住み続けて、ついに所謂家らしい家に住んだことはなかった。そして今はもう、すっかり小屋住みの単純で、便利な生活様式に慣れてしまって、とても普通の家に住む気にはなれなくなってしまった。
小屋は靴穿きのまま何処までででも這入れて、気軽に何でも出来る、居間のストーブの傍には万

力がある。グラインダーもあれば、蓄音機もある。私達の小屋はみんな坪数が少くって周囲が広いから、採光も、換気も思うように出来る。構造が簡単だから、煖房にも都合がいいし、体裁は構わないから、お勝手でも、お風呂場でも、都合のいい所へおける。小屋には磨き抜いて光ってるような所はないが、また、隅の方が薄暗くって、じめじめしてるというような感じのところもない。一口にいえば、小屋の生活は明るくって、乾いていて、あっさりしてる生活だ。美しくはないが、衛生的で、出来るだけ単純化された、正味だけの生活だと思う。

みんな靴を穿いてるから、夏でも冬でも、家の中と、外の連絡がいいし、家族全員が、気軽に家の仕事に協力出来る。その上、小屋は、掃除の手数が普通の家の半分も四分の一もかからない。雑巾をかける板の間などは無論ない。だから女中さんが居なくも、冬になれば家中して朝から晩まででも、滑る気なら滑ってもいられるし、何か仕事を始めると、家事に煩わされる割合が少いから、思い切って、一つの事に力を合せて没頭出来る。それに生活費の安く済むこともいうまでもない。誰にでもいいかどうかという事は分らないが、私達にとっては、まことに都合のいい生活様式だと思っている。

移任の決心　私は春以来、宿屋から宿屋へと移って歩いてる間は、別に気にもならなかったが、こうして一軒の小屋に落着いて生活してみると、立山以来の、少々無軌道的な生活が省みられてきた。幸いに、赤城の家の方は、姉が見ていてくれたからいいようなものの、「お前達はこれからどうしようというのだ」と自問してみる。「まだまだスキーの研究が続けて行きたい」と思う。すると「それならまた早く、冬の準備に取掛らなければいけないじゃないか」と考えてみるが、何かそこに未だ釈然としないものを感じる。そしてどうせ、今までだって自分達だけで研究して

来たのだから、出来ることなら、千島のような所で落着いてやってみたいものだと思う。しかしまた折角長い間かかって苦心惨憺、心血を注いで建設して来た赤城山のシャンツェのことを思うと、流石に愛惜の念に堪えないものがあった。なお生計と云うことや、そのほかの問題もあったが、色々なことを綜合して考えてみると、島の生活の方により多く心を惹かれるものがあった。

そう思い始めると、私は散歩に出た時でも、それとなく附近のスロープを注意して見て歩くようになった。近い所に余り大きいシャンツェを拵えることはむずかしそうだったが、開拓さえすれば練習位出来るあては充分にあった。それで段々と自分だけの腹がきまって来たので、或日妻に相談してみたところ、妻も全く同じようなことを考えていたと言って非常に喜んだ。それからこんどは、私達の計画を宿の人に話したら、これも亦とても喜んで、何でも便宜を計ってやるからと言って、一も二もなく賛成してくれた。

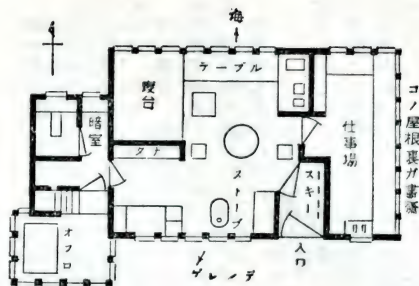
忽ちそう事がきまって、抽象的な考えから、具体的な話になってくると、こん度はまた新しい建設の案を練るのに忙しい日が、毎日続くようになった。附近の山へ藪を分けて這入って、ゲレンデにする斜面の見当をつけたり、小屋を建てる場所を選んだり、また新しい小屋の設計もしなければならなかった。それから私達は、晴れれば出て歩き、家にいる時は、テーブルを挟んで、細かいことまで書き記しながら色々と相談した。新しい建設というものは、むずかしいものでもある代り、非常に楽しいものでもあった。さまざまな微笑ましい計画は、時々寝床の中へまで持ち込まれ、夢にまで延長されることがあった。

やがて間もなく一通りの計画が出来上ると、私達は、便船を待って赤城山へ帰り、改めて姉に後事を託した上、懐かしい幾つかのシャンツェや、永い間一緒に暮して来た人達にも、しばしの

別れを告げて、大急ぎで、こん度は、スキー、大工道具、写真器、蓄音器等々を持って、再び新しい希望に満ちた千島へ向って出発した。

二　古丹消へ移住する

第一の小屋　再び千島へ着いた時は、もう村を囲む岬も、山も、美しい紅葉に飾られていた。私達は喜んで迎えてくれた村の人達に手伝って貰って、早速小屋の建設に取りかかった。既にもう時期が遅れていたので心配したが、小屋が小さかったのと、設計が細部にまで亙って出来ていたのと、村の人達の協力が得られたのとで、思いのほか早く仕上げることが出来て嬉しかった。でも最初、愈々註文しておいた材料を集めた時、柱は全部二寸角だったし、一本も貫を使わない小屋の設計だったので、みんな風の強い所だからと言って心配してくれた。建て始めてからでも、床を先へ拵えてしまったり、地均しらしいものがなかったりするので、見に来ては危ぶんでいた年寄もあった。

しかし、あらまし恰好がついてくると、みんな珍しがった。私達の苦心して設計した小屋は、土地の家とは大分違う所が多かった。窓が非常に沢山あって、家の中が明るかったし、小屋中、床が板張りで靴穿きのまま何処でも歩けるようになっていた。小さな小屋なのに、万力などのある仕事場があったり、写真の暗室まであった。それに小屋不相応に大きな流しの附いたお勝手も変っていたし、風呂場はまわりが殆どガラス張りだった。その上お便所が腰掛式だったことなど

千島第一の小屋（昭和四年秋）

も、島の人の目には余程珍しいらしかった。

それから、この辺では家の海の方へ面した壁の外側へみんな大袈裟な風除けをしていたのに、私達は風当りの強い海の方へ、一番沢山窓を附けて、別に風除けを作ろうともしなかった。すると村の人が気にして、何故早く風除けを作らないかと訊くから、折角海の方の景色がいいのに勿体ないからだと言うと、みんな感心していたが、その後二三年経つうちに、村の人の家にも段々ガラス窓が殖えてゆくようになった。

間もなく初雪が来て、強い北風が吹いたら、その朝早く、宿の御爺さんが新聞紙を一抱え持って見巡りに来てくれた。そして小屋へ這入ってくると、少し見当違いをした様な顔をしながら、部屋の中を見廻していた。お爺さんの経験によると、新しく建てた小さな小屋は、初雪が来ると、必ずその細かい粉雪が室内まで吹き込むのが、あたりまえだと思っていたのだった。だからその吹き込む穴へ新聞紙を詰めるために、わざわざ朝早く起きて持って来てくれたのだと解った。無論その親切な厚意には、大いに感謝したが、しかし小屋には、羽目にも、桁の上にも、床にも、雪の入る穴はなかった。

私達はこうして本格的に、古丹消の住人になってしまったが、村の人達がみんな親切にしてく

れたので、本当に居心地がよかった。古丹消の宿の名は、伊東さんと云うのだった。何でも水戸辺りの出の人だと聞いたが、随分早くから、千島へ渡っていた様な話だった。家中みんないい人だったが、伊東さんのお婆さん等は、親類が一軒殖えた様な気がすると言って、親類よりもよく世話をしてくれた。私達が小屋を建てた土地も、伊東さんとこのだったし、温泉も伊東さんの樋から分けて貰った。御蔭で風呂場も快適なものが出来た。

温泉は本当に有難かった。この年はよく温泉宿へ泊ったが、私は元来、所謂温泉場と云うものの気分を余り好まなかった。何故と云う程分明(はっきり)とした考えを持っていた訳でもないが、何時の頃からか、温泉場は贅沢屋さんか、さもなければ青い顔をした病人の集まり場所みたいに思い込んでいたからでもあった。しかし、小屋の温泉は、無論その何れでもなかったのでとても工合がよかった。冬が来て、滑れるようになった時、私達は夕方までゲレンデにいて、帰って来ると、ストーブに火を附けておいて温泉へ飛び込んだ。ゆっくりと暖まって出て来て、部屋着に着換える頃には、もう部屋も暖まっていた。朝も起きると、またすぐ裸になって風呂場へ行った。そこには楊子も、歯磨も一切整頓してあった。私は自分の小屋へ引いて見て、始めて温泉の有難味を知った。妻もお勝手で湯がふんだんに使えたり、洗濯ものが楽なので、とても大満悦だった。なお私達は、この小屋にいる間中、殆ど洗面器を使わなかった。わざわざ湯を汲んで顔を洗うより、身体ごと飛び込む方が気持がよかった。

どうやら小屋が出来ると、私達はゲレンデの手入れにかかった。だがもう時間がなかったので、村の人も大分手伝ってくれたのだったが、充分には出来なかった。それでも私達は秋のうちに、小さい山スキーの練習場と、三つの小さいシャンツェを拵えた。地形によって、或るものは材木

と板で、また或るものは土を積んで一生懸命土方をした。するとその、私の土塊（つちくれ）の積み方を見て、村のある老人が、あれは素人ではないといっていたそうだ。私は、本職の土方と見られたとすれば光栄の至りだと思った。

越年（おつねん）　毎日毎日、海の方から寒い北風が吹き上げてくる日が続くようになると、カムチャッカ辺りから、潮流に乗って来て沖合を通る流氷の群を見かけるようになった。そのうちに、或る朝目を覚ますと、辺りがとても静かだった。世界中の音がみんな無くなってしまった様な気がして、少し変だった。不思議に思って起き上って窓を覗いてみると、海は一夜のうちに、流氷に鎖されてしまって、見渡す限りの雪野原と化していた。私達は、二三年経つうちに、冬が来て、やがてこの静かさがくると、始めて本格的なシーズンに入ったという感じがするようになった。

北海道へ来たことのある人は知っているが、島でも冬のことを「越年（おつねん）」といっていた。私達は初め年越しのことかと思ったら、もっと広い意味で、雪に埋もれて暮す間中のこと、つまり、三月頃までも含む冬期間全部をさしていうのだった。越年になって浜へ流氷が着くと「シバレル」ようになる、とよく村の人が言っていた。この「シバレル」も北海道以北の言葉で、内地にはない、実に便利な言葉だと思った。凍るという意味にもなるし、甚だ寒いという意味にも使われる。「シバレ芋」と言えば凍らせた芋のことになり、「今日はシバレル」といえば、今日は寒さが厳しい、ということになる。

この辺の越年の御馳走に、「ルイベ」というものがあった。初め聞いた時は独乙語みたいな名だなと思ったが、アイヌ語かも知れない。それは鮭の片身を、外気で心までシバラせたものを、そのまま薄く切り、お刺身のようにして、凍ったのがとけないうちにお醬油につけて、温かい御

飯に載せて喰べるのである。とてもおいしいものだが、ストーブで部屋をあんまり暖め過ぎては、喰べないうちに凍ったのがとけてしまうから駄目だった。

もう一つ、これは凍らせたものではないが、「焼漬」というものがあった。それは秋になって、湖水へ一度這入った鮭の身を、大きく厚く切って遠火でよく焼き、それを生醤油の中へ浸して漬けたものである。これは非常にうまい。洒落れた味のあるもので、その上とても便利な食物だった。湯さえ沸いていれば即座に使うことも出来る。つまり、その肉の一切れを茶碗に入れて、葱でも切り込み、それに熱い湯をさしただけで立派な汁が出来る。しかも、そのまま樽の中へ入れておいても、越年中はいたむ心配はなかった。

村人のスキー熱 私達が行った時、この村にスキーと名のつくようなものが二三台はあった。そのうちの一つは、難破船からでも流れついたものか、ここの浜で拾ったものだそうだ。イタヤ材にリリエンフェルトの着いた、北海道産のものらしかった。あとのはみんな子供ので、流れ着いていたスキーの真似をして拵えたものだったが、その締具には感心させられるものがあった。私もその頃、ずっと締具の改良に腐心していた時なので、余計面白いことに思った。

それは、塵捨場辺りで、手頃な大きさの、つまり自分のゴム靴の上へ丁度穿ける位な大人の古ゴム靴を捜し出し、それを適当な深さに切り縮めた上、中側から厚い皮を当てて、爪先の方だけスキーの上へ釘附けにしておく。穿く時は先ずそのスキーに附いてる靴へ、靴を穿いたままの足を突込んでおいて、綱で自分の靴諸共縛るのである。誰が考えたかこれは相当うまい考案だと思った。

この村に器用な素人の大工さんがいて、或日私の小屋へスキーの寸法を聞きに来たから、身長

とスキーの長さ、スキーの長さとその幅や厚さ等々を詳しく教えてやった。そして吹雪の日にでも、子供達のスキーを安く拵えてやらないかと勧めてみたら、快く引受けて行った。その大工さんは御酒が好きだった。それで何時の間にどうして定まったものか、スキー一台の削り賃が、焼酎の四合瓶一本ということになった。これは便利な方法だったと思う。子供達は自分で山へ行って、楢か桜の手頃なのを切って来て、それに焼酎一本添えて大工さんのとこへ持って行っておけば、その数日後にはスキーが出来上るのだった。どうせ吹雪けば何も碌な仕事は出来ないのだから、内地の田舎でも、この種のやり方が便利な地方もあるのだろうと思う。

私達も連れが出来ていいと思ったので、秋のうちから、村の人達にも、滑ることを勧めておいた。所が愈々私達が滑り始めて暫くすると、子供達は勿論のこと、しまいには大人から、娘さん達にまでスキー熱が高くなった。それも、ゲレンデだけでなく、裏の一寸した畑の斜面等にも、子供達の滑る姿を見掛けるようになり、大人は山へ行くのに、早速実用的にも使うようになった。そのうちに六十になる伊東さんのお爺さんまで、滑り始めたので私達は感心した。

それでも、中には、秋、私達が材木を組んで高いシャンツェを拵えていたら、それを見て、自分の所の子供がそれを飛ぶようになると大変だから、いまに雪が降ったら着陸斜面に湯を撒いてやる、なんて力んでいたと云う元気なお婆さんもあったが、それが愈々みんなが飛ぶようになったら、すっかり面白がってしまって、お湯を撒くどころか、寒いのに襟巻をして根気よく見に来ていた。

やがて、シャンツェも使えるようになって、愈々私達が小さい台で練習を始めると、村の人達はみんな珍しがって、女達まで、わざわざゲレンデへ見に来た。子供達や元気な若者は、じきに

真似して飛びたがったので、怪我をするといけないから雪で小さい台を作ってやった。一番大きいのでも、赤城山の中位の清水の台と同じ程度のものだったが、シーズンの半ばには、大小合せて七つの台が飛べるようになっていた。

話は前後するが、この古丹消と云う部落は、昔、鱒の漁場の一つだったのだそうだ。それが潮流の関係か何かで、魚の群が他所へ移ってしまったので、本来ならば解消してしまう筈なのが、この土地が千島としては非常に恵まれた場所なので、漁場でなくなってしまってからも、なお去り切れない人達がここに住み着いて、現在の永久的な部落が出来たのだということだった。

本当にこの村は、島中の楽園といってもいいような所で、夏の間の千島特有の猛烈な濃霧も、ここだけは敬遠して通り、極端な時は、村の後方四キロ程の、この島の脊骨に当る山の尾根までは霧が押寄せていて、そこからそれが左右に別れて、村の両側面から北の海上へ流れ出し、更に沖合で一緒になって行くという。つまり、濃霧に、この村を中心として方十キロ位の穴が出来て、天ほかは暗いのに、その中だけは太陽の光が燦々と降り注いでいることがある。そんな工合で、天候には恵まれているし、その上到る所温泉が出る位だから、地熱でもある為か、太平洋の表海岸の方よりも、春の若草の萌え出るのが、平均一カ月も早く、従ってほかの海岸では思いも寄らないような種類の野菜物や草花までここでは出来る。そんな訳だから、漁場としての仕事の少くなった今では、この村に余りはっきりとした定業というものがない。山仕事もすれば馬も飼う。海岸だから多少の漁もするし、畑も作る。そして若いものは表海岸の罐詰工場へ出稼ぎにも行く、という調子の家が多かった。

それで冬の間も、男達は、積雪を利用して橇で山から木を切り出したり、海の氷に穴を開けて

魚を捕ったりしているが、女達はお勝手でもする以外、余り用事はないらしかった。それにどういう訳か、ここの人は不思議な程、みんな妻君を大切にして、いたわる習慣があった。それでいて別に所謂嬶天下という訳ではなく、その点は見ていても気持がよかった。

娘さんのスキー そのうちに、そういう暇な娘さんや、若い妻君も、二人三人私達の滑り仲間に入って来た。スキーを始めると、着物はボロでもいいが、沓下だけはどうしても毛の厚いものが欲しくなる。丁度、私はその頃も未だ沓下の研究に没頭していた時なので、序でに教えてやろうと言ったら、夜小屋へ習いに来るものも出来て来た。そのうちの一番よく来た娘さんは段々馴れて来て、吹雪いたりすると、小屋へ泊って行くようになったが、しまいには本当に私達の所へ来てしまって、一冬小屋で一緒に暮していた。その娘さんは文ちゃんという名で、当時十八位だったと思う。伊東さんの妻君の末の妹で、大柄な、気立ての優しい、綺麗な娘さんだった。あとで私達に子供があるようになってからも、本当に親身になってよく世話をしてくれたが、その時も妻にはいい連れだったし、そのために小屋の生活も賑かだった。

その娘ともう一人、営林署の役人の妻君が、妻が飛ぶものだから釣り込まれて、とうとうジャムプを始めてしまった。二人ともシーズンの終り頃には、七八米位飛ぶようになっていた。或日、隣村で勤めているその営林署の役人が帰って来て、一緒にゲレンデへ出たら、すっかり妻君に押えられてしまって、悲観していたことがあった。

何処でも同じだが、元気な村の子供達はみんなすぐうまくなった。無論ジャムプも始めたが、その飛ぶのを見ていると、とても面白かった。みんな中々勇敢で、小さい台ならすぐ立つ様になった。多くはゴム靴に麻縄の締具なのだが、それでも感心に器用に滑っていた。でもその連中が

ジャムプで転がると、大概スキーが脱げてしまった。それで余計に怪我もなかったのかも知れないが、何しろ元気で気持がよかった。愉快なのは着陸でとんぼ返りを打つと、斜面にスキーが二本ちゃんと突き刺さって、人間だけ下へ転がり落ちて行くようなのがあった。こんなのを十六ミリででも撮っておいたら嘸ぞ面白かろうと思った。

また中には、始めの頃スキーを穿いて歩く恰好の頗る変なのがいて、私は何故だろうと思っていたが、よく見ると歩く時、足と手と同じ側を前に出していたので、操人形みたいに変なのだと分ったが、そんな愛嬌者もいた。

私達はこのシーズンは、シャンツェが小さかったので、主として踏切の練習に専念した。ジャムプの最長距離は三十五米くらいだった。こんなことで大体一シーズンは終えてしまった。面白い一冬だったが私達のジャムプは思う程伸びないでしまった。

雪のなくなる頃になって、樺太庁から電報で、豊原に大きいシャンツェを作るから見に来るようにといって来た。差出人の名を見ると、前年私が赤城山で第五シャンツェを拵えた時、色々と手伝ってくれた、当時群馬県の学務部長をしていた岡本さんだった。何でもまだ、転任されて来てから間もない様な話だったが、シャンツェを作ることが面白くなったのかも知れない。

間もなく豊原へ行って、台の位置を見に旭岳へ登ったら、前に来た時森林だった山がすっかり坊主になっていた。そこで大きい台を一つと、中位な練習台を一つ設計しておいてから、昔、二十二時間スキーで歩き通した時のことを思出して、真岡へ行ってみた。しかしこんどは、往復とも汽車だったのと、雪のない時期だったせいか、至極平凡で、樺太へ来るなら冬に限ると思った。

前年の冬の朝お世話になった納豆屋さんのことを思出して、たずねてみたが、どうした訳かついに見当らなかった。

三 畑を作る

虫眼鏡 島へ帰るとまた、私達はゲレンデの手入れをはじめた。畑を作ることもこの春始めて覚えた。私達が疾くにやりそうでいて、今までその機会に恵まれなかったこの仕事は、予想していたより遥かに楽しいものだった。こんなに面白いものを、何故今までやらなかったのかと悔やまれた。しかしどうせ百坪に足りない畑を、起したり、借りたりして、簡単な野菜物を作っただけだったが、馴れない私達には大仕事の様に思えた。愈〻種を播いてから二三日するともう待ち切れないで、朝に晩に畑へ出てみた。やがて土の間から、ようやく緑色の小さい芽が頭を擡げて来たが、私達にはそれが種から出て来たものか、雑草の芽か、暫くの間は見分けが附かなかった。でも近所の人に見て貰うと、慣れた目にはそれが一目で分るので、私達は羨ましいと思った。そして自分達だけに中々分らないのが癪だったので、しまいには虫眼鏡を持出して、一つ一つ覗いて廻ったら、ようやく区別が附くようになった。

それでもみんな芽が出揃って、子葉の間から本葉の出てくる頃は、何ともいえない楽しさがあった。一ヵ所に数が多過ぎる所を減らさなければいけないと思って、間引こうとして手を出すと、勿体ない気がしてその選択に困った。私達は毎日畑を廻りながら、畑作りを始めると、家を

空けることが惜しくって旅行なんか出来なくなりそうな気がした。

それからは、近所の人に教えて貰っては、毎日毎日丹念に手入れをしたが、あんまり畑へ這入るものだから、そんなに廻って歩くと、作の間の土が固まってしまって駄目だ、といわれたこともあった。それでも手入れのお蔭かどうか分らなかったが、中々成績のいいものもあって、春蒔の結球白菜などが、教えてくれた先生達のより、ずっとよく巻いたこともあった。

それから、これは僥倖だったのだが、この年の春遅くなってから霜が降ったので、村中の胡瓜が全滅してしまったことがあった。その時、私が面白半分に、温泉の流れの脇の軒下に植えといたのが、湯気のために五本だけ助かったので、それを丁寧にお守りして育てたら、大小取りまぜて六十何本か生ったことがあった。

移植器　始めの頃、種の播き方が下手だったせいか、砂地だった為か、白菜や大根の種を入れても、それが平均に出ない所が出来たので、ほかの混んでいる所から採って来ては移植してみた。随分丁寧にやるつもりなのだが、慣れないで要領がわるいのか、どうも結果が思わしくなかった。日でも照りつけると、じきに砂地が焼けて来て凋んでしまう。それで日除けをしたり、水を撒いたりしてやってもみたが、中々うまくは行かなかった。

どうも残念で堪らないので、何とか方法はないものかと色々考えた挙句、移植器を作ってみた。早速それを使ってやってみると、思いの外工合がよかったので、面白くなって段々改良して行ったら、しまいには、この時の目的に対しては、略々完全と思えるものが出来上った。それを使うと、私達のような素人がやっても、気楽に移植が出来て、その結果は殆ど失敗することはなかった。しまいにはどの程度まで移植出来るものかと思って、必要のないのに移植してみたり、移植

するものではないという豆類の移植をしてみたが大体成功した。その構造は極く簡単なもので、丸い底なしの小さい罐の中へ、上下に遊動し得る針金の輪を作り、それに柄を附けて、罐の上から操作出来るようにしただけのものだった。なお罐の上部にも大きい穴を開けておき、移植する時、中が覗いて見られるようにしておいた。

移植する場所の近い場合には、先ず移植しようとする所の土の中へ、その罐を、欲しいだけの深さに差込んで、持ち上げると、その跡に丸いキレイな穴が出来る。罐の中の土は、遊動する中の輪を押し下げて捨ててしまい、こんどは、移植しようとする芽にその罐を被せて、前の穴と同じ程の深さにまでさし込み、土ごと抜きとって、そっくり前の穴へ入れてから、遊動する中の輪で土を押えながら罐だけそっと抜き出すのである。

こうすると、相当多量の土が根を包んだまま、少しも動かずにそっくり移植されるので、たとえ日が照りつけても、滅多に凋むようなことはなかった。なおその場合、最初の穴の方を稍〻深くしておいて、その深さだけの薄い肥料を入れておいたり、また時にはその穴の中へ水を注いでおいたりしたこともあったが、それらも確かにいい方法だと思えた。

私達は素人だから、これが果して実用になり得るものかどうか分らないが、近距離で丁寧に移植したいというような場合には、役に立つものではないかと今でも思っている。厄介なのは移植しようとする芽の大きさによって、大小数個のものが要ることだった。

その後、越後のある農学校を出て小学校の先生をしていた人が、村の学校へ転任して来られた時、この移植器を出して見せたら、感心して持って行って、とても工合がいいといいながら、学校の畑で使っていたことがあった。

畑と蝶々　近所の人の畑を見て歩いたら、人間の目の形を一つ、墨で黒々とかいた小さな板片が畑の所々においてあった。何だろうと思って訊いてみたら、それは豆畑の鳩除けだと言っていた。これを果して鳩が怖がるかどうかは別問題として、私達は今まで、鳩ポッポは可愛い鳥だとばかり思っていたのに、成程、そんな風に人を困らせることもあるのかな、と少し意外な気がした。

だがその後、私も同じ様なことで、畑を作り始めた為に、新たに沁み沁みとものを考えさせられることがあった。それは、春の野山を長閑に飛び廻って万人に愛される、あの美しい姿の蝶々だった。私はそれまで蝶々を見ると、どんな場合でも、ただ美しいもの、可憐なものと云うことだけしか感じなかった。「蝶々蝶々菜の葉に止まれ」という、あの歌のような意味でだけ、蝶々というものを見ていたのだった。所が、自分でその菜を作ってみて、何のために蝶々が菜の葉に止るかを知ってから、私は蝶々を見る目が急に変ってきてしまった。白や黄色の可愛い蝶々が楽しそうに舞って来て、裏の畑のキャベツの葉に止った後には、沢山なあの大嫌いな青虫が湧いて、折角の葉を穴だらけにしてしまうということを知ってから、私は今迄可愛いとばかり思っていた蝶を、憎むようになった。そして追い廻しながら、屢々憎らしい気さえして、箒などで追い廻すことがあるようになった自分の気持の変化を淋しいと思った。無論蝶々は、人間に悪意を持ってそうしている訳ではなく、ただ私達と同じように、当然のことをしているのが、偶々人間の生活に都合のわるいことになるというだけの事で、決して憎む程の理由はない筈だと思う。しかし、どう思っても私はそれ以来、畑の蝶々ばかりでなく、山へ入って全然別な、畑の作物とは恐らく関係のないような蝶々を見ても、昔と同じい夢のような美しさは感じられなくなってしまった。

畑と烏　だがまだもう一つ同じ様なことがあった。或時親烏が、子烏を二三羽、前の畑へ連れて来て騒がしく鳴き立てていたことがあった。私はその時、部屋で書きものをしながら、その声を聞いて知っていたのだが、ただ何の気もなく、烏が親子で来て、畑の辺りで遊んでるものとばかり思っていた。所があとで気がついてみると、私達が、その数日前播いておいて、やっと芽の出かかったばかりの唐黍をみんな掘って喰べて行ってしまったのだ。私は自分の間抜けさ加減を、馬鹿馬鹿しくも思ったが、それ以来、どの烏を見ても以前のように好意が持てなくなってしまった。

その後も、時々繰返してやられるので、私はついに業を煮やして、伊東さんの所から空気銃を借りて来て、畑へ来るのを小屋の窓から狙って撃ってやった。時々は確かに手応えがあるのだが、背中へ丸が中った位では平気な顔をして飛んで行ってしまって、またすぐ来た。癪にさわるから、こんどは庭へ出て、棹に掛けてあった洗濯物の蔭に隠れていて、柵に止った奴の前から狙って撃った。するとそれが、見事に烏の胸の辺りへ命中したので、柵から転がり落ちてバタバタしていた。私はすぐに駆けつけて、その頭を靴で踏みつけてしまった。じっと踏んでいると、ゴムの長靴の底を通して、瀕死の烏の踠きが足の裏に感じられた。暫くすると気のせいか、その温みまで伝わって来るような気がしてきた。私は立ったまま、目をつぶったり開いたりして、足の裏の感覚に注意を集めていた。

私が小鳥に向って鉄砲を撃ったのは、これが二十何年目だった。今でもまだ、ちゃんとその場所まで覚えているが、私が十八の年の秋だった、赤城山の大沼の西側の楢林の中で、夕方、木の梢に止っていた鶫を鉄砲で撃ち落したことがあった。無論空気銃ではなく本当の鉄砲だった。落ちる

には落ちたが、中り所がわるかったとみえて死に切れず、それでも、もう飛び立つことは出来ないで、目から血を流しながら、地上を走って逃げ廻っていた。可愛そうだから、追いかけて捉えて早く死なせようと思うのだが、あわててるので、首を捻ってもみたが駄目だった。それから傍の桜の大木の根へ叩きつけたがそれでもまだ死なないで逃げて歩いたので、どうしたらいいか判らなくなってきた。私は困ってしまって、これがもし元の姿に活かして返してやれるものなら、どんな犠牲を払ってもいいと思った。本当に取返しのつかないことをしてしまったという気がした。それでもまだ、目の前で苦しむのを見るのが辛いので、二度も三度も、追いかけて捉えては、木の根へ叩きつけてやっとのことで殺してしまった。そして愈々死に切ったことが分ると安心と、後悔とで、足下の鴉の死骸を眺めたまま、暫くは茫然としていたことがあった。私はそれ以来小鳥に鉄砲を向けたことは一遍もなかった。

そんなことを思い出しながら、暫く靴で踏みつけていたら、動かなくなってしまった。しかし、こんどはその死骸を見ても、その仲間が畑を荒したという、僅かな理由があった為か、それとも二十年の間に私の神経の働きが鈍くなって来ていたせいか、それでも無論いい気持はしなかったが、昔の鴉の時程の感じは起らなかった。それからその死んだ烏を小屋の前まで持って来て、庭へ放り出しておいたら、隣の学校の先生が来て見て、その死骸を紐で縛って畑の側の木に下げておくといい、と教えてくれた。あまり気乗りもしなかったが、その通りにしておいてみたら、本当にそれから二カ月位はその畑へ一羽も烏が寄りつかなかった。

こんなことがあってからは、島へ来たてには友達みたいな気がしていた鳥とも、段々疎遠な気持になってしまった。そして私達の気持に興味がなくなってきたことにも因るのだろうが、もう

その個々の鳴声を聴き分けるだけの勘も、なくなってしまったような気がした。今後、もしも私達が、カムチャッカかアラスカあたりの海岸で、小屋の生活を始めるようなことがあったとしても、もうあの声は×さんに似ているなどということは、言わないだろうと思う。そう考えると、矢張りこの気持の変化も少し淋しいと思った。

だがその後、鳥と云う鳥を、好意のない目で見て行くと、実に横着な感じのする所もあった。偶にここの浜へ発動機船が着くと、村の人達がみんな賑かに集まって、根室へ頼んでやった買物を船頭さんから受取ったり、その代金を払ったりする。そんな時にお菓子の入った風呂敷包などを、うっかり岩の上にでもおいたまま油断していると、忽ちあの鋭い嘴で布を突き破って、包みをバラバラにしてしまう。置いた人が怒って追い払いに行くと、ちゃんとそれを知りながら、愈愈危険区域に人が接近する迄図々しく食べていて、それから最後の一つをくわえて、しゃあしゃあと飛び立って行く。それからよちよち歩くような子供の持ってるお菓子を横取りして泣かせることもあるし、手当り次第の悪戯をする。なお鳥は、人間の男と女の区別を分明と認識して知っている。男が畑を耕していても、決して近くへ寄りつかないのに、それが女の人だと、すぐ後まで平気でついて歩いて、土の中から何か拾って食べている。

また鳥は非常に目聡い奴で、家の側の塵捨場辺りにいるのを、羽目板の節穴からでもそっと覗くと、すぐぱっと飛び立って逃げてしまう。

それから、私達が道を歩いて行くと、牧場の柵の上などに沢山並んで止っていることがある。知らん顔をして前を向いて歩いていると、みんなモジモジしながら兎も角もそのままでいる。だが一寸でも鳥の方を振向くと、一度に飛立って逃げて行く。しかし、こんどは顔だけ前を向けて

目を細くして横目で見ながら行ってみると、矢張り、逃げたものか、どうしようかというように、モジモジしてはいるが、それでもじっとしている。結局鳥の智慧では、人間の横目までは解らないものと見える。

島には普段二種類の鳥がいた。一つは普通内地で見るようなのと、もう一つは嘴太とかいう、身体に比べて馬鹿馬鹿しい位嘴の大きい、そしてその先の曲ってるのがいた。それから冬、流氷が押し寄せて来て「こまい」（魚）取りが始まると、色丹鳥というのが色丹島から出稼ぎにやって来て、主として網場の近所に集まっていた。それは普通の鳥より身体もずっと大きく、余り人の居る傍へは来なかったようだ。名は同じ鳥でも、この方が何か少し位が上の様な気がした。鳴き方も烏と鳶の合の子みたいで、その声を遠くから聞くと、ガアガアとは似てもつかない、コロンコロンと張りのあるいい声で鳴いていた。それに、翼の力も強いらしく、時々翼を止めて滑空もしていたようだった。

白皚々とでも形容したい、見渡す限りの氷と雪の海原に、高々と余韻を曳いて響き渡る色丹鳥の鳴き声は、何かしら凄壮な感じをもっていた。その色や形はたしかに鳥に似ていても、こんな時の感じは、どうしても別な鳥としか思えなかった。

四　島の魚

鱒と鮭　私達が最初に古丹消へ来て、まだ間もない頃のこと、浜辺を散歩していたら、向うの

方の川口で遊んでいた子供が三人ばかり、いきなり海へ飛び込んで、何か追い廻し始めた。何だろうと思って急ぎ足で行ってみると、大きな鱒を一尾、岸へ追い上げて捕えていた。側へ行ってから「沢山いたの」と訊いてみたら「うんといたよ」と言っていた。こうして、こんな子供達に空手で捕れる所をみると、相当な数いたものだろうと思った。

なおこれは見たのではないが、昔はこの辺の川に、秋になると、とても沢山な鮭の集団が溯上していて、川を徒渉しようとしても魚が邪魔になって歩けないので、先ず岸から石や木の枝を放り込んで追い散しておいて、それから人間が渡ったものだといっていた。それを始めて聞いた時は、少し大袈裟な話だと思ったが、昔は本当に、それに近い位の事実はあったのだろうと思う。

島の魚のうちで、何と云っても一番味のいいのは鮭だったように思う。有名な根室の鮭というのは、みんなこの辺の島で捕れるものだと聞いた。鮭は前にも一寸書いたが、ルイベや、焼漬の様な内地の人の知らない食べ方もあるし、島でも一番上等な魚のうちに数えられていた。島の人は鮭とは言わないで、アキアジと言っていた。そして時期外れの夏頃の網にかかって捕れるのを、ただ単に「時知らず」と呼んで相当珍重していた。従ってその値段なんかも、鱒の方は殆ど価の無いようなもので、もし買ったとして一尾五銭か六銭位だったろうと思うが、鮭の方はその十倍も二十倍もしていた。

島の魚は概して大味だったが、鮭のほかにオヒョウという鰈のお化みたいな魚もいて、とてもうまいと思った。オヒョウの大きいのは畳一枚位のまであると言っていた。

冬流氷が来て、海が一面凍ってしまった時、氷に穴をあけてその下へ網を張って、魚を捕っているのを見に行ったことがあった。この氷の下から捕れる魚は「こまい」という鱈に似たもっと小

さい魚だったが、氷の上へ山程引上げられて積んであるのを、馬橇で岸へ運んでいた。土地の人はこれを食べられるだけ食べて、そのあとは肥料に作っていた。この「こまい」が不漁な年は、お米が余計に要るとまでいわれるほど、みんなよく食べていた。それも煮たり焼いたりするのは面倒だからと言って、茹でて食べてる人もあった。しかし、この魚は沢山捕れはしたが、島の魚のうちでも不味い方だった。

チップカムイ　海岸を歩きながら網を曳いてる所へ行くと、時たま見かけることがあったが、珍しい魚でチップカムイという気味のわるい大きな魚がいた。その名は、神様の使の魚とでもいう意味の様に思われるが、身長は八九十センチもあったろうか、肌は褐色で、目に見える様な鱗はなく、身体を曲げると豚の肌のような皺が寄った。顔の感じも獰猛で、とても物凄い歯をもっていた。これを陸上の動物にすれば、差当り犀の様な格のものだろうと思った。見るからにそのグロテスクな恰好は、私でも気持がよくなかったが、妻は怖がって、側へも寄りつかなかった。これが岸近くの網にかかると海が暴れると、島の漁師達は言っていた。

滑稽な感じのする魚にゴッコというのがいた。変な恰好の長さ二十センチ余り位のものだったが、私達は、これを始めて潮の引いた後の岸の水溜りで見附けた時は驚いた。ゴッコを正面から見ると、その顔はどう見ても髭面のアイヌのような感じで、しかも少し低脳な中年男という気がした。不断からスローモーションだが、じきに怒る奴で、怒ると河豚みたいに腹が脹れて、空気枕の様に水の表面へ浮き上ってしまう。こんなに脹れて見せても、それで仲間を威嚇することは出来るかも知れないが、人間にその手を使うのは少し無理だろうと思った。その為に却って浮き過ぎて、自分で泳ぐことも逃げることも出来なくなって身を悶掻いている。私達は最初御目にか

かった時、その一人芝居を呆れて見ていたことがあった。

鮹と蟹　潮の引いたあとの鮹捕りも面白かった。しかしその鮹を捕る道具がまた余りに原始的なものなので、私達は意外に思った。それはただ普通の五寸釘を鈎に曲げて、棒の先へ附けただけのものなのだった。それを持って行って、水の少なくなった岩の下を、そっと覗いて歩くと、吸盤のある赤い足（茹でないうちからかなり赤かった）を出している。それをその五寸釘の鈎で引掛けるのだが、引掛けてから後がむずかしかった。慣れた人は一度少し引張ってからまた一寸緩めてやる。ここにコツがあるらしかった。そうすると鮹が、もっと奥へ逃げ込むつもりで手足を浮かす。その機を巧みに捉えて一挙に引出してしまう。だから素人が、始めから強引に引出そうとすると、却って鮹も強引に岩へ吸いついてしまって、身体が八裂になっても、中々出て来ないということだった。私はそれぞれの要領があるものだと思って感心した。しかし、この要領はまだ呑み込み易かったが、引出してしまってからも、まだむずかしい要領があった。それは頭の部分の袋の様な所を巧みに手早く、ひっくり返してしまうことだった。そうするとそのまま浜へ放り出しておいても大丈夫で、帰りにそれを拾い集めて来るのだった。一度頭部を裏返しにされた鮹は、流石にもう歩くことは出来ないで、八本の足を揉み合せて悶掻いている。この動き続けているとが、また必要なので、もしも殺して動かなくすると、すぐ烏に突っつかれてしまうのだそうだ。でもこの頭をひっくり返す芸当は到底私達の及ぶ所ではなかった。私達はこんなのを一疋持って帰ると、余り量が多過ぎてもて余した。吸盤も皮も削り落してしまって、中実だけにするのだが、それでも二度や三度にはとても食べ切れなかった。

蟹は買って食べただけで、自分達で捕りに行ったことはなかったが、島には流石に立派なのが

いた。或時、夕方遅くなって、ゲレンデからスキーで帰ってみると、小屋の入口に大きな奴がぶら下っていたので、びっくりしたことがあった。それは一人で足の二本ずつも食べると沢山になってしまう程大きなものだった。こんな大きな蟹の鋏の中には、とても豊富な肉があって、それがまた実においしかった。

貝では帆立貝とホッキ貝がおいしかった。

鰊もかなり捕れたが、その初ものはうまかった。でもいい気になって食べ過ぎると、じきに飽きてしまうのだった。

それからメイセンなどという反物の様な名の魚も濃厚な味でうまかった。なおキウリという魚もいた。それは魚の癖に、生の時、野菜物の胡瓜そっくりの匂いがした。

まだまだ、そのほかにも沢山いたし、釣りもやれば出来るのだったが、私達は自分の仕事が忙しかったので殆ど行かなかった。

五　鼠の話

頭上の煉瓦　二年目の秋の末、また寒い北風が吹き始めて、もうそろそろ地面が凍りかけてくる頃、山に食物が少くなってでも来たのか、鼠が小屋へ這入ろうとして、夜になると、入口の戸をガリガリ齧って仕様がなかった。

元来この小屋には、鼠の這入って来られるような所もなかったし、もし這入ったとしても、安全

かったし、下は砂地で湿けたり、氷上ったりする心配がなかったから、根太を埋め込んで、風の入らないように厚い板を砂に密着させて張って、小屋の周囲は厳重に囲って埋めといたので、縁の下もなかった。そんな訳で私達は、今まで余り鼠の来訪を受けたことがなかったせいか、余計気になっていけなかった。放っておいたって、戸に穴を開けて鼠が中へ這入って来るまでは、容易なことではないと思ったが、矢張り齧る音が耳について、眠ろうとしても邪魔だった。寝床の中から、「シッ」と言うと、一時は止めるがまたやって来てガリガリ始める。それも度重なると、鼠の奴が図々しくなってしまって、利き目がなくなってしまった。

私は、いまいましい奴だと思いながら、その音を聞いてると、ふと、或る考えが浮んだので、思わず一人で吹き出してしまった。側にいた妻が、びっくりして、どうしたと訊くから、鼠の奴が煩いから、一つ驚かしてやろうと思う、と言って起き出してしまった。それから仕事場で煉瓦を一つ見附けて来て紐で縛り、御苦労にも戸に錐で穴をあけて糸を通し、縛った煉瓦を戸の外側へ吊しておいて、その糸の他の端を持って寝床へ這入っていた。この私の子供みたいな思い附きに妻も面白がった。

それから私は一人で考えていた。鼠が今迄のつもりで戸口へ来て、ガリガリと齧っていると、思いも寄らぬ頭の上から、いきなり煉瓦が落ちてくる。どうせ敏捷な鼠のことだから、下敷になるようなことはあるまいが、その瞬間、どんな風に驚いて飛びのくだろうと、その時の恰好を想像して、紐の端を持っていながら可笑しくって堪らなかった。

待っていると、そんなこととは夢にも知らない鼠は、間もなくまた出て来て、ガリガリとやり始

めた。頃合を見計らって、紐の端を離してやると、大変な音を立てて煉瓦が落ちていった。計略が図に当ったので、鼠の奴嘸びっくりしたことだろうと思って、私は一人で悦に入っていた。そしてまた齧ったら落してやろうと思って用意しておいたが、鼠はもうそれっきり来なかった。しかも、その晩来なかっただけではなく、それからは、ほかの場所を　りかけても、戸口だけは決して齧らなくなってしまった。しかし結局、鼠にとって　りよかったのは戸口だけだったから、私達はそれっきり眠りを妨げられるようなことはなくなった。私はうまくやったと思いながらも、また少し、あっけなさ過ぎるような気もした。そして鼠にも話が出来るものだろうかと思った。当時たしかに何匹か仲間がいたろうと思われる、その鼠のうちで、「戸口を齧っていたら煉瓦が落ちて来た」という経験をしたのは、傍でそれを見てでもいない限り、一匹だけだったと思うのに、それ等の何れもが、戸口を齧らなくなったことをみると、何だか、鼠達が集まった時「うっかり、あの小屋の戸口を齧ると煉瓦が落ちて来るぞ」とでもいう話をしたような気がして、また可笑しかった。

事実、その後暫くの間に、この時のお仲間と覚しき、同じ様な大きな鼠を四匹捉えた。そしたらそのうちに、尾の附根のすぐ先に、大きい古疵のあったのがいたから、多分それが最初戸口を齧った奴で、その疵跡は煉瓦の落ちた時のものだろうと想像した。

しかしその四匹を捕える迄には、それ相当の経緯があった。私が鼠の頭上に煉瓦を落してやってから間もなくのこと、こん度は小屋の中に、大きな鼠が一匹いるのを見附けた。小屋にはどうしたって、外から這入れる穴はない筈だったから、きっと、私達が戸を開けたまま、留守にしていた間にでも、こっそり這入り込んで来たものだろうと思った、それから入口の戸を閉めておい

て、二人で追いかけてみたが、いくら狭い小屋の中でも流石に敏捷で、寝台の下や流し場の辺りを巧みに逃げ廻っていて、中々捕らまえれなかった。しかし鼠の方も亦、何処の隅へ行ってみても逃げ出せる穴もなければ、落着いて隠れていられる場所もなかったので、雲隠れも出来ず、暫くはそんな活劇が続いた。

鼠捕箱　だが私はしまいに、何時迄もその相手になってるのが馬鹿馬鹿しくなって来たので、有合せの大きな箱で、即製の鼠捕を作った。そして餌はお魚の片をバタで揚げて鈎に刺し、それを齧ると蓋が落ちるようにして、寝しなに掛けておいた。

それから、私達はもうそんなことは忘れて、いい気持で眠ってしまったが、夜中になってバタンと大きな音がしたので、びっくりして目を覚ました。起きて行ってみると、確かに鼠は箱の中へ這入っていた。私は鼠の奴、御馳走を発見して一口齧ると、その途端に大音響と共に蓋が落ちて来て、箱の中へ閉じ込められてしまったのだから、嘸またびっくりしたことだろう、音のした瞬間は、きっと身体の何倍か飛び上ったに違いないなどと思った。逃げ場を失った鼠は、箱の中を駈け廻って所嫌わず板の隙間をガリガリ齧っている。私はうまく行ったので一寸得意だったが、じきに困ってしまった。先刻箱を作る時、鼠を捉えることまでは考えていたが、迂闊にもその先の始末には気が附かなかった。このままにしておけば、箱に穴を開けて出てしまうし、折角捕えたのを、表へ出して逃がすという手もないと思ったので、さんざ持て余して相談した挙句、温泉で溺死させてやろうと思って、風呂場へその箱を持って行った。しかし、風呂場へ行くと、寝巻のまままごまごしていて、寒くなったものだから、自分達が先へ湯槽の中へ這入ってしまった。鼠は相変らず箱の中で暴れているが、まさか一緒に入れる訳にもいかないので、蓋の隙間か

ら湯を注ぎ込んでみた。でもそんなこと位では、とても埒が開かないから、ボート錐を持って来て、蓋に穴をあけて、そこから湯を入れてみた。しかしそれでもまだ、板の隙間から洩ってしまう方が多いので、また穴の数を増して、コップや洗桶でどんどん注ぎ込んだ。箱の中の湯が段々深くなってくると、鼠は愈々暴れ廻っていたが、しまいには苦し紛れに、湯を入れてる穴にまで口先を出して来た。それを見ると可哀そうになったが、今さら止める気にもなれず、早く死んでくれと思いながら、私達は一生懸命この注水作業を続けた。

やっとのことで往生させてしまって、やれやれと思ったが、何故あんな可哀そうな殺し方をしたかと思うと、私はまた自分のしたことの軽率さが悔やまれて、寝床へ帰ってからも長いこと、その気持が頭へ沁みこんで離れなかった。

押潰し鼠捕　もうこれでいいと思っていたら、暫くしてまた一疋入って来た。こんどは前の時懲りていたから、自動的に短時間で溺死させてやろうと思って、大きな水甕の中へ、八分通り水を入れてその上側に橋を渡し、水に鋸屑を一杯浮かせて、その上へ小さな板切れに餌を載せておいてみた。鼠がそれを取りに下りたら水へ落ち込むだろうと思っていたのだが、これは鼠の方が利巧で、餌に手を出さなかった。

だがそのままにしておくのも癪だったから、また新しい別な装置を工夫した。こんどは大きい重い箱の蓋を持って来て、その一端を皮の蝶番で、流しの下の床へ取附けた。そしてその下の真中頃の床の上へ餌をおいて、齧ると蓋が落ちるようにした。なお蓋の目方を増すために、蓋の上側へ煉瓦を載せておいた。この方法はうまく成功した。翌朝起きて行ってみたら、蓋が落ちていたので持ち上げてみると、素晴らしく大きな奴が、丁度漫画によくあるスチームローラーに敷か

れた人間みたいに、一センチ位の厚さの平らなお煎餅のようになって、もう固くなっていた。これは別に血も出ていなかったし、蓋の落ちる時も、間に鼠がいるので、目の覚める程大きな音はしなかった。それにショックが大きいから、同じながら鼠の苦しみも、きっと少いに違いなかろうと思った。それで以後千島にいる間は、ずっとこの方法を利用していた。

二十日鼠と蠅捕紙　これはこの小屋の時ではなかったが、一冬留守にしておいたら、小さな二十日鼠が沢山小屋へ這入っていた。あんまり小さいので、捕ろうと思っても今迄の鼠捕装置では、どの方法でも駄目だった。だが矢張り安全な隠れ場所のない小屋だったので、追い出すといくらでもチョロチョロと出て来て、部屋から部屋を走り廻った。それから妻が追い出して、私が部屋の入口で待っていて棒で叩いてみたが、中々うまく当らなかった。仕方がないから、金網の鼠捕を借りて来て掛けてみたが、小さ過ぎて網の目から出たり這入ったりしていた。そんなことで、二三日は持て余していたが、どうも煩くって気になるので、何かいい方法はないものかと考えた挙句、やっといいことを思い付いた。それは蠅取紙を一枚持って、部屋の戸口で待ち伏せしていて、追われてチョロチョロと走ってくる奴へ、いきなり、ヤッと被せてしまう。すると紙に塗ってある黐が、一寸でも鼠の毛に附くと、もう逃げられなくなるので、それを手早く、くるくると包んで放り出しておくと、間もなく窒息して死んでしまうのだった。その二十日鼠の一群は、これでみんな退治してしまった。

鼠と湖　これは昔、赤城山にいた頃だったが、或る夏、地下室で金網の鼠捕へ、大きな奴が入ったことがあった。それを二三人で小舟へ乗せて、湖水の中へ持って行って、小島（幅三四米、長さ十米余りの小さい島）の岸から十二三米の所で、籠を水面に近づけておいて、入口の蓋を開

けてみた。どうするだろうと思って見ていると、鼠はちっとも躊躇しないで、いきなり水の中へ飛び込んでしまった。ボシャンと音を立てて入ったっきり、何時まで見ていても中々浮いて来ないので、さては溺れたのかなと思っていると、やや暫くしてから、凡そ六米程先へ、方向も間違えずにポカリと浮き上って、それから先は水面を器用に泳いでその小島へ辿り着き、忽ち石の間へ這入ってしまった。すぐあとから行って、隠れた石の周囲を覗いてみたが、もう何処にも鼠の姿は見えなかった。

水へ飛び込む前に、一目小島を睨んであらかじめ見当をつけておいたという様子も見えなかったし、それに不断から泳ぐ稽古をしていた訳でもなかったろうに、うまくやってのけるものだと思って私は感心した。なお最初から水面を行かずに、息の続く限り、数米も先へ、しかも出来るだけ深い所を、潜って行って、敵の追跡を免がれようとするなどは、相当な頭の働きだと思った。

鼠と雪原　これは二度目の赤城山の小屋の時だった。或る冬、地下室へ掛けておいた金網の鼠捕にまた大きな奴が一疋入っていた。手を掛けて殺すのもいやだから、庭の雪に穴を掘って鼠捕ごとその中へ埋め、上から固く踏みつけて、こうしておいたら中で窒息するだろうと思っておいてみた。そして半日程経ってから掘ってみたら、窒息するどころか素晴らしい元気だった。それから、一体鼠という奴は、広い所へ出したら何れ位速いものだろうと思って、氷が張りつめて一面の雪野原となっている湖水の真中までスキーで持ち出して、籠の戸を開けてみた。雪の状態はウインドクラストで固く締っていて、鼠の走るのには絶好なコンディションだった。

鼠は籠の口から飛び出すと、いきなり走り出したが、それは走るというよりは、毬の弾むように、ぽんぽんとバウンドしながら飛んで行った。その動作は非常に敏活だったが、見ていると最

初から場所の広さに対して、調子が合わなかった。丁度大海の遠泳に抜手を切って行くような感じだと思った。スケーチング（スキーを片足ずつ上げて雪を蹴りながら、スケートの様な恰好をして走って行く滑り方）で追掛けてみると忽ち追い着けた。するとまた鼠は方向を換えて、逆な方へバウンドしながら飛んで行った。近い方の岸までは二百米位しかないのだが、鼠にはそれが遠くって、見極めが附かないらしかった。暫く行ったが、見ているど追われもしないのにまた方向を換えて飛んで行った。そうして、しまいには、とうとう疲れ切ってしまったとみえて、私達が傍へ行くと、スキーの先の反り上ってる蔭や、杖のリングの下へ隠れるようになった。そのうちに、いくら追っても動かなくなったから、私は厚い手袋を嵌めてるまま、手の上へ拾い上げてみたが、それでも鼠はもう往生して、じっとおとなしくしていた。厄介な奴だと思ったが、再び小屋の方へ来ないようにと思って湖の向側まで持って行ってやった。そして岸の二十米位手前で雪の上へおいてみた。暫く手の中で休息してもいたし、今度は岸も見えたらしく、真直ぐに飛んで行って、そこにあった木の根の雪の凹みへ這入った。しかしその木の根には隠れ場所がなかったので、飛び出してまた次の木の根へ這入った。そこにも穴はなかったのでまた次へ移った。だが四五回そんなことをしているうちに、とうとう見えなくなってしまった。後をついて行って調べてみたが、どの木の根にも穴らしいものはなかった。だが矢張り狭い所へくると、雲隠れの術が利く様になるものらしく、私達は感心しながら帰って来た。

鼠に咬まれる　これも赤城の小屋にいる頃で、時期は夏だった。私達が一寸湖畔へ出ている間にまた大きな山鼠が一疋小屋へ這入っていた。すぐ戸を閉めて、お勝手の棚の隅の、逃げ場のない所へ追い詰めてしまって、ブリキ屋で使う釘抜の大きいような道具を持って行って、後足をし

っかり挾んでしまった。キイキイ鳴いてる奴をそのまま引張り出したが、小屋の中を持ち廻ってみても、庭へ持出してみても、どうにも仕様がなかったので、また溺らせてやろうと思って溜水へ持って行った。

愈々水際まで行って、私が蹲みかけると、鼠が突然、今までと違った感じの動作をする気配が見えた。その瞬間、私は「あ、やられるな」と思った。「その手があったのか」と云う気もした。それが実に、時間にしたら十分の一秒よりも短かかったろうと思う。鼠がその動作を起す寸前に気が附いていたのに、何故か逃げる暇がなかった。やられるなと思っているうちに、もう釘抜の柄に手をかけて、飛ぶように身体を伸ばして来た鼠の口が、私の親指の根元へ深々と咬み附いていた。咬み附いたと思ったら指の中で、鼠の上歯と下歯が肉を咬み抜いて交叉するのがよく分った。「痛いっ」と思ったが、事態がここまで来てしまったので、仕様ことなしにだったろうが、不思議に気持が落着いた。私はすぐ左手の親指と人差指で鼠の首を力任せに絞めつけた。そうしていた時間は正確に覚えてはいないが、多分十秒か、十五秒位だったろうと思う。最初首を絞められて、手足を動かして悶掻いていた鼠が、やっと動かなくなってしまったと思ったら、首を絞められていたせいだろうが、二三秒すると自然に口が開いて、歯が上下へ分れて疵口から抜けて出た。抜け出た鼠の歯を追うように親指の疵口から血が流れ出た。その後はほかの怪我と違って、何だか気持がわるかった。幾日も幾日も経って疵口が塞がってからも、まだ不安でいやな気がした。私の子供の頃、家にいた男が鼠に足の親指を咬まれて、それがひどく咎めて二ヵ月も医者へ通っていたことがあった、そんなことまで思い出して、何となく心配だった。しかしいい塩梅に、私の場合は別に咎めるようなこともなく、無事に済んでしまった。

でもその時小屋へ帰って疵口の手当をしながら、何故咬まれるような持ち方をしていたかと考えてみた。あれが一番最初捉えようとした時、すぐ咬みつきに来れば、私もきっと逃げられたような気がする。それが捉えられてから、少なくも四五分の間、一度も咬みつきそうな素振りも見せなかったものだから、私はつい、鼠には咬みつく姿勢にはなれないものの様な気がして、別にそれ以上考えようともしなかった。だから私には捉えてしまった直後から、既に大きな油断があった訳で、この勝負は、最初から軽率だった、私の方の負だった。

しかし鼠の方にして見れば、それまでに、いくらでも咬みつく機会はあったのに、気が附かなかったのか、それとも知っていてやらずにおいたものか、その点は分らないが、もしもこの場合鼠がもっと冷静沈着で、よく人間の心理を摑むことが出来たとしたらどうだったろう。

そうすれば、もっといい機会、例えば淵畔へ行く途中の藪のある辺りで、突然攻勢に出て身体を伸し、指に咬みつき得る体勢を整えておいて「咬むぞ」という恰好だけして見せたら、私は必ず不意を打たれて、釘抜ごとそこへ放り出したに違いない。そうすれば鼠の寿命は、まだここでは終らなかっただろうと思う。だからこの鼠は、チャンスの摑み方の時期を失して、惜しい所で折角もう一度与えられていた幸運を取逃がして、勝てる勝負を捨ててしまったことにもなると思う。

そう考えて来てみると、このことは必ずしも敵に捉えられた時ばかりの問題ではなく、自分達が山やスキーで、不幸にして窮地に陥った様な場合、冷静沈着に機会を摑むと云うことの妙を考えなければいけないと、教えられたような気がした。

六 二年目の冬

長谷川氏来る この年の暮には、友人長谷川伝次郎氏が私達の小屋へ遊びに来た。私達の島の生活六年間を通じて、内地からの御客さんは長谷川さん一人だった。ほかにもまだ、私達の話を聞いたり、島の写真を見たりして、是非行きたいとか、来年はきっと行くとか言った人は何人かあったが、遂に来られなかった所をみると、矢張り千島は不便な遠い所だったという気がする。長谷川さんは数年間印度にいて、しまいには、印度人に化けてチベットへ這入ったり、ヒマラヤへ登ったり、愉快な生活を続けていて、前の年あたり日本へ帰って来たばかりだった。そしてこんどは、スキーを担いで千島へやって来て、私達の小屋で一シーズンを滑り暮そうと云うのだった。長谷川さんは、麻生さんに貰ったと言って、ジャムプスキーまで用意して来た。

小屋は元気な新手が加わったので、また賑かになった。長谷川さんは、デンマーク体操の研究家でもあった。教わり度いと思っても、小屋の中が狭くって駄目だったが、後には毎朝早く起きて隣の学校の教室へ通い、学校の先生等も混って一緒にデンマーク体操の稽古をした。

やがてまた、雪のシーズンに入ったので、私達の生活は愈々活気附いて来た。ゲレンデも、前シーズンよりは広くなっていたし、村の人達のスキーも、ずっと進歩してきた。小さいシャンツェを飛ぶ人の数も段々多くなった。長谷川さんも、昔スキーをやっていたので、じきにうまくなって、間もなくジャムプもやり出した。長谷川さんは当時三十八だったと思う。私は三十七から

本格的に飛び始めたのだったが、長谷川さんの方が、一つだけ遅くなってから始めた訳だった。どうも私が定石外れをやるものだから、類を以て集まるというか、この長谷川さんのジャムプ入門などもその一つで、恐らく、年をとってからやり始めた方のレコードだろうと思う。

私達は連日ジャムプスキーを担いでは、シャンツェへ通っていた。そして熱心に練習を続けていたが、一つ私にとって張合抜けのしたことがあった。それは妻が妊娠して、ジャムプが出来なくなったことだった。それでも毎日、山スキーを穿いて一緒に出掛けて、私達のジャムプの手伝いをしたり、自分でもその辺で軽い練習は続けていた。

印度の歌　小屋へ帰ると、私達はよくストーブを囲んで編物をした。長谷川さんも、間もなくその御仲間入りをして、沓下などを編み始めた。暴れ日には交る交るレコードをかけたり、ヒマラヤの話を聞いたりして、愉快な話題は、それからそれへと尽きることがなかった。

夜中頃に、草臥れて眠っている私達の耳へ、微かに、緩かな、美しい歌の旋律が流れ込んで来ることがあった。すると始めのうちは、何か魂を子守られるような、いい気持になって聴いているが、段々夢、現の境から少しずつ浮び上るようにして、現実の世界へ目覚めてきた。見ると、青白い月の光が冴えて、昼間のように明るく、窓ガラスに附いた繊細なジャックフロストの絵の様な模様を、美しく照らし出していた。

歌の声の主は、月に誘われて一人でガラス張りの温泉へ漬り、雪と氷に輝いてる窓の光を眺めながら、いい気持になって口遊んでいる長谷川さんで、古い印度の民謡だった。長谷川さんの歌は、氏が印度にいた時、タゴールの大学で音楽をやっていたというだけあって、さすがに素人離れのした奥行を持っていた。暖かい印度大陸の土に、育くまれて伝わって来たという歌の旋律

が、北海の離れ島の雪の中で聴いても、不思議に、何の不自然さも感じられなかった。それは何か、地域の隔りや、人種の別を超越して、人の心に触れてくるものがある様に思えた。

裸ジャムプ やがて、シーズンも半ばを過ぎる頃になると、何時ものように、身体のコンディションが良くなって来て、いくら猛練習をしても、殆ど疲労を感じないようになった。長谷川さんのジャムプの進歩も著しく、毎日張り切ってよく飛んでいたが、この頃はもう二十米位の距離は出す様になっていた。

春が近づいてきて、朗かな、暖かいお天気が続くようになった或る日のこと、台は小さいし、アウトランには逆斜面があるし、安易な気持で飛べるので、私は上衣を脱いで飛んでいた。だがそれでも暖かいので、シャツまで脱いで裸になって飛んでみた。二三日はそうしていたが裸がいい気持だったので、少し位寒い日でもシャツを脱いで飛ぶようになった。そのうちに今度はズボンも脱いでみた。次にはズボン下も脱いで飛んだ。しかし、もっと徹底してみたい気持になったので、とうとうサルマタまでも脱いでしまった。いくら何でも、沓下と靴だけは脱ぐ訳にいかなかったが、それ以外には、完全に一糸も纏わない丸裸になって、眩しいばかりに照り輝いている太陽の光を全身に浴びながら、真白い雪の上を、寒風を切って飛んで行った。馬鹿馬鹿しい話だと思う人もあるかも知れないが、本人はいい気持だった。

さすがに、最初は一寸異様な感じがしないでもなかった。アップローチに立った時は、そんなでもなかったが、スタートしてスピードが出てくると、股から腰のあたりを、妙に冷たい風がスーッと吹き通して行く。思わず緊張して踏み切って飛んだが、その緊張した感じが気に入ったので、それからは、第七シャンツェと呼んでいた村の方からは岡の蔭になっていて見えない台で、

自分達だけの時は、何時も裸になって飛んでいた。しまいには、長谷川さんまで上半身は裸で飛ぶようになった。

そのうちに、裸ジャムプで一つ面白い発見をしたことがある。その理由は遂によく解らなかったが、裸になると、必ず飛躍距離が延びることだった。何時やってみても例外なしに、五パーセント乃至十パーセントは余計に飛べた。例えば、最初に行った時、着物を着たままで十五米前後を飛んでいたものが、裸になると、立所に十六七米は出るようになった。第七シャンツェは、最大限度二十米近所の台だったから、空気の抵抗を云々する程のスピードはなかったと思う。それから、裸になった結果、膝や腰の屈伸運動が楽になる為かとも思ってみたが、それだけで、これ程の差が出て来ようとは考えられなかった。また内股あたりを吹き抜けて行く風の冷たさに刺戟されて、つい緊張して踏み切るせいかとも考えてみたが、しかしこれもズボンを穿いていたって緊張して飛ぶことが多いのだから、そればかりとも思えなかった。何時かはこの問題も解決してみたいと思いながら、まだそれっきりになっている。

しかし、兎も角も愉快な練習だった。自分で見られないのは惜しかったが、裸で飛ぶと踏切る時の膝の伸び方などが、実によく分ったそうだ。私達はその頃も、フライトの写真はずっと撮っていたから、途中の静止状態に見える姿勢だけは、自分でもよく分った。

裸ジャムプも、続けて一週間もやってると、段々馴れて、あたり前のような気持になって来た。その為に、つい始めた頃の様な用心深さがなくなって来て、或る暖かい日の午後の練習の時、いきなり真裸になって、アップローチの頂上からスタートしてしまった。出てみたら、パラピンがよく雪に合って思いの外スキーの滑りがよかった。これは出るな、と気が附いたが、その

まま踏み切って飛び出した。出てみると案の定、フライトが高過ぎたので、困ったと思ったがもう間に合わなかった。空中で制動する訳にもいかず、とうとう着陸斜面を越しかけて、クニックの間際へ下りてしまった。そして春の日の直射を受けて、幾分緩るみ加減になっていた雪の中へ、スキーが十センチ余りも埋まった。別に姿勢も崩れてはいなかったし、随分用心して下りたつもりだったが、頑張り切れないで、とうとうザラメ雪の中へ真逆さまに転がり込んでしまった。縺れたスキーを揃え直して起き上ってみたら、身体へ着いた雪が、体温で忽ち融けて流れ出したものだから、一遍に寒くなってきて震え上ってしまった。そして雪の中の裸はこんなにも寒いものかと、始めて知ったような気がした。その上、背中や腰のあたりをザラメ雪で所々擦り剝いたので、ほうほうの態で小屋へ逃げて帰ったようなことがあった。

氷原　春山の雪が、ザラメになってきてからは、三人でよく山へ出て歩いた。弁当持参で遠い山の尾根を廻ってくることもあったが、また時々は方向を換えて、流氷が流れ着いて一面の雪原と化した海の上を、ずっと沖の方まで出て行くこともあった。広い雪原の所々には流れながら押されて盛り上った、氷山ならぬ氷の山が出来ていた。累々と、不規則に積み重ねられた蒼い氷に日が差し込むと、胸の透くような華麗さがあった。こんな時に色丹鳥が高い空を、コロンコロンと張りのある、冴えた声を響かせながら鳴いて通るのを聴くと、如何にも自分達が、北海の冬の中に来ているという感じがした。

前年この村のある人が、沖の氷に穴をあけて魚を捕っていたところ、何時の間にか広い広い範囲の氷原が静かに移動し始めて、気の附かないうちに遠く岸を離れてしまったことがあった。暫くしてそれに気が附いたその人は、大いに驚いて、村の方へ向って助けを求めて呶鳴ってみた

が、どうせそんな時は風が逆なので、村の人の耳にまでその声は届かなかった。仕方がないから諦めてその人は、その辺においてあった蓆や、空俵をみんな被って氷の上に寝ていた。氷原はそのまま漂流して、ぐんぐん沖へ出たが、二三日して風が逆に代ったのでまた島の方へ戻って来た。そしてそれが運よく隣村の海岸へ流れ着いたので、いい塩梅にその村の人達に発見されて、危い命を助けられたというような話も聞いた。

静かな日の夕方、この氷原の上で、遥かに知床半島の山の後へ沈んで行く大きな太陽を見ていると、何かひどく厳粛な感に打たれることがあった。

村の斜面に雪のなくなる頃、長谷川さんは、北千島へ行ってみると言って帰って行った。五月になって、千島も、さすがに春の日差しがポカポカと暖かくなって来た頃、妻は男の子を生んだ。身体が丈夫だといっても、医者も産婆もいない所で御産するのは、多少の不安を感じないこともなかったが、島の人だってみんなこのままでするのだからと思い直して、気を大きく持っていた。所がいざとなってみると、少しは不自由なこともあったが、近所の人達も親切によく世話をしてくれたし、結局案ずるより生むが易しで、別段の故障もなく、親子とも至って達者だった。その後日が経つに従ってみんな元気になって行ったので、ようやく安堵の胸を撫で下すことが出来た。

それから、子供の名は何と附けたものかと色々相談してみたが、千島で春生れたからというので、「千春」ということにした。

セルロイドエッジ　この一二年私は、スキーのエッジの保護と、締具の改良の必要とを痛切に感じていたので、思い附く度にそれを色々と試作していた。締具も、全金属製のものを幾通りか

工夫して、不自由な工作道具で根気よく拵えてみた。そのうちには、かなりに気に入ったものも出来て、現在でもまだ親子してずっと愛用し続けているものもある。今でこそ到る所で、カンダハー等の全金属製締具を使用しているのを見掛けるが、当時は幾多の欠点があるにも拘らず、一般には皮製締具に対する信仰が篤く、金属性のものは不当に排斥されていた時代だった。

エッジの保護にも色々と苦心した。セルロイドが欲しいので何か思い附いても、島では材料が得られないので、その点でも苦労が多かった。セルロイドが欲しいので三角定規を切って使ったり、アルミニュームの板で試験してみたくなって、御勝手の洗桶を毀したりしたこともあった。それから、ベークライトに粉雪が附くか、どうかと思って、ベークライト製の御椀を両手に持って、雪の斜面を這って歩いたりしたこともあった。

今となってみれば、硬度の不足その他で、余り利用価値はなくなって来たが、当時ある運動具店へ勧めて、スキーのエッジや滑走面に、セルロイドを貼って、実用的に使用し始めたのも、この時の研究の結果だった。そのセルロイドを、スキーの滑走面に貼ってみる試験などは、島では充分に出来ないので、内地へ出て来たとき色々とやってみた。あとで考えると無駄な骨折をしたような気のすることも多いが、当時は無論大真面目だった。スキーの裏一杯に、厚さ一ミリ半もあるセルロイドを貼りつけて、それを苦心して溝の中まで押し込んでみたら、材木みたいに固いスキーになって、ちっとも弾力のないものになってしまったこともあった。それからセルロイドの厚さを減らして、溝だけ除けて貼ってみたら、弾力はよくなったが、こん度はそれを寒い所へ持って行ってみる必要があると思った。だがそれは丁度夏だったので、行く場所もなく、致し方ないので製氷会社の地下室へ持ち込んで、盛夏、マイナス十四度の寒さの中に、三十分も頑張っ

ていて震え上ったこともあった。それから十一月には是非共島へ帰らなければ、船の都合がわるくなるので、十月のうちに幾度か白馬の頂上までそんなスキーを担ぎ上げて試験してみたこともあった。しかし、何れも木材と、セルロイドの膨脹係数の違いがスキーの形を一時的に狂わせるので、不結果に終ってしまった。白馬へ行った時などは、東京を出る時、両方合せて二十ミリで丁度いい固さだったスキーの中のベンドが、頂上へ登るに従って段々殖えて行って、愈々穿く頃には約二倍半の四十八ミリになってしまって、滑りながら曲ろうとしても、エッジが雪に引掛ってどうにもならなかったこともあった。

なおこの頃は、そのほかにも、スキーの杖の改良、耐寒服装の工夫等々、暇さえあれば、そうしたことに没頭していた。

七　沓下の表

沓下　この春は、赤城山以来数年に亙って編み続けて来たスキー用手編沓下の研究が一段落ついたので、その整理をすることにした。それは、色々の目数や、寸法の表を作るのだが、この時の表が着手して以来八年目で、改良すること丁度十回目のシステムだった。何か改めたい点を思い附くと、計算尺を持出して厄介な日数の勘定をしたり、なお疑問の残っている個所は、部分的に試作してみたりしながら、かなり長いことかかってようやく書き上げることが出来た。

私が沓下の自製を思い立ったのは、丁度赤城山にいてスキージャムプをやり始めようとした頃

のことだった。当時は冬になると、普通市販の毛の沓下を、五足ずつ重ねて穿いていた。その頃、町で売っていた沓下の大きさは、この頃のように、二十五センチだの、二十七センチ等という大型なものはなく、大人もので九インチ半、凡そ二十四センチと大概きまっていたので、足の大きい私は何時も困っていた。それでも一番下に穿くのは、まだよかったのだけれども、上へ重ねるもの程無理に引伸ばされるので、すぐに切れてしまうのだった。それに、買った時はいい恰好なのだが、穿いてみると踵の形が崩れ易くって、その点も工合がわるかった。それでスキーや山には、もう少し形も質も丈夫なものが欲しいと、つくづく思ったが、当時は何処の店にも、そういう特殊なものは売っていなかった。

そのうちに、真剣にスキーをやる様になると、愈々沓下に不便を感じて来たので、何とかして自分で編みたいものだと思っていた。だがまだ私は、編物をした経験が全くなかったので億劫にしていたが、丁度当時、京城にいた姉の所へ、朝鮮の温突を見に行った時、姉が沓下を編んでいたものだから、その作り方を早速教えて貰った。しかし編み始めてみると、所謂在来の手編の沓下では、まだ踵の形が充分とは思えなかったので、どうせやり始めるのなら、もっと理想的なものを考えてみようと思った。そこで表編みと、裏編みだけ覚えると、あとは一人で工夫して行くことにして帰って来た。でも愈々着手してみると、これも中々思った程容易なことではなかった。やればやる程難かしくなるような気がしたので、ついには、本当の日数と、同じだけの数の目のある図を描いてみたり、面倒な所へ来ると算盤を前において、一目編む毎に玉を一つずつ動かしたり、また鉛筆で一つずつ図上に印を附けて行ったりしながら、編んだこともあった。それから夜遅くまで編み続けてきて、いくら考えても中々うまい案が浮ばないので、ああか、こうか

と迷ってるうちに、胸がわるくなって吐きそうになって止めたことも、幾度かあった。また或時は、同じ踵を、編んだり毀したり十七回続けたら、とうとう毛糸がボヤケてきて駄目になってしまったこともあった。

やっとのことで拵えて、略々これでいいだろうと思って穿いてみると、踵の形が崩れてきたり、洗濯してみると足に合わなくなつてしまったりして、悲観したこともあった。始めの頃はずっと、自分の足だけで試験してみていたのに、目のかけ方を次々と改良して三十何足目かまでは悉く故意と片跛なものばかり編んでみたような始末だった。無論私の頭のわるいせいもあったに違いないが、兎も角も予想外にむずかしいものだと思った。

そのようにして、漸くこれならまあ大体いいと自信が持てる踵の出来上ったのは、編み始めてから丸八カ月を過ぎてからのことだった。この間は少しでも暇があれば、何処にいても編んでいた。旅行などをすると、汽車や船の中でも編んでいたし、宿屋の二階でも編んだ。自分の家にいる時は、お便所の中へ迄持ち込んで編んだこともあった。

その後、自分達の沓下の寸法が略々仕上がると、他の人が穿いたらどう云うことになるかと思ったので、友人の足の寸法を計ってみて、よく合うように拵えて送り、なるべく乱暴に穿いてみてくれるようにと頼んで、穴があくとまた送り返して貰って、参考にしてみたようなこともあった。

そのうちに段々進歩して来て、踵の形なども編んだ時よりも、穿いてからいい形を保つことを考えるようになった。大きさも使用する糸によって、縮む割合を推定してあらましの表を作り、二三回洗濯してから本当に足に合うように編むことにした。

それ以来、幾度かの階梯と、変遷を経て、現在は普通二月頃の極寒の時でも、私達は一足だけで間に合わせることにしている。ただ特殊な場合、例えば真冬に高い山の頂上へ登る様な時とか、厚い沓下にまだ馴れない人に勧める時だけ、稍ゝ薄いのを二足重ねて穿くようにしている。なお以上の様な訳で、私の場合は始めから、馴れた人に教わったという訳ではなかったから、目のとり方も、図の描き方も自然、婦人雑誌等に出てるものとは違って来ているので、一寸取附きにくい感じをもつ人もあるかも知れないと思う。しかしすっかり規則的なものだから、最初にその図の見方を呑込んでしまえば、あとはその図によって足の大小、編む針の太い細い、それから糸の多い少ないのも、表の通りにして行きさえすれば、間違いなく誰の足にでも、ぴったり合ったものが出来る筈だと思う。

その後、山の人にも都会の人にも相当大勢の人に勧めて、編み方を教えて上げたが、大体みんな満足して使っているように思う。

手袋　沓下が略ゝ仕上がると、こんどは手袋にかかった。これも今までの経験によって設計を新たにしたり、幾つも試作をしてみた上、二本指のもの、五本指のもの共に略ゝ決定的な表を作ることが出来た。三本指もどうかと思って幾つか作ってみたが、これは中途半端でついに気に入ったものにならなかったので止めにした。

それからよく訊かれる二本指の手袋と、五本指のものとの長短に就いてであるが、私達は左記のような理由で、今はみんな二本指を使うようになった。尤も市販の、町で用いるような極く薄いものは、弱くって私達のスキー用にはならないから、それは問題外にしておくことにする。

私達は最初二本指を編んで使っていたが、春などの暖かい日になると、汗ばんだ指と指の触れ合う気持がいやだったので、五本指を編んで使うようになった。しかし、五本指は薄く編めば弱くって冷たいし、厚くすれば指と指の間が拡げられるので、杖がいうことをきかないような気がして困った。なお極く温度の低い時に、その上へ重ねて、皮や布の手袋を嵌める時にも下で嵩張るので不便だった。そのうちに、ふと気が附いてみたら、手が汗ばむような暖かい時には嵌めなければいいのだから、その問題も簡単に片附いて再び二本指になってしまった。なお二本指の長所を並べてみれば、四本の指が一緒になってるから、同じ厚さなら五本指よりも暖かいし、左右の別がないから片方だけ嵌めたいような場合、腰に挾んでるのや、ポケットに入れてあるのを、右、左の別を見分ける必要なく、ただ無造作に取り出してどちらの手へでも嵌められる。この事は、長い斜面をジグザグに登る時、風や、日光で片方の手だけ冷たくなるような場合や、写真器の操作をする時など、予想外に便利なものだと思う。その上左右がないから裏表もない。従って何十パーセントか丈夫な訳でもある。それに編むのも簡単だし、糸も少くって済む。それから上へ重ねて嵌める時も嵩張らず、杖もよく利き、大きさが手に合っていれば嵌める心地もいい。それなのに何故市販の毛糸のスキー手袋には、五本指のものが多いのだろう。偶にはそう思うこともあるが私にはよく分らない。もしかしたら、親切に作られた二本指の嵌心地を知らない人が多いせいかも知れないとも思う。もしそうでもないとすれば、五本指の方が体裁がいいのだろうか。

その手袋も一通り済んだので、序でに、まだ一度も編んだことのなかったセーターも拵えてみようと思ってやり始めた。無論大してスマートなものは出来る筈もないが、既にもう編むということに慣れていたので、沓下のような苦心はいらなかった。着てみては少しずつ改良しながら、

私達のセーターだけ三月程の間に十三枚編んでみた。
私は何かやり始めると凝る質なので、この時も、朝から夜まで編んで、食事その他の時間を除いて、毎日十四時間位編み通していたこともあった。近所の人が時々来てみて、よく肩が凝らないと感心して言うから、私はちっと我田引水かも知れなかったが、それは毎年スキーで身体を鍛えているから大丈夫なのだと言ったら、人の好い土地の人達はまた感心していた。

八島の思出

ポントー 古丹消から十二三キロ南へ行った山の上に、ポントーという湖があった。アイヌ語で「ポン」というのは、「小さい」意味で、「トウ」は「湖」だから、ポントーは、小さい湖とか、小沼とかいうことになるのだろうと思う。
しかし実際は、広い外輪山にゆったりと取囲まれた、美しい大きな湖だった。ここも活火山で、まだ湖の周囲(まわり)には生々しい噴気孔や、温泉の湧いてる所が、幾つもある位で、魚も棲めず、その水は、人間にも無論飲めなかった。湖水の南側に、半島のように突き出た古い火口丘があって、その懐に抱かれてもう一つ小さい湖があった。多分、大きい方は火口原湖で、この方は火口湖だろうと思った。ポントーという地名は、本当はこの小さい湖の方から出たものだろうと思う。
この岸に、さびれた感じのする、硫黄の精錬所があって、十人程の人が、静かに働いていた。

でも小さな建物の前には、ビヤ樽のような恰好をした、派手な真黄色の硫黄が、沢山並べてあった。何でも、この小さい方の瀏の底から、土砂を汲み上げて、それを精錬して硫黄を製るのだという話だった。

何年か前のこと、この土砂を汲んでいた人夫が、過まって舟から落ちたので、大騒ぎをして引上げてみたら、もう骨ばかりになっていたというような、凄い話もきいた。でも見た所、それ程恐ろしげな様子もなく、小舟が一艘だけ出ていて、みんな鼻歌を唄いながら呑気そうに仕事をしていた。

この鑛山も、昔は非常に盛んだったこともあったとかで、まだ、そここに、赤錆びになった金物や、焼芋屋の釜みたいな、もっともっと大きいのがいくつも捨てられたままになっていた。その感じが、木のない辺りの景色と一緒になって、甚く荒廃した姿に見えた。

でも一番盛んだった頃には、ここから程遠くない山の中途に、女の居た茶屋料理屋のようなものまであったという。そう言われてみれば、ここへ来る道傍に、慥かに、沢山家のあったらしい敷地があって、叢の間に、朽ち果てた材木が、もう土になりかけていたのを見た。

お上さん　番屋（働いてる人達の泊ってる家のことで、海岸の漁場等で、大勢人夫の泊ってる家のこともいう）へ行ってみたら、元気そうな若いお上さんと、その人の子供らしいのが二人いた。下の子は二つ位でもあったろうか、きっと、這い廻って危いからかも知れないが、御醤油の空樽の中へ入れられて、戸口の脇の日向ぼっこに、帽子も被せられずにおかれてあった。見ていると、子供は時々、ふらふらと立ち上っていたが、立上る度に樽が転がりそうに揺れた。もしもその樽が転べば、その辺りには大きな石が沢山あったので、そのうちのどれかに頭を打ちつけそ

うに思われた。子供が立上る度に、私の妻は「あっ」と言って、手を出しかけた。だがそのお上さんは、見ても別に気にもかからない様子で、私達の連れの村の人と愛想よく話していた。
そのうちに、家の後の方で、突然、子供の癇高い泣き声がした。それがただならない調子だったので、流石のお上さんも駈出して行った。私達が驚いて顔を見合せていると、お上さんは、一番兄らしい四つか五つ位の子供を、小脇に抱えて入って来た。子供は抱かれたまま、お腹の辺まで丸出しにして、手も足も、ばたばたさせながら泣き続けていた。お上さんは小言をいって聞りながら、子供を上り口の低い床の席の上へ、横に寝かせた。見るとその子の左足の脛に、かなり大きな、火傷の生々しい跡があった。私はぞっとして、自分のお尻がムズムズしてきた。妻は一目見て私の後へ隠れるように引込んでしまった。お上さんは奥の方へ行って、暗い棚から、煤った木の小箱を下して来て、真赤な色の膏薬らしいものを出して、泣くのも構わず無造作に疵へ塗り附けて、まだ泣いてる子供に、大きな声でもう一度小言をいった。子供は泣き止んだが、でもまだ鼻を啜り上げながら起きて、向側の板壁の脇へ行くと、両足を投げ出して腰を下した。そして涙に潤んだ目で、珍客の私達一行の顔を順々に見廻していた。妻がリュックからドロップスを出して、三人の子供に分けてやった。
それで一先ず落着いたが、私は、こんどは樽の子供がひっくり返る番ではないかと思って、そこにいる間中気が気でなかった。その若いお上さんは、日に焼けて色こそ黒かったが、きりっと引締った、整ったいい顔をしていた。
暫くはみんなして話していたが、お上さんは一追い行ってくると言って、表へ出て行ったが、馬を連れて来て、小屋の前にあった鈍重な感じのする馬車に繋いだ。それから精錬所の前へ行っ

て、そこにあるビヤ樽の様な硫黄を十ばかり車へ積むと、厳重に縄で縛り、それに席をかけた。そして大きい子供を二人連れて行って、その上へ坐らせておいて、また帰って来て、樽の中の子供を出して、自分の背中へ上げて紐でおんぶした。それから、壁にかけてあった大きな鋸と鉈を持ち出すと、私達に、一寸浜へ行ってくるからと挨拶して、馬車を追って出かけて行った。

そこから一里程下の浜まで、その硫黄を運んで行って、帰りには、又米や味噌等の食料品を馬車に積んで、しかも途中の山で薪を採って来るのだという。それから家へ帰れば、すぐ夕餉の仕度に取掛るのだろう。その上三人の子供を守りして育てて行くのだから、驚歎のほかないと思った。私は、そのお上さんの健気な、きびきびした動作を見送って、何となく気の毒なような気もしたし、また何にか、敬愛の念が湧いてくるのを覚えた。何でもその女の人の亭主というのは、仕事よりもお酒の方が好きな、余り評判のよくない男だと聞いて一層その感を深くした。

板前　そこを出て少し行くと、一寸した叢の蔭に、形も大きさも円錐形のテントそっくりな席の小屋があった。その屋根の突端は、器用に席が折り曲げられて、煙出しになっていたし、出入口にも、戸の代りに席が下げられる様になっていた。側へ行って中を覗いてみると、半分は席敷の床になって、半分は土間になっていたが、意外にも、小屋の中は実に綺麗に掃除がしてあって、塵一つ止めないという感じだった。聞けばこの小屋の主は、お爺さんの一人住いなのだそうだが、この人は昔、大阪で板前をしていたことがあるという話だった。私はそれを聞いて、小屋の掃除がよく行き届いている点なども、道理でと頷けるような気がした。そう言えば、あの汚い番屋の建物の中にほかの人夫達と一緒に居ることが出来ないで、一人で席のテントにいる訳も解った。そして、こんな生活に這入っても、まだそういう神経が残って、働いていることは面白い

と思った。大阪の板前と、千島の硫黄礦山の人夫、ここまで流れてくる迄には、嘸波瀾の多い生活を通って来たことだろうと想像されて、会って話してみたい様な気もしたが、丁度仕事に行っていたので、止めにして、その小屋の写真だけ撮って帰ることにした。

私は帰りの山道を下りながらも、この人達の生活のことが、交る交る思出されてならなかった。

菊地爺　私達が古丹消へ来た時、最初に住んでいた海辺の小屋に、この春頃から、一人の老人が住むようになった。もう年は八十に近く、すっかり老耄れてしまって、目も碌に見えないようなお爺さんで、名は菊地と云った。

この小屋は元来、伊東さんのところでこの菊地爺の老後を養ってやる為に、古材料を集めて拵えたものだった。菊地爺は、昔、伊東さんが漁場をやっていた時分、その漁場で働いていた事があった男で、今でこそ、見る影もなく尾羽打枯らして、惨めな姿になっているが、でも骨組はがっちりとしていて、背も高く、昔は嘸、力自慢な働き者であったろうことが窺われる。顔、容も必ずしも賤しからず、鼻の高い整った顔附の男だった。

島には、今でもまだ、時々この種の老人がいるそうだ。つまり、若い血気盛りの間は、よく稼ぎよく使い、全く景気のいい、渡り鳥みたいな生活を続けていただけで、煩わしい家庭など持とうとはせず、従って、老後の為の何の備えも考えようとしなかった人達の、当然の末路なのだと云う。菊地爺も、そうした人間の代表的な一人なのだが、それでも爺は、愛すべき性質を持っていて、自分が愈〻老境に入ったと気が附いた時、最後に働いて得た金の何十金かを、この村の或る雑貨屋へ預けて、俺がいまに死んだ時の必要な費用に当ててくれる様に、と頼んでおいたそう

だ。そうしてその後、兎も角も、老いの身の自力で働いて、どうにか喰べられる間は、そっちこっちの漁場などで、老人に出来る仕事を引受けて、自活して来たのだった。だが最近は、愈々それも出来なくなったので、元の主人の伊東さんの所へ引取られて来て、全くの餘生を、つまり、静かに死を待つばかりの生活とは言えない、ほんのただ命を長らえているというだけの生き方をしているのであった。きっと言葉でもよく通じて、ゆっくりと、この永い生活の思い出咄が聞けたら、嘸色々な珍しいことが多いのだろうと思った。

何時か、私達が散歩の帰りにその小屋の前を通りかかると、丁度、表に出ていたので、立話したことがあったが、それから段々懇意になって、その後は散歩の途中、時々声をかけてみるようになった。暫くしてから、誰かに、爺はお茶がとても好きだと聞いたものだから、妻が、小さい罐に入れて、家にあった御茶を持って行ってやったことがあった。そうしたら、とても喜んで、それこそ妻が呆気にとられてしまう程、不自由な目に涙を溜めて有難がっていたそうだ。お茶も有難かったのかも知れないが、きっと人の厚意が身に沁みて嬉しかったのだろうと思う。それからは、私達も煮たものや、餘計にあるもので爺の口に合いそうなものがあると、時々持って行ってやるようになった。ウドンも好きだと聞いたので、「今日は少し餘計に茹でて、爺の所へも持って行ってやろうか」などと言うこともあった。

伊東さんとこは勿論だが、村の人もみんな昔馴染らしく、親切に世話をしてやっていた。親達にでも言われるのか、青年が二三人集まって、よく小屋の前で薪を割ってやってるのを見掛けることがあった。でもお天気のいい日などは、入口の蓆の上に蹲みこんで日向ぼっこをしながら、手探りで鋸の目を摺っていたこともあったし、その鋸で、自分で薪を切っていたこともあった。

お勝手の水等は、よく近所の娘やお上さんが汲んでやっているのを見た。そんな時は、爺は何時も人懐っこい様子をして、丁寧に御礼を言っていた。

それでも、この菊地爺は素直な質だったので、みんなに大事にされていたが、去年まで同じようにして生きていた、隣村の或る老人は、生来の頑固さが、年寄って身体の自由が利かなくなってしまってもまだ直らないで、村の人達とも遂に親しむことが出来ず、近所の子供達にまで馬鹿にされていた。所が或る雪の日の朝、それでも近所の人が、何か食べものを持って老人の小屋へ行ってみたら、前の日に誰かに貰った御飯を、半分食べかけて枕元においたまま、死んで冷たくなっていたそうだ。そしてその御飯にも、死んだ老人の顔の上にも、戸の隙間から吹きこんだ粉雪が、薄く積っていたと云う。その話をニュースとして村の人から聞いた時、私はいろいろな人生があるものだと思った。

菊地爺は、その後段々目がわるくなってきて、私達が行ってもよくよく近くへ行って話しかけでもしないと、気が附かないようになった。それから、一年毎に、老木が枯れるように痩せ細って行ったが、それでも、私達が島を引上げてくる時はまだ生きていた。私達は、赤城山へ帰ってからも、思い出して小包でお茶を送ってやったこともあったが、その翌年の夏、伊東さんからのたよりに、菊地爺もとうとう死んだと書いてあった。

鮭　薄日こそ差していたが、晩秋の或る寒い日だった。私達は伊東さんに誘われて、四五人連れで東沸湖へ遊びに行った。

この湖は、その後、リンドバークがアメリカから飛んで来た時、濃霧のため根室の港へ下りられないで、ここまで引返して来て着水したことがあったが、こんな島の中にあろうとは思えない

程、大きな湖だった。南は太平洋岸に近く、東沸村の裏山から、北はオホーツク海の間近まで、国後島の一番括れたこの辺り一杯に拡がっていた。排水口は、東海岸の方へ流れて、東沸村の真中を通って海へ出ていた。秋になると、無数の鮭の大群が、産卵の為その川を溯って湖水へ入るのだった。湖の西側「マンタロマ」という岸に孵化場があった。ここで、適当な時期に達した鮭を捕えて卵を絞り、人工的に孵化させていた。私達は、この孵化場で、珍しい色々な装置を見せて貰って、それから湖畔へ出てみた。

広い湖の、岸に近い所々に、網が張ってあるらしく、点々と浮木が見えていた。その間を一艘の舟が見巡っていたが、やがてそこの岸へ帰って来た。舟には、いま湖水から上げられたばかりの鮭が、一杯積まれていた。

湖畔にも、孵化場の建物があった。その建物の裏に桟橋の様になって、広い大きな、板張りの床があった。

舟を、その桟橋の脇の棒杙に舫うと、捕って来た鮭を、二三人でその床板の上へ放り上げ始めた。鮭はまだみんな生きていて、投げ出されると床の上でパタパタと跳ね廻っていた。極く近い所のは、まだよかったが、舟の艫の方からは、床まで遠いので力一杯放られた。二三米も空へ投げ上げられた鮭は、フライトで身体をくねらせながら飛んで来て、大きな音を立てて床板の上へ着陸した。そのうちに、放られた拍子に逆立して、そのまま飛んでくるのがあった。それが床板の上へ、頭から真直ぐに着陸する時の、ゴツンというような音を聞いて、私は思わずハッとした。それは、含んだような、何ともいえない、いやな音だった。丁度、子供の頭を拳骨でうんと擲り附けでもするような音だと思った。見ていると、また逆立したのが飛んで来る。それが頭を

下にして、着陸しそうになると、自分の身が竦む思いがした。どう云うモーションで投げられた時、逆立姿勢となるものか、また頭部が尾部よりも重いので自然にそうなり易いのか、随分な割合で、頭からの着陸が多かった。あとからあとからと、頭を前下にして飛んで来る鮭を見て、私はとうとうそこに居たたまれなくなって、逃げ出してしまった。妻もすぐ後から一緒について来たが、建物の蔭まで来て思わず顔を見合せた。

私は何だか暗い気持になってきた。鮭を頭から着陸させることは、あたりまえなこととなのだろう。そして、それを可哀そうだと感じる神経が変態的なのだろうか。私はまた、この割り切れない問題に、ぶつかってしまった。この日のお天気が、風もないのに甚く寒かったばかりでなく、私は落着かない、苛々した気分になってしまって、それが中々直らなかった。

所がいよいよ辞して帰ろうとした時、孵化場の人がこれはスキーの先生へのおみやげだと言って、伊東さんとこの男の背負う荷の中へ、私の分として大きな鮭を入れてくれた。

兎　その翌年の春だった。或る静かな日の夕方、妻と二人でスキーを穿いて、裏の山の方へ散歩に行った。小さい岡を越して向側へ出てみたら、突然足元から白い山兎が一疋飛び出した。私達の方が、兎より高い位置にいたので、私は勢こんで追いかけた。どうせ素早く逃げてしまうだろうと思っていた兎は、案外にのろく、それでも暫くは右に左に逃げ廻っていたが、とうとう二人のスキーに追い詰められて、偃松の根元へ竦みこんでしまった。変だなと思って、近寄って見ると、針金の輪に引っかかって首を絞められながら、小さな木の枝の折れたのを引摺って来ていたのだった。よく見ると、目からも口元からも赤く血が滲み出ていた。そしてもう観念したもののように、私達の前で、静かに目を開いたり閉じたりしていた。私達に追われてここへ立竦むまで

には、どれだけ辛い努力を続けて逃げて来たことかと思うと、顔を背けずにはいられなかった。早く針金から外して、逃がしてやりたい衝動を感じて、私達は、その針金をとってやろうか、どうしようかと相談した。しかし、折角誰かが、わざわざ仕掛けておいたものを、外して逃がすのも変に気が咎めた。私達は、またしても馬鹿なことをしたものだと思いながら、そのまま、そっとおいて逃げるようにしてその場を離れた。

もう散歩どころではなく、また暗い気持になって、後悔しながら小屋へ帰った。すると、その晩、村の青年が山兎の肉を持って来てくれた。いつも貰うと、平気で食べていた肉だったが、この晩のだけは何としても食べる気にはなれなかった。

九　老漁夫の死

写真　この年の夏、長いこと懇意にしていた村の或る老人が、突然訪ねて来て、改まった調子で、「自分が死んだ時、あとで仏壇へ飾る写真がないと困るから、一枚写しておいて貰えまいか」と言った。年こそ六十いくつかだったが、とても元気なお爺さんだった。私は変なことを言って来たな、と思ったが、「まだそんな心配はいらないが、それでもあまり年をとらないうちの方がいいだろうから、写真は写して上げよう」と言うと、大いに喜んで、それではこれから帰って仕度をしなおしてくる、と言って出て行った。その時はもう午後だったので、あまり遅くなると暗くなるから、なるべく早い方がいいと言い添えてやったが、暫らく待ってるうちに、何だか

手間取りそうな気がしたので、散歩がてら、写真器を持って、こっちから出掛けて行ってやった。途中で道が二本になっている所があるので、行違いにならないようにと用心して、妻と別々な道を通って行ってみた。

ところが、何とまだ、お爺さんは大分離れた家の温泉へ行ったっきり、帰って来ないと云うことだった。仕方がないから、私達はその辺の海岸で遊んでいて、お爺さんが温泉から帰って来て悠々と仕度をするのを待って写してやった。それから、二三日して出来た写真を持って行ってやると、とても喜んで、もうこれで何時死んでも安心だと言っていた。

海鼠引き　それから、間もなく海鼠引きの時期に入った。海鼠を捕って来て、茹でて乾し上げると、小指位の大きさの、黒い金米糖の様なものになった。それは、主に支那へ送るのだそうだが、中々いい値段になるので、この時期になると、村の元気な人達はみんな海へ漁に出た。海鼠引きは夕方から出て夜通し働いて朝帰るので、いいお金になる代り相当骨の折れる仕事でもあった。それに、ほんの小さな、一人乗りの笹舟でやる仕事だから、出し風（山から沖へ吹き出す風）の強い時は危険なので、馴れてる土地の人はよく知っていて、そんなお天気には誰も出ようとはしなかった。

それから暫くした或る日の夕方、どうも出し風になりそうな空模様だったので、仕度はしたが、止めようとしてみんな諦めかけていた。そこへ「これ位なら大丈夫だから、出ようじゃないか」と言って、一人一人、誘って廻った老人があった。すると、みんな「あの老人が出るのなら」ということになって、十何人かの人が、日暮れになるのを待って、用意の小舟で出かけて行った。その誘って廻った老人と云うのは、先日私の所へ写真を撮って貰いに来たお爺さんだっ

た。

やがて、賑かに小舟の群が沖へ出て行って、思い思いに仕事を始めると間もなく夜になって、案じられていた出し風が、俄かに強く吹き出して来た。村の人達はみんな心配して浜へ出た。舟で漁をしていた人達もあわてたが、年寄り連中は、あらかじめ用心して岸近くにいたし、若い人達は腕が達者だったので、みんな暗い海の上で名を呼び合いながら、辛うじて危地を脱して帰って来た。しかし、その老人の舟と、ほかに二人、三艘だけは、いくら待ってもついに帰らなかった。でも帰った人のうちには、その老人が元気な掛声をしながら、岸へ向って漕いでるのを見たと言うのもあった。

それから、村中の大騒ぎになって、隣村へ馬を飛ばしたり、よその港へ電報を打ったりして、救援方を頼んだので、やっと明け方になって、五十噸ばかりの発動機船が村の沖へ到着した。それから、すぐ大捜索にかかったのだったが、その結果、いい塩梅に二艘だけは見附けられて救われたが、遠くへ流されてしまったものか、その老人の舟だけは、ついに発見されなかった。そのうちに、又日が暮れてしまったので、その発動機船も諦めて、引上げて帰って行った。

逆風　その晩になって、やっと風が反対に変った。この土地の人はよく「風に貸し借りはない」と言っていたが、この頃の強い出し風の後には、きっと強い逆な風が吹いた。それで次の日は朝からみんな手分けして、附近の浜一帯に注意していると、その日の夕方になって、村から四キロ程東の沖へ老人の舟が吹き寄せられて来たと云う知らせがあった。その浜は岩の浅瀬が遠くまである所だった。岸へ集まった人達は老人の無事を祈りながら、舟の近寄るのを待っていた。

やがて、段々近づくに従って、それが老人の舟であることも、まだ兎も角も老人が舟の上で起きて坐っていることも、見えるようになった。それに元気附いた一同は、大いに喜んで、若い人達は浪と戦って大声で老人の名を呼びながら、岩の浅瀬へ迎えに出て行った。そのうちに愈々近づいて、老人の舟が浅瀬の上へあがって来たと思うと、間もなく、どうしたことか舟はそこで、ぴたりと止まって動かなくなってしまった。みんなが驚いて危ない危ないと騒いでるうちに、大波が来て、あっと云う間に舟は顚覆してしまった。それを見た人達は、夢中になって救助にかかったが、次々と打寄せてくる波の勢に妨げられて思うようには働けず、波の中へ放り出された老人には、無論もう泳ぐ力はなくなっていた。

あわれにも、ここ迄来て舟と離れた老人は、間もなく死体となって、驚き歎いているみんなの前へ打ち寄せられて来たが、その時はもう何とも、策の施しようがなかった。

翌日、波が静まってから舟を出して、老人の舟へ行ってみたら、錨が岩へ引懸っていた。つまり、最初の晩一旦岸へ向って逃げようとして漕いでみたが、力尽きてしまって、もう観念して流されて行きながら、それでも風に流される舟足を遅くする為めに、錨を海へ投げ込んだものと想像される。それから二日目の晩に、風が逆に替った時、それを引揚げておけばよかったものを、忘れたのか、それとも、もうその気力が失くなっていたものか、そのままになってあったのが、運悪く浅瀬の岩にがっちりと引懸って舟を顚覆させる原因になったものらしいと、慣れた人が見て来て話していた。それから、その二日二晩の間、飲まず食わずで荒浪と戦いながら、舟に入ってくる水を、同じ場所に坐って汲み出し続けていたものとみえて、そこの舟底の板が一センチ余りも減っていたという話だった。

家の人の悲歎に暮れるありさまは、真に気の毒だった。しかし、いくら老人でも、ついこの間撮ったばかりの写真が、もう仏壇へ飾られてしまおうとは、私は夢にも思わなかった。
その後、家の人達の話に依ると、漁に出た一日おいて前の晩、よく私の小屋へも手伝いに来てくれたことのある娘の婿になる青年を呼んで、字の読めない老人は、他人との貸借関係や何か一切を、始めて細かく話して後事を託していたということだった。
見方によれば、よく死期を知って用意したともいえるかも知れないが、又、もうこれだけ用意が出来れば、何時死んでもいい、と思ったことが、老人の気持を、度を越えた勇敢さにして、敢えて出し風に舟を出させて死期を早めたともいえると思う。

顔の外れた女　もう秋も末近い頃の静かな朝だった。私達が未だ起き出したばかりの所へ、「お願いしたいことが出来て伺ったのですが」と言って、伊東さんの若主人が這入って来た。その様子が、何時になく落着かない感じだったので、変だと思っていると、その背後から、両手に持った手拭で、自分の顔の下半分を押えながら、女の人がついて来て、私を見ると、そのまま黙って丁寧に頭を下げた。
「どうしました」と私が訊ねると、「この人が今朝起きて大きな欠伸をしたら、顔が外れてしまったのだそうです」と、そう言いながら、伊東さんは、少し目尻へ皺を寄せて、可笑しそうな、困ったような顔をした。
それから話を聴くと、なんでも、始め外れた時は、みんな驚いて家中で大騒ぎをしたが、どうにも手の着けてみようがなかったので、兵隊に行っていた時、看護兵だったと云う、この村の木工場の息子の所へ連れて行った。しかし、そこでも手が着けられないと云うので、青年会長の伊

東さんとこへ連れて来てみたが、矢張り何とも仕様がなかった。そこで、みんなして相談した挙句、兎も角も一度スキーの先生（村の人達は私のことをそう言っていた）の所へ連れて行ってみたら、ということになって、こんどは、伊東さんが私の小屋へ連れて来たのだった。一通りの事情を話したあとで、伊東さんは「何とかならないでしょうか」と言って、一寸情気たような様子をしながら、女の人の方へ振返ってみた。すると女の人は、もう一度、静かに頭を下げた。

私も「さあ」と言ったっきりで、どうしたらいいか、見当も附かなかった。昔から、願の外れるという言葉は何度も聞いた覚えはあるが、実際に見るのはこの日が始めてだった。そう思って見なおすと、一寸想像も及ばない程長い顔になっている。私は人間の顔がこんなにも長くなり得るものかと、意外な気さえした。つくづく見ていると、気の毒でもあるが、可笑しくもある。

その女の人は、私達も知っていた。よく小屋の裏を裸馬に跨って飛ばして行ったりするような、元気な若いお上さんだった。どうしたらいいか分らないが、このまま放ってはおけないと私も思った。何しろ医者といっても、ここから十四五キロも山を越えて行った向う海岸に、アルコール中毒の御老人が一人いるだけだった。それを今から迎えに行って、一日がかりで連れて来てみても、一杯お酒を引っかけてからでないと、手先が震えて、脈もみられないという御医者さんなので、果して、どれ程たよりになるかという気もした。

妻は、最初から、びっくりして私の顔と、伊東さんの顔を、交る交る見ながら、心配そうな様子をしていたが、急に「先生を呼んで来ましょうか」と言い出した。「ああ、それがいい」と私が言うと、妻はすぐ長靴を穿いて駈出して行った。先生というのは、御隣の小学校の先生のことで、何でも実によく知っている、本当に生字引みたいな、島生れの三十余りの元気のいい人だっ

た。
「まあ、兎も角も御掛け下さい」と言って、私は、女の人を壁際の肱掛椅子へ腰掛けさせた。気丈な女なので、穏馴しく、じっと我慢をしてはいたが、上気したような赤い顔をして、あとからあとからと流れて出る涎を手拭に受けたまま、目を瞑って仰向いていた。私は、何とか言って、一言慰めてやり度いと思ったが、何と言っていいか分らないので黙っていた。
先生は、妻と一緒にすぐ飛んで来た。そして小屋へ入ると、いきなり挨拶もしないで女の人の前へ立って、無造作に両手を除けさせて稍〻暫く見ていたが、さすがの先生も、手の附けようがないと云った風だった。
「どうにかなりませんか」と、こんどは私が先生に訊いてみた。「どうも困りましたね、これは」と言っただけで、不断の能弁にも似ず、口数を多くきかなかった。
すると、また「あの本を見たら」と妻が言った。私はすっかり忘れていたが、誰か病気にでもなると、よく私が出して見てる、糸左近著の、素人医学と云ったような題の本があった。私は、そんなことまで出てるだろうかと思いながらも、早速その本を棚から下して目次を繰ってみると、ちゃんと書いてあった。指の押え方から、力の入れ方まで事細かに説明した後で、愈〻顎の入った途端に指を咬まれることがあるから、あらかじめ指に手拭でも巻いて用心してかかるようにという注意までしてあった。
私は、自信は持てなかったが、よく読んで、その通りにしてみようと思った。そして薄いタオルを親指に巻いて、いざ着手しようとしたが、念の為もう一度妻に読んで貰った。それから、女の人の手を除けさせて、いよいよ口の中へ両手の親指を突込む時、何かしら穏かでない気持がし

た。急に生温かい息が手の方へかかって来たので、半ば不気味な半ばわるい様な変な気がした。それでも、思い切って本に書いてある通りにして、手先へ力を入れてみたが、頤は動こうともしなかった。別に声も立てなかったが、女の人の額からは、たらたらと汗が流れた。側で見守っていた三人も、一様に力を入れていたとみえて、みんな溜息をついていた。暫くして私は、もう一度やってみたが、とても駄目だと思った。

傍で先生が、その本を読んでいたから、こんどは一つ替ってやってみてくれるようにと促してみたが、矢張り、尻込みの態で、手を出そうとは言わなかった。私も、全く持て余し気味になって、どうしたものかと思案していた。折角最後の望みをもって、態々ここへ来たのだから、出来ることならなんとかしてやりたかったが、どう考えても私には、手に余る仕事だと思えた。そうしてみんな黙りこくってしまうと、時たま、女の人の吐く息が微かに聞えていた。

見ると女の人は椅子に寄りかかって、ぐったりと、気抜けのしたような恰好で、その無表情な長い顔を両手で押えたまま、天井の方を眺めていた。その痛々しい様子を熟と見ているうちに、私は段々、これは是非とも自分の力で何とかしてやらなければならない、という気がおこってきた。すると、今までただ困ってだけいた自分の気持のうちに、幾分悲壮な、何か荒々しいものの湧き上ってくるのを感じた。そして、「よし、こんどこそは」と思うと、妻に、女の人の側へ寄って、よく見ていてくれるように、と言いながら、私は女の人を椅子ごと抱きかかえるようにして、ぴったりと壁際へ押しつけた。それで、こんどはもう人間の顔だなんとは思わないことにして、両手の親指を遠慮なく深く口の中へ差し入み、それから下の奥歯を押えるようにして、ぐっと頤を掴んだ。それから私は、よく見当をつけておいて、自分の目をつぶってしまった。そして

土方でもする時のような気構えで、強いて自分の神経を押えつけながら、逆モーションのような機勢をつけて、思い切り手首に力を入れてみた。その時なにか手応えがあったような気がした。と思うと、「あっ、入った」と妻が呶鳴った。思わず目を開いてみると、もう普通の丸さに戻った女の人の顔が目の前にあって、その目には、一杯涙が溢れていた。

いい塩梅に指も咬まれないで済んだ。私が静かに口の中から手を引くと、見ていた三人が、やっと笑い出した。女の人も微かに笑った。小屋の中の空気が急に軽くなって来たような気がした。気がついてみると、私もびっしょり汗を掻いていた。

それから、女の人を私達の寝台の上へ連れて行って、静かに寝かせておいたら、十分程ですっかり元気になった。そして何遍も何遍も、繰返して御礼を言いながら喜んで帰って行った。

私は、朝っぱらから何か働いたような気がして朗かだった。そしてもう、すっかり自信がついたような気になって、こんどは誰の顋でも嵌めてやるぞ、と思ったが、私はそれっきり、今に到るまで遂にまだ顋の外れた人に出逢わなかった。

馬を捕る熊　広い山の中へ放牧して馬を飼うことは、この村の人達の重要な仕事の一つだった。その中で、いい馬だけは冬の間、舎飼いをしていたが、大概は牧場に放りっぱなしで、雪が降ってもそのままにしておいた。そうすると、みんなよくしたもので、慣れた馬共は、一米余りも積っている雪を前足で器用に掘って行って、笹を喰べて生活していた。しかし雪の上に雨でも降って、その表面がクラストしてくると、矢張り困るらしかった。そんな時は村の人達が、みんなして見廻りに出掛けて、弱った馬には人参などを食べさせていた。

その見廻りに、今までは輪カンジキを使っていたのだが、スキーで歩くようになってからは時

間も早くなったし、広い範囲に亙って、しかも娯しみながら廻れるようになったと云うので、とてもスキーを便利がっていた。これは全くの実用スキーで、中には、ゲレンデへなんか一度も出て来たことのない中年の女の人が、短かいスキーを穿いて、馬見に山を廻ってるのを見たことがあった。なお隣村には八十三歳の老人で、馬見にスキーを使っているという、元気な人の話も聞いた。しかし、何といっても冬期間には、矢張り時々弱る馬が出て来たようだった。そして偶には、その為に死んだという話を聞いたこともあった。

しかし、馬にとって一番の強敵は、何といっても熊だった。真冬の間は、熊が穴籠りしているから大丈夫だが、春になって、お腹の減った熊が穴から出始めると、そっちこっちで、馬が捕られたという話を聞くようになった。頭のいい熊は地形をよく見ておいて、一方から馬の群を追いまくり、その出て来る方の谷へ先廻りして、待ち伏せするというような、老巧なやり方をするのもあると聞いた。それから、熊は馬を捕っても、それを一遍には食べ切れないので、自分の都合のいい所へ運んでおいて、お腹が減るとまた食べに出てくる。だから、そこを狙って、その近所の叢の蔭か、木の上へ鉄砲を持って隠れていて、出てくる奴を撃つのだという。そうして捕った熊の肉を、私達も時々は貰って食べた。だが、或る年の春、とても利巧な熊が出て来て、その鉄砲を持って待っている所へは決して寄り着かずに、次々と隣の牧場へ渡って歩いたり、また間をおいて、前の牧場へ帰って来たりして、一週間程に五つの馬を捕って新記録を作ったのがあったそうだ。

家にいて、ただ話だけ聞いてると、またかと思う位だったが、一度熊に追いかけられて重傷を負って、辛うじて逃げ帰った馬を実際に見て、成程凄いものだと思ったことがあった。その馬は

逃げる所を、背後からお尻を一撃されたものらしく、お勝手で使う渋団扇位の大きさに、あの丈夫な皮が鮮かに剝げて、真赤な肉を表側へ見せてぶら下っていた。私はそれを見てゾッとしたが、当の馬は案外平気で、別に大して痛そうな顔もしないで草を喰べていた。

それから子供の時、私達はよく、熊は死んだものは食べないから、熊に逢って逃げる暇のない時は、死んだ真似をしていれば大丈夫だと、いうような話を聞かされた覚えがあるが、それはどうかと思う。何故といえば、冬、立木の間へ足を挾んで死んだ馬が、春になって腐りかけていたのを食べた熊があるという話を聞いたことがある。だから、うっかりその話を信用して死んだ真似でもしていれば、そんな熊なら、これは手数がかからないでいいと思って、大いに喜ぶかも知れない。

この島にいるのは、大部分羆だという話だったが、少しは黒いのもいるし、稀には、カムチャッカ辺りから流氷に乗って漂着したらしい、白いのもいることがあるそうだ。しかし、何れも余り追廻されたりしないせいか、みんな穏馴しくって、馬こそ捕るけれども、人に危害を加えたという話は殆どきかなかった。

アイヌと熊　私達が島にいた時、たった一遍、隣村のアイヌが、それも一度、鉄砲で撃った熊を追いかけながら、あんまり馴れ過ぎていた為に、瀕死の重傷を負わされたという話があった。

それは、自分で手負いにした熊を追跡して行く途中、熊が逃げて行くと思われる向側の斜面ばかりに気を取られていたので、すぐ前の倒木の下に力尽きて倒れていたのを気づかずに、その木を乗り越えようとして、跨いだ所を、いきなり組み附かれてしまった。不意を打たれて、不利な態勢におかれながらも、勇敢なアイヌは、渾身の勇を振って格闘したが、ついに片手片

足は原形のなくなるまで咬み砕かれ、顔の半面は引裂かれ、片目を掘り出されるという大袈裟な重傷を受けたが、幸いそこまでで熊の方が先へ息を引取ってしまったので、危い一命を辛うじて取止めることが出来たという。それでもなお気丈なアイヌは、熊の身体の下から抜け出して、山の麓まで這い下りた所を発見されて、助けられたのだそうだ。その後、そのアイヌは、無論片輪にはなったが、追々と疵も癒って、元気になっているという話を聞いた。暫くしてから、村の人が、そのアイヌのお上さんに会った時、その話が出たら、「あれは熊が間違ってやったのだ。熊がアイヌと知って、そんなことをする筈はない」と言っていたそうだ。私はそれを聞いて、アイヌと熊には、何か血縁の継がりでもあって、一種特別の親しみがあるような気がして面白いと思った。

桃太郎のおばさん　島の熊の話にはこんなのもあった。それは名からして愉快だが、この村に桃太郎さんという人がいた。しかし愉快なのは当の本人ではなくて、そのお上さんだった。当時四十位の年恰好だったと思うが、何とも朗かな、元気のいい働き手だった。

何でも、旦那さんの身体が弱かったので、家中の仕事を、何もかも一人で引受けているという様子だった。夏の間、このおばさんの主な仕事は、気候のいい古丹消で出来た野菜物を馬の背につけて、東海岸の罐詰工場のある村へ運んで行き、帰りには向うの海岸で捕れた魚や、貝や蟹等を持って来て、この村の人に売ることだった。だからその時の商売の都合で、帰りの山道で日が暮れてしまうこともあったし、時々は熊に遭うこともあったという。

或る年の秋、何時ものように、荷を附けた馬を追って、朝早く古丹消を出て暫く山を行くと、背後の藪から、ガサガサと何か出て来たものがある。振返って見ると、それは熊だった。驚いて

逃げて帰ろうと思ったが、逃げたい方に熊がいるので、いやでも遠い先の村の方へ行くよりほかなかった。恐る恐る振返って見ると、熊は道へ出てのそのそと、あとをついて来ている。駈け出してみた所で、十キロも十五キロも走れはしないし、向うは空身なのだから、追いかけられたらとても敵わない。仕方がないから立竦みそうな馬を自分の身体で庇いながら、急ぎ足で逃げて行くと、熊は何時まで経っても、すぐ後について歩いて来ていた。そんなにして暫く行くうちに、熊もどうやらすぐには躍りかかって来そうな様子もないので、怖いながらも幾らかずつ落着きが出て来た。しかし黙り続けていてはかえって変なので、背後を振返り振返り、熊にお説教を始め出した。お前はこの馬が欲しいのだろうが、いまこの馬をお前にやってしまうと、私も桃太郎さんも明日から御飯が食べられなくなる。だから欲しいだろうけれども、お腹が減っていたら、帰って兎でも雉でも捕って食べてくれ、と言った。しかし熊は、それが聞えたのか、聞えないのか、黙ったまま相変らずついて来る。それでこんどは、馬の背中の荷の間から唐黍を二三本抜き出して、足下において、それじゃ唐黍をやるから、これでも食べて帰ってくれと言うと、熊は一寸首を下げて、匂を嗅いでいたが、暫くするとそのままにして、急ぎ足で追いかけて来た。こんどはもう駄目かと思ったから、近くへ来た時、どうか助けてくれと言って、後じさりしながら手を合せて頼んだ。しかし、それでも熊は、帰りもしなければ、飛びかかりもしないで、おばさんの一人芝居を見ながら、とうとう十キロ余りの道を東海岸の見える辺りまでついてきた。そして愈々村が近くなると、穏馴しく帰って行ったので、やっと命拾いの思いをした。「送り狼」という話は聞いたが、身をもって「送り熊」を体験したのは始めてだと言った。

こう書いてくると、熊の話としては、如何にも呆気ないものになってしまうが、当の本人か

ら、身振り可笑しくこの話を聞くと、よく感じが出ていて、中々面白かった。
だが大体、この島の熊は、みんな人に対してはこの熊のように穏馴しいのが多いようだった。
なお私達が山道を歩いてると、坂道の泥濘（ぬかるみ）に、自分達の被ってる帽子よりも大きいような爪を立てて滑った熊の足跡を見かけることがあったが、余り気持のいいものではなかった。それから秋の夕方、近道をして村へ帰ろうと思って、山を越して藪の中へ這入って行ったら、熊笹の間に、たった今、したばかりの湯気の立ちそうな熊の糞を見たこともあった。村の人達の話によると、そんな時は人間の方からは見えないが、熊の方ではちゃんと附近の根松の蔭辺りで、私達を見守っているのだと言っていた。

狐　これは熊ではないが、如何にものんびりとした、千島らしい狐の話を聞いたことがあった。場所は、この村から二キロ余り先の丸山の裏で、ウエンシリという家の二三軒しかない浜辺の部落から、少し山へ這入った坂の上だった。その辺りに、何時も悪い狐がいて、通る人を化かすといわれていた。

話の主は、何時もよく顔を合わせる頓狂なお爺さんだった。その人が、まだもう少し若い元気のいい頃、或る日の夕方、ウエンシリから、漁で捕れた鮭を二三本背負って帰って来て、薄暗くなる頃に、その坂へさしかかった。ふと向うを見ると、坂の上に狐が一匹いる。お爺さんは「この野郎、こいつが何時も人を化かす狐だな。よし、今日は一つ俺の方から化かしてやるぞ。」そう考えると、何気ない顔で坂を登り詰めて、狐の側へ行くと、いきなり踊り出して見せてやった。
すると狐は、始めびっくりしたような顔をして、爺さんの踊りを見ていたが、やがて、釣り込まれて狐も踊り出した。してやったり、と悦んだお爺さんは、元々踊りが好きだったので、得意

になって、もっともっと狐を馬鹿にしてやるつもりで、一生懸命踊り続けていた。
所が家の方では、晩に帰る筈の爺さんが、朝になってもまだ来ないので、心配して迎えに行ってみた。そしたらまだお爺さんは、ウエンシリの坂の上で、へとへとになって一人で踊っていたという。声をかけても返事もしないので、背中を一つどやし附けてやると、やっと気がついたが、道の脇にはもう、鮭を縛って来た蓆切れと、縄だけしか無かったそうだ。
内地でも、狐に騙まされた話は色々と聞いたが、本人をよく知っているせいか、これなどは島らしい朗かな話だと思った。

十　小屋の火事

ガソリンランプの爆発　もうシーズンも終りに近い四月の初めだった。ゲレンデから帰って夕食を済ませた私は、何時ものように、その日の記録などを書くつもりで、屋根裏の狭い部屋へ上って行った。妻は二人の子供（この前の年の七月に、千春の弟が生れた。こんどは夏だったので、千夏という名にした）と一緒に温泉へ這入っていた。
この島には勿論電燈はなかったので、夜、細かい表などを書くのに不便だったから、面倒な仕事をする時だけ、ガソリンランプを使っていた。そのランプは、台の部分がタンクになっていて、圧搾空気でガソリンを上部へ送り、マントルを白熱させて使用する式のもので、相当に明るかった。

庭に消え残りの雪こそあったが、穏かな春の宵だった。私はいつもするように、そのランプに点火しておいて、机に向って暫く仕事をしていた。すると、それが突然、全く何の予告もなしに、拳銃を打った位の音を立てて爆発した。私はあっと驚いたが、爆発してから五分の一秒位の間しかなかったと思う次の瞬間に、ボンと幅の広い底力のある音がして、狭い部屋中一杯の火になった。机の上のランプからは五六十センチ位の距離にいた私も、全身にガソリンを浴びて火達磨になった。最初に胸の辺りから燃え上る焔で、顔の下が熱かった。咄嗟に身を飜して部屋から逃れ出た私は、燃え上る身体の火を揉み消しながら、梯子から下へ飛び下りた。下りた時はまだ両股の上のズボンから盛んに焔が上っていた。急いでそれを叩き消すと、再び梯子を登って行って部屋を覗いたが、その時はもう眩しくって熱くって、窟の中へ顔を突込んだような気がして、全く手の出しようもなかった。それでも、一足踏み込んでみようとしたが、渦を巻いて吹き出してくる火焔に、忽ち追い返されてしまった。この部屋は、私の一番大事な記録等をおいてあった所だったのに、ついに紙一枚持ち出すことが出来ないでしまった。

私は観念して、再び下へ飛下りると、「火事だよ」と言って妻に注意した。すると、あとで妻が言ったのだが、その「火事だよ」があまり静かな調子だったので、火事は他所の家かと思ったそうだ。だけど最初爆発した時の音も耳に入っていて、変だと思っていた所だったので、窓から覗いてみたら自分の小屋だったものだから、大いに驚いて窓から飛び出し、真裸のまま怯える二人の子供を両脇に抱きかかえて、雪の中を跣で、お隣の学校の住宅へ駈けつけ、泣き叫ぶ子供を預けておいて引返して来た。

私はその間に、ストーブの前に脱ぎ捨ててあった妻や子供達の着物を集めて、庭の安全な所ま

で運び出しておいて、火を消しにかかった。先ず火に近い所の板壁を破って、そこから水を注ぎかけようと思って、有合せの大きな材木を持って来て羽目板を破ろうとしてみた。しかし、非常に細い柱しか使っていない小屋なのだが、風の入らないように特殊な羽目の張り方をしておいたので、少し位なことでは、丈夫でとても毀れなかった。それから、その上の方のガソリンランプの載せてあった机の前のガラス窓を突っついたら、すぐ破れて猛烈な焔が噴き出した。引返して水を汲みに行こうとしたら、もう近所の人も追々と駈けつけて来てくれたので、消す方は一先ずみんなに任せておいて、私はガソリンの罐や、ガソリンコンロのタンク、それから石油罐などの危険物を、裏の窓から順々に出して、ずっと遠方へ運んでは、雪の上へ離れ離れに置いて来た。その頃丁度屋根の一部が燃え抜けたので、離れて見ると、火の光が雪に反射してそこら一面昼のように明るくなっていた。かなりに遠い学校の建物の切妻の屋根が、真黒な空をバックに赤々と浮き出していたのが、チラと目に入った。

火事に湯をかける　帰って来てみたら、みんな近所に水が無いものだから、温泉を汲み出しては火に注いでいた。そのうちに、風呂場の湯を汲み出しきると、庭に埋めてあった温泉のタンクの蓋を開けて、そこからどんどん汲み出していた。燃えている火に熱い湯をかけるのだから、流れ落ちてくるのは、なお熱くなっていて近寄れなかった。

やがて、村の子供達も大勢集まって来た。そして、誰がやり出したのか庭の雪を掘って火の中へ投げつけ始めた。春の雪なのでよく掘れもしたし、掘った雪の容量も多かった。それに数が多いので、これが中々馬鹿に出来なかった。お勝手の食糧棚に集中した所などは、その雪のお蔭で、罐入りの食料品には大分助かったものもあった。厄介なのは、アミールや、アルコール、ア

セトンなどを並べておいた棚で、私もそれまで持出す余裕がなくてそのままにしておいたものだから、そこだけは、湯をかけても、雪を投げつけても、なお頑強に燃え上っていた。

私は夜の空へ、大きく揺れて炎々と燃え上る焔を見て、その唸る音を聴いて、小さな小屋なのに火事は凄いものだと、つくづく思った。そして、今までにだって、火事を見たことはある筈なのに、火事というものに、こんなにも大きな迫力のあるということを、始めて知ったような気がした。

暫くすると、みんなの努力が効を奏して、段々下火になって来た。そうすると、色々な人から見舞の挨拶や、「それでも、甚(ひど)い怪我がなくってようござんした」というような、慰めの言葉を聞いた。気が附いて見ると、この村にこんなに沢山の人がいたのかと、思われる程、庭一杯に集まって来ていた。そしてどの顔もみんな赤く生々としていた。火の方を向くと顔がヒリヒリするので、いくらか火傷したのだなと思った。

私は先刻から、妻の姿が見えないので、もしや度を失って悲しんでいはしないかと心配になったから、大きな声で呼んでみた。そうしたら、風呂場の蔭の方から思いの外朗かな返事をして、足取りも軽く元気よく出て来たので、急に楽な気持になった。子供のことを訊いてみたら、学校の奥さんに預けて来たから心配ないと言っていた。

諦めの気持　入口を覗いて見ると、中に立てかけて並べてあったスキーの、テールだけ、みんな焦げているので惜しいなと思った。一番最初の頃、出がけに、妻の大事にしていたノルゲのスキーが目に附いたので、これだけは勿体ないと思って持出しておいたので、それは無事だった。もっとみんな出しとけばよかったのにと後悔した。それから惜しいと思ったのは、レコードだった。永いことかかって集めたものを、あらまし駄目にしてしまった。しかし不断大事にしていた

割合には、気にならないとも思った。それは一遍に、失ったものの数が多かったので、却って互に打消し合って、或る一つのものだけに愛惜の念が集中して居られなかった為であったかも知れない。たとえばレコードにしても、もしもほかの場合に、大事にしていたシンフォニーなどの中の一枚だけ、過って踏み割りでもしたのなら、嘸もっと惜しんだかも知れないと、そんな気もした。蓄音器は、学校の先生が抱え出してくれたお蔭で、外側は多少いたんだが、機械は大丈夫だった。写真器も最初日に附いて自分で持ち出しといたので、どうやら無事だった。

困ったのは、寝具を全部失ったことだった。着物もその時着ていたもののほか、殆ど焼いてしまった。厚い手編の沓下や手袋も、編み方の試験をしながら拵えたのが溜っていたので、生涯穿いても大丈夫だろうなんて言っていたのが一足も残らなかった。あとで見たら、ストーブの上の乾場に懸けてあって、黒焦げになっていた二人の沓下だけでも十二足あった。

それから一番惜しかったのは、統計や記録の表などだった。スキーやシャンツェの図面やら、沓下や手袋の細かい計算をした帳面や、随分と大勢の人の足の寸法を集めてあった紙挾み等々、殆どみんな燃してしまった。ジャワの南海岸の無人境で描いて来た数百枚のコンテーのスケッチも、原住民に地名を訊きながら画いたその辺の地図も、みんな燃えてしまった。

しかし、何もかも、非常に惜しいと思った半面に、満更負け惜しみからばかりでなく、「これでさっぱりした。大いにまた出直そう」というような気持もいくらかはあった。何時かは整理しようと思っていた手紙や書類等も、すっかり火事が始末してくれた結果になった。

なお落着いてから考えてみると、自分の怪我が、よくこれ位で済んだものだと思った。半ガロン入りのランプのタンクに八分目程はガソリンがあったと思う。腰掛けていた左側でランプが破

裂したのに、右側の耳まで火傷していた。眼鏡の御蔭で眼は無事だったが、眉は焼けていたし、髪の毛もかなり焦げた。なおそのほかに、顔にも手にも数カ所の火傷の痕があった。しかし仕合せにその程度で済んだのは運がよかったのだと思う。一番始め逃げ出す時に、何か一寸した故障でもあって、ほんの何秒か、まごついていたら、どんな結果になったか分らなかったと思う。
もう一つ、よく大丈夫だったと思うのは、この小屋には、建坪の小さい割に、二重窓になっていた所もあったので、とても沢山なガラスが使ってあった。それが殆ど全部破れ落ちていた上を、私と妻は、しまいまで跣で駈け廻っていたのに、ちっとも足を怪我しなかったことだった。慥かに踏んで歩いていた筈なのに、このことは今考えても、あり得ない事のような気がする。
私も昼の中は、それでも色々なあと始末などに忙殺されて、あまり火事のことも考えなかったが、夜中に床の中で目を覚ましたりした時は、思出して火の勢の恐しかった事を痛感した。殊に最初一度飛下りて、身体の火を揉み消してから再び梯子を登って見た時の、部屋の中一杯に渦巻いて、生あるもののように燃え拡がって行く火焔の凄まじい形相は、最も深刻な印象になって眼底に焼き附けられて残った。
気づかわれた事は、いたいけな子供達の気持にどんな影響があったかということだったが、四五日の間は流石に怯えていたが、大したこともないらしく、間もなく元通りに直ってしまった。
有難いと思ったのは、村の人達の心からの親切だった。こんなに何もかも無くなってしまったのに、翌日から別に生活に困るようなことはなかった。こん度もまた、伊東さんのところで大概のことはしてくれたし、そのほかの近所の人達も実によく手伝ってくれた。最初の冬一緒に小屋にいて、スキーをしていた文ちゃんと云う娘さんなどはその夜一晩寝ないで、子供達の綿入の着

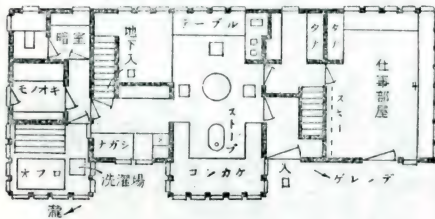
物を縫って、翌朝持って来てくれた。
私達は、その夜は伊東さんの所へ泊り、次の日から、焼け残った小屋の応急修理に着手して、間もなく雨露を凌げるようにだけして、またその小屋へ引越した。そしてすぐ、第二の小屋の設計に取掛った。
失火でもう一つ、どうにも心残りでならないことが出来てしまった。それは、その少し前、私が千島へ来ているということが、何かの新聞に出たことがあった。その記事を読んで、久しく文通の絶えていた、古い昔の友人が、大変丁寧な便りをくれた。その友人というのは随分昔、赤城山で懇意になった人だった。当時は一高の学生で、その後数年間は互にずっと文通していたが、環境にも、心境にも不幸な、然し非常に真面目な、尊敬すべき性格の持主で、私は文通が絶えてしまってからでも常に思い出して忘れることの出来ない人だった。あんまり久しぶりだったので、少し落着いて、スキーの写真でも焼いてから、丁寧な返事を出そうと思っているうちに、火事でその手紙も焼けてなくなったので、住所が分らなくなってしまった。国は奈良県の人だったが、その時の住所は京城だったと思ったから、一度京城の県人会宛に出してみたら返送されて来たので、その次は京城の警察へ二重封筒にして依頼して出してみたが、ついにそれも届かないでしまったらしかった。名は加藤八十一という人だった。便りを貰った時、とりあえず葉書でも出しておけばよかったものをと、今でも思出す度に済まないことをしたと残念でならない。

十一　滝の下の小屋

第二の小屋　第二の小屋場は、焼けた小屋から西へ三百米程行った所の崖の近くで、そのすぐ向うには、小さい岬が突き出ていた。その辺の浜辺には岩石が多く、初めの小屋の時とはまた違った強い浪の音の調子があった。小屋が出来てからそのバルコニーへ出て見ると、附近一帯に何か荒削りな寂しい感じが漲っているように思った。

私はその景色が好きで、よく一人でバルコニーへ出ては眺めていたが、そのうちに、自分は何故こういう所が好きなのだろう、北海の荒海に面したこの小部落は、既に淋しい所であった。それなのに、なおそのうちでも、殊更に淋しいこの荒磯を前にして、新しい小屋場を選んだのは、どう云う気持からだったろうと、よくそう思うことがあった。

兎も角もそうした場所を選んで第二の小屋場もきまった。そこのすぐ裏の崖に、高さ十米程の小さい滝があったので、私達はこの小屋を、滝の下の小屋と呼んだ。

焼けた前の小屋の経験から、こんどは又大分改良して相当綿密な設計をしてみた。用材は国有林から直接払下げて、村の木工場で挽いて貰うことにした。少し非常識な話みたいだが、こんどの小屋の柱は、一寸六分角のものを使う事にした。それを削り上げると、大体一寸五分角になる予定だった。どうして、そんなに柱を細くしたかというと、前の小屋が二寸角の柱だったのに、火事の時、私がいくら毀そうとしても、中々丈夫で毀れなかったから、もっと細くしてみたのだ

った。しかも、こんどは低いながらも、それで二階建にした。その上、そこは海から吹き上げてくる風の強い場所だったが、私は、それで大丈夫もつと思えた。村の人達も、前の小屋を二寸角の柱で建てた時は心配していたが、こんどの一寸五分角の柱は、もう誰も気にしなかった。

千島滝の下の小屋（昭和九年の夏）

やがて、材料も略々集まったので、また久しぶりで大工仕事に没頭した。はじめてみると面白いので、毎日朝早くから、晩は手元の見えなくなるまで精を出して働いた。こんどは日の長い時期でもあったし、よく働いたお蔭で思いのほか仕事もはかどって夏の末にはもう新しい小屋へ引移ることが出来た。建前の時は、村の人達が色々と世話をしながら御手伝いしてくれたが、それ以外は大概自分達の手で拵えてしまった。

こんどの小屋の敷地も、小さい段丘の上で、全くの砂地だった。地均しの時、地下室を作る場所を掘っていたら、砂の中から、先住民族の使用していたらしい黒曜石の鏃や、素焼の壷が幾つか出て来た。壷は小型なものが多くみんな脆くなっていたが、中には無疵のまま出て来たのもあった。私はその、如何にも素朴な感じのする、小さな壷の土を落して弄り廻しながら、これが何百

年位前のものか分らないが、どんな人達が、この中へ何を入れて使ったものだろうかなどと思いながら、つい匂を嗅いでみた。無論、土以外の何の匂もある筈はなかったが、私は何か懐しい気がして来た。その頃でも、この浜の様子や、打寄せる浪の音は、今と余り変ってはいなかったろうが、ここに住んでいた人間の生活様式は、この壷から判断しても、現代とは随分隔りのある、無原始的なものだろうなどと思った。すると、その壷のおいてあった部屋の様子や、そんな人達の毎日の生活まで、色々と想像されるような気がした。そして、矢張り今私達のしているように、毎日ここの浜から知床半島の山の上へ沈んで行く夕日を見ては、明日の天気の判断もしたのであろうと、ついそんなことまで考えた。

阿寒の夢　私達は、裏の崖に懸っている小さい滝から、樋で小屋まで水を引いた。又その続きの岡には温泉が湧いていたので、それを木管で土の中へ埋めて引いて来た。それ等をお風呂にも、お勝手にも使い、なおその餘りをお便所へも利用した。これで私達は嘗て四五年前の夏の夕方、雌阿寒岳の上の野天風呂へ入って夢想した夢が実現した訳だった。

山小屋の詳しい話は、後で纏めて書くつもりだが、相当な苦心を重ねて拵えただけに、この小屋の住心地は中々よかった。小屋が出来上ると、又、村の人達が面白がって遊びに来た。こんどは前の小屋よりも、少し広かったので、近所の女の子が千春達のお守りに来て、よく泊って行った。この小屋の寝室は二階にあった。その寝室から、狭い廊下を越すと、跣のままで出られるバルコニーもあった。そのほかに、まだ上にも下にも狭いながら遊べる場所があったので、千春達も喜んだ。

この小屋の風呂場は前の時よりもなお明るく、ぐるっと大きなガラス窓があったので、半ば野

天風呂の様な感じがあった。湯槽へ這入っていて、自分の足の爪まで明瞭と見える程、晴々とした感じだった。それで隣村から遊びに来ていた娘さん等は、恥かしがって昼間のうちは湯に入ろうとしなかった。

お勝手と、お風呂と、御便所は、最も手数がかかったが、どれにも温泉と水が、ふんだんに使えたので、苦労の仕甲斐もあった。

御便所は、一番景色のいい方へ持って行って、大きな窓をつけた。こんども腰掛式にして、前に大きなテーブルをおき、下は絶え間なく水が流れているようにした。明るくって、気持がよかったので、私は中でよく本を読んだり、図をかいたりしていた。

お勝手も都会のビルディングの中ででもあれば当然のことだろうが、山小屋の炊事場で、レバー一つ動かせば湯も水も出て、しかもそれが惜し気もなく使えるのは、一寸愉快なものだった。

地下室も狭いながら稍々整頓したものであって、野菜物の貯蔵、その他に便利だった。村にはまだこの種のものがなかったので、これもみんな珍しがっていた。

小屋の附近には、山にも浜にも天然の山菜が中々豊富にあった。馬が畑へ入らないように、小屋の周囲五百坪程の場所に柵を作ったが、その中にあるだけのものを勘定してみたら、蕨・蕗・独活などを始め、ぼうふう・三葉・せり・アイヌ山葵等々、十五種類もあった。

それから、小屋のすぐ前に小さいスロープがあったので、私達はそこを手入してゲレンデにした。

冬来る　やがてまた、新しい小屋に初めての冬が来た。でも妻は、二人の子供の世話で滑る時間が減って気の毒だった。しかし、色々と工夫して、出来るだけの暇は無論拵えた。そして、或

る時は背中へ、おんぶして滑り、また或る時は、二階へ寝せつけておいて、前のスロープで練習していた。そんな時、妻は、よく窓の下まで滑って行って、聴き耳を立てていたが、泣き声が聞えないと嬉しそうにして「まだ大丈夫」と言いながら、足音のする筈のない粉雪の上を、スキーで、そっと抜き足をしながら帰ってくるのだった。

また或る時は、近所の女の子や、お婆さん達が、私達の滑っている間、子供達のお守りをしていてくれたこともあったし、暖かい日などは、おんぶして一緒にゲレンデへ来て遊んでいることもあった。

そのうちに、下の子供の方は、おんぶされて滑るのが好きになってしまった。始めは、スピードが出ると、息が出来にくいので泣いたような事もあったが、段々滑るのに馴れてくると、とても喜ぶ様になって、しまいには登る間をもどかしがり、母親の背中にいて登りにも滑ってくれと言ってきかないことがあった。

私達は、シーズン中は勿論、シーズン外でも、癖になっていて、よくジャムプの踏切の、蹴り方の真似をしていた。すると何時かそれを見ていたのだろうが、千春が一人でその真似をしていたことがあった。私達は笑いながらそれを見ていたが、そのうちに踏切の真似だけでは、つまらなくなって来たとみえて、ジャムプの真似をはじめ出した。ジャムプの真似と云っても、まだスキーが穿けないのだから、ただ無闇に高い所から飛び下りて喜ぶ様になった。そして、得意になってやってるうちに、或る時は、炬燵櫓の上から飛んで、向側にあった箱の隅へ額を打ちつけて、少し怪我をして、泣いたこともあったが、それでもまだ止めなかった。私達はそんなことを見ていて、子供は、何でも真似するから、うっかりした事は出来ないと話し合ったことがあった。

千春も、もう何時の間にか五つになっていた。満でいえば未だ三つと何カ月かの時だったが、一緒にスキーを穿いて出たがるので、小さいのを拵えて、ゴム靴へつけてやった。すると、それを穿いて喜んで遊んで居たが、中々滑れるようにはならなかった。私達も、まだ真面目に滑らせるつもりもなかったが、見ていると、如何にも滑りにくそうだったので、皮のスキー靴を取寄せて、稍々大き目なスキーを拵えて穿かせてみた。所が、思いがけなく、スキーと靴が変ったら、急に滑れるようになって来た。

その後、暫くしてから、どんなことになるかと思って、千春を連れて行って、稍々長いスロープの上から滑らせてみた。すると、始め平気でスタートしたが、出てみると坂が急だったので、自分の予想していたより甚だ速くなってしまったのだろう、怖くなって、とうとう泣き出してしまった。しかし、泣いても姿勢の安定は崩れなかった。スキーは段々速くなるし、千春は泣きながら滑って行く。私達は、その後を追いかけて滑りながら、腹を抱えて笑った。そんな状態が暫く続いたがやがて平地へ移る所まで行って、とうとう転んだ。転んでも結局何事もなかったので、自分でもやっと安心が出来たのだろう。起き上って、あんまり私達が笑ってるものだから、自分でも、目に一杯涙を溜めたまま渋々と笑い出した。

しかしこの時から、千春のスキーは割合早く進歩して、何時の間にか廻れるようになり、シーズンの終り頃には、怪し気ながら、左右ともクリスチャニヤらしいものが、続けて出来るようになった。その時撮った千春のクリスチャニヤの写真が、まだ残っているが、たった一枚だけしかないので、もっと写しておけばよかったと思った。でも毛糸の正ちゃん帽を被って、私が拵えた白いルパシカを着て、兎も角も、ホッケ姿勢で曲ってる恰好は、その後、何百枚撮ったか知れな

い千春のクリスチャニヤの写真の第一枚目として、今はいい記念になっている。

十二　膝関節の半脱臼

最初の　臼　この二シーズン程前から、私は、古丹消にも五十米級の、第八シャンツェを作るつもりで、斜面の選定をしていた。所がいい塩梅に、ゲレンデからあまり遠くない所の森林の間に、略々予定の大きさの、いい斜面を発見することが出来た。私は喜んで、又測量をしたり、図をかいたりして、ようやく設計だけは完成した。

しかし、この頃になって、数年前から起り始まっていた私の身体の故障が追々決定的なものとなって来てしまったので、折角の計画も、ついに諦めるよりほかはなくなった。しかもそれはただ、ジャムプが出来ないと云うだけでなく、スキー全部を止めてしまわなければならないような状態のものだった。というのは、私の右膝関節の常習的半脱臼が、この一二年以来、殆ど手の附け様のない程、悪化して来たことだった。

話は大分前に溯るが、一番最初に脱臼したのは、初めて千島へ渡った年の二月で、まだ赤城山にいた時のことだった。ノールウェーの選手達が来るというので、私達は猛練習をしながらも、シャンツェの手入れも、みんな出来るだけ立派にしておこうと思った。そして、その日も練習を済ませてから、家の前の第六シャンツェの着陸斜面に雪を運ばせながら、その指図をしていた。

そのうちに、雪を一杯積んだ紋ちゃんの橇が、私の立っている、すぐ後へ来たので、私は、「そ

の辺へおくように」と言いながら、ひょっとその方へ身体を捻じ向けた。するとその機勢にボキッというかなり大きな音がして、右膝が折れた様な激痛を感じた。そして私は、その場へ立竦んでしまった。私達は何時も癖が附いていて、足でも手でも痛くした次の瞬間、顰面をしながらも「この痛さでは、何日位スキーを休まなければならないか」という自己診断をするのだった。大抵の場合それが捻挫などであると、長い経験で的中するのだったが、この時の自己診断の結果は、最小限度半月は駄目だと思うくらいの痛さだった。辛うじて、みんなの肩へ掴まって、地下室まで連れて下りて貰ったが、痛くって、とても一人では靴を脱ぐことさえ出来なかった。それからやっとのことで畳の上へあがらせて貰うと、私は、壁に寄りかかって両足をそっと伸ばし、痛い膝を押えながら一生懸命考えてみた。それが、滑っていてひどい転がり方でもした時なら兎も角、立っていて後を振り向いた位で、膝をこんなに痛めようとは、どう考えても腑に落ちないことだった。

もう間もなくヘルセット達も来るというのに、何という運のわるい事だろうと思うと、情ないやら癪にさわるやらで、腹立ち紛れに、痛い膝を上からウンウンと押え附けていた。すると、最初に押えつけた時は、とても痛かったのが、幾度もやってるうちに、不思議と痛さが減って来たような気がしてきた。それでそっと足を動かしてみたが、今まで程は痛くない。「変だな」と思って、壁をたよりに、怖わ怖わ立ち上ってみたら、一人で立つことも出来た。「おや」と思って、痛い筈の足を畳へ踏みつけてみても別に何ともない。全く狐に化されたような話だが、歩いてみても、もう大丈夫だった。妻達も再び驚いたり喜んだりしたが、誰にも、どうしたのか、まるで訳が解らなかった。しかし、何れにしても直った事は確かだったから、また、喜んでスキー

を穿いて出て蒼睦斜面の仕事を続けた。

これが、そもそも脱臼の第一回目だったが、それからは、本当に無理をした時だけ、半月に一度か、一週間に一度位、時々脱臼する事があるようになった。だけど外れても、もう最初の時程の劇痛もなかったし、驚きもしなかった。雪の上でスキーを脱いで、膝を押え附けながら自分で直すことも覚えた。

遠因　しかし一体、何でこんな事になったのだろうと、色々古い事まで考えてみたら、やっと、その原因らしいものを思い出した。

それは、更にその六年程前のことだったが、大沼湖の蒼氷の上で、年甲斐もなく、或る大学のスケートの選手達のアイスホッケーの仲間入りをした事があった。その時、何でも三人ばかりで複雑な正面衝突をして、ひどく右膝の外側を氷の上へたたきつけた。どうした機勢だったか、随分無茶な衝突だった。そのうちの一人などは、後頭部を氷で打って、ふらふらになってしまったのもあった。私もその時、暫くは動けなかったが、それでも少し休んでいたら、どうにか一人で家へ帰れる位にはなった。しかしその後半月程は、痛くって、御便所へ行って蹲むのにも困ったが、それでも、その時はその程度で直ってしまった。

思えば、慥かにそれが遠因をなしたものに違いないが、そう気が附くと、これがジャムプの為なら未だ止むを得ないとして、原因がほかの事だったのは如何にも残念な気がした。でも未だその時は、きっと春にでもなって、スキーを止めたら直るものだろう位に思っていたが、案に相違して、癖になって段々頻繁に脱臼するようになってしまった。そして次のシーズン、つまり千島へ行った年の冬あたりは、もう毎日一回位、必ず外れるようになっていた。

所が、それが何時の間にか、毎日四五回ずつになり、十回になり、日と共に悪化して、第二の小屋を建てた頃には、嘘の様な話だが、一日に百回以上は外れる様になっていた。朝目を覚まして、床の中から起きようとすれば外れ、歩き出すとまた外れ、風呂へ這入っても外れた。椅子に腰掛けても外れ、椅子から立っても外れ、どうにも手の附け様がなくなってしまった。しかしまた、何度外れても、もう殆ど痛くもなかったし、頗る簡単に這入りもした。その直し方も、最初の頃とは逆に、膝を深く折り曲げて、体重をかけただけで入るようになった。スキーで緩い斜面を滑っている途中、身体がよろけて外れると、そのまま滑走を続けながら、蹲んで直すことも出来る位だった。

始めのうちは、ジャムプもずっと続けていたが、それも段々駄目になってしまった。着陸してから外れるのは、まだそんなに怖くもなかったが、踏切で外れるようになると、実に何とも云えない不安を感じた。踏切って空中へ出た瞬間「外れたな」と思うと、全身の神経が極度に緊張して「この足でどうして着陸しよう」と思うのだった。そして僅か一秒半か二秒位の飛行時間が、五倍にも、十倍にも長く感じた。だが、その緊張のお蔭かも知れないが、二十米や、二十五米の飛距離なら、変な恰好をしながらも、大概は立って行けた。しかし、それも余り度々になると、如何にもその一二秒間程の、不安な気持がいやだったので、ついに飛ぶことを断念してしまった。そうなってからは、仕方がないので、普通のスキーを穿いて、近い山を歩いたり、ゲレンデで楽な曲り方を稽古したりして、自ら慰めていたが、丁度妻も、二人の子供の世話で思う程滑れる暇がなかったし、この頃が、スキーの為に生きて来たような私達の生活の、一番意気銷沈した時代だったと思う。

病院へ　私は千島へ行ってからも、毎年一度か二度は東京へ出ていた。出る時は、こんど行ったら、この膝を、お医者さんに診て貰おうと、何時もそう思うのだが、行けばどうせ「この膝でジャムプをしても宜しい」なんて言われる気づかいはないのだと思うと、つい二の足を踏んでしまうことになっていた。しかし、日に百回以上となっては、遉がにもう兜を脱がざるを得なくなって、とうとう最初の脱臼から六年目の秋、思い切ってお医者さんの所へ行ってみた。この時分は、東京の町で一寸近所へ行くのにも、屢々外れるので、大きな身体をして、人の家の軒先へ近寄っては、一々蹲んで直しながらでなければ歩けないような惨めな姿だった。

　お医者さんは、知人の紹介で斎藤博士にも診て頂き、東大病院の高木先生にも診て頂いた。まだそのほかの、専門の先生にも二人診て頂いた。病院では、縦横のレントゲン写真も撮ってみた。しかしみんな予想通り診る所は同じで、その御意見も大同小異だった。無論誰一人として、滑ってもいいとは言わなかったし、そればかりか、もう年もとっているから、今となっては手術しても望みはない、大事にしないと関節炎になるとまで言われた。私は悲観したが、その時、私がその前の冬、千島の山で、自分で作った木製の人工関節を、ズボンの上から取りつけて、スキーを穿いてる写真を持っていたので、それを出して見せたら、「結局、そんな事でもするよりほか仕方がないだろう。一週間か、十日も入院すれば、どんな形のものを当てていいか、本式に調べてやろう」と言われた。

人工関節　しかしもう秋も遅かったので、そんなことをして時間がかかると、船の都合で島へ帰れなくなる心配があったから、早速その足で懇意な鉄工場へ行って、スキーのバッケンを作る、三ミリの厚さのジェラルミンの板を引張り出して、工場の親父さんと二人で相談しながら、人工

関節を作ってしまった。この工場の親父さんというのは、天才的な実に勘のいい人で、どんなものでも、すぐものの核心を摑むことの出来る珍しい質だった。それで、二人であっさり拵えてしまって、それをズボンの中へ穿き込んでみたら、大分工合がよさそうだったので、お医者さんを紹介してくれた友人に会った時、その話をした。するとまた、是非もう一度行って、その人工関節をお医者さんに見て貰えと勧められたので、また病院へ行ってみた。そしたら、レントゲンで見てくれて、素人の作ったものとしては甚だよく足に合っていると、大変賞められた。余程感心したとみえて、そのお医者さんは、どの工場で拵えたとか、その工場は何処だとか、そんなこと迄訊いていたが、それから親切に、使用に際しての心得など、詳しく注意してくれた。それでもう仕方がないから、今年はこんなことで諦めて、何とか自分で工夫してみようと思って、更に新しいジェラルミンの板を用意して千島へ帰った。

しかし、その折角の人工関節も、結局、大して役には立たなかった。しまいには、却ってそれを取附けていて脱臼すると、そのままでは、元へ直りにくく、一々取ったり附けたりするのが厄介なので、ついに業を煮して止めてしまった。

やがてもうシーズンも近いというのに、滑れるあても附かないし、スキーが出来ないで雪を見てるのも辛いから、いっそ南洋あたりの島へ出掛けて行って、椰子の葉陰にでも小屋を建てて、年中好きな裸で、ゴーガンがタヒチでした様な生活を、私達もしようかなどという相談を、真面目でするようになった。

丸山の奇蹟　そうこうしているうちに、とうとう初雪が降った。それを見て私が、あまり悄気ていたので、妻が慰めるつもりで、二キロ程先の丸山へ、気晴らしに行ってみないかと言い出し

た。こっちはもう、少し焼糞半分で、早速一緒に出かけて行った。そして殊更に道もない、三十五度位の、熊笹の上に雪のかかってる急斜面を歩いて登ったのか、這って登ったのか、みんなして滑って転んだり、擦り落ちたりしながら、長い時間かかって、二百米程の高さの山の頂上まで、やっとのことで辿り着いた。

その日はよく晴れ渡っていて、辺りの眺めも美しかった。じき足下の崖の下から、凄い程青く黒い北洋の海が、驚く程の広さに拡って行って、その水平線の果てには、麓まで白くお化粧された知床半島の山々が斜めに陽を受けて長く横たわっていた。私は写真器を出して、何枚かの景色を撮ったあとで、もうこんな初雪の尾根へ立つことも滅多にないかも知れないと思って、妻と子を並ばせて記念撮影をした。そして、五年前に始めて来て、ここへ登った時のことなどを思い出しながら、何か感傷的な気持になって、写真器を仕舞った。そして立上って、ふと気が附いてみると、何時もとはちっと違った感じで、右膝の関節が確かりしているように思われた。そっと雪の中を、二足三足歩いてみると、どうにか外れないで無事に歩けた。どうした訳だか判らなかったが、私は無性に嬉しかった。「あれ、歩けるよ」と言いながら、歩いて見せたら、妻も不思議がって目を瞠った。私は何だか夢の様な気がした。大きく動くと目が覚めるのではないかと危ぶまれた。私達は山頂の夕陽の景色を見廻しながら、日が傾いて、キリッと引緊まってきたあたりの空気を肌に感じながら、何か奇蹟がおこりつつあるというような気がした。

しかし、そう思ったら正直なもので、俄かに慾が出て来て、登る時の焼糞半分な気持とは、凡そ正反対に、全身の注意力を右膝に集注して、それこそ、腫物に触わる気持と云おうか、薄氷を踏む気持とでも云おうか、一足一足、戦々兢々として馬鹿丁寧に降りて来た。途中で道が滑って

足を取られそうな所へ来ると、子供を背負っている妻に手を引いて貰いながら、虫の這うようにして、しかも傾斜の緩い道を遠廻りして帰って来た。道で人に逢っても、うっかり話なんかしたら途端に油断して外すと大変だと思って用心した程、慎重な歩き方をして来た。小屋へ着いたらもう暗かったが、本当に不思議なことに、帰りは一度も外れなかった。これ位の長さの距離を、一遍も外れないで歩けたことは、この一二年以来、全くないことだった。私も妻も、夢ではないかと喜んだ。それから私達は、交る交る、「不思議だ」、「本当に不思議だ」と云う言葉を、何度繰返したか分らなかった。私は、何にしろ嬉しかった。私は有難くって何かに感謝したいのだが、有難さの尻の持って行き所がなかった。そして私は、結局妻の誠意が、何ごとかを直感して、私を丸山へ誘い出したのではないかというような気がした。妻は智的な所の全然欠けている人間だが、いつも誠意一点張りで、どうかすると、夢で何かを予感したりするような所のある質だった。そういえば、私の母にもそういう所があった。女には、或は智的でない誠意には、何か超自然的と思われるようなものを感じられるアンテナでもあるのだろうかと思った。

それからは妙な努力の日が続いた。「膝の脱臼が癒る」私には本当とは思えないような仕合せだった。だが同時に又、一瞬の油断もならないような心配でもあった。折角ここまで癒って来たのに、もしも風呂場で滑りでもしたら大変だと思った。また眠ってる間に、もしも不注意な恰好をして外したらどうしようと、そんなことまで気になった。

しかし、そうしているうちに、自分でもよく分る程、膝の関節が日に日に確かりして行くのが感じられた。暫くすると追々と自信も出て来て、余り心配もしなくなり、今までは一段ずつ刻んで、やっと足を運んでいた階段も、とんとんと、人並な登り方が出来る様になった。

そのようにして段々と恢復して行って、雪のよくなる頃には、どうやら無事にスキーも穿けるようになった。だがそれでもまだ用心して、雪の悪い時は、なるべく出ないようにしていたし、ジャムプだけは当分やらないことにした。

その後のこと　私が元気になって滑り始めたので、村の人達もみんな不思議がって喜んでくれた。私は、世の中には分らない事も出来るものだと思った。何人かの専門のお医者さんに、レントゲンの写真まで撮って診て貰って、その言うことをきいて大事にしていても、段々悪くなって行ったものが、焼糞半分に、雪の山へ這い上った拍子に直ってしまうとは、どう考えても解らない。しかもそれが、内臓的な抵抗療法の効きそうな、病気ででもあれば兎も角、私達素人には、殆ど物理的とも考えられるような関節の習慣性脱臼等が、権威あるその道のお医者さん達の診断に反して、こんな風に癒ろうとは、これは珍しい例外なのだろうか、それとも時々はあるものだろうか。その後、前に診て頂いたお医者さん達に、一度御報告ながら、将来の注意を伺いに行ってみようと思っているのだが、つい不自由を感じないものだから、未だに億劫にして行かないでいる。

　しかし、これが私の場合は、仕合せに、「何故か分らないが、良くなった」のだからいいけれども、反対に、これが「何故か分らないがわるくなった」ということも、沢山あり得るのだろうと思った。

　また、こんな事も考えられた。私達が雪の急斜面を這い上った丸山の上には、別に神社もないからよかったが、もしも、そこに神社でもあって、そこへお参りでもした後で癒ったとしたら、早速霊験灼(あらた)かな神社ということになるのだろう。また、もしもそれが、偶然に、お呪いでもして

貰ったと云う折だったり、或は、いい加減な民間薬でも勧められて飲むとか、つけるとかした時ででもあったとしたら、また、それぞれな一つの例として、却って人を惑わす様な結果にもなったことであろうとも思った。

そのシーズンも無事に過ごし、その後、再び赤城山へ帰って三シーズンを送り、それからまた乗鞍へ来て、既に四シーズンを滑り暮した。だがいい塩梅に、その間ずっと一度も外れたことはなかった。ジャムプも、もう大きいのはやらないが、千春を相手に、偶には二十米位飛んでみることもあるし、この頃は乗鞍岳の頂上へ、二米二十の重たいスキーを穿き上げて、若い人達と一緒に滑り廻っていられるようにまでなったのだから、略々完全に癒ったとみてもいいだろうと思う。

十三　千島を去る

引上げ準備　夏になってから、私達は子供の教育その他色々な都合で、一時千島を引上げようということになった。

初めて千島へ渡った時、日帰りにするかも知れないつもりで、東海岸の東沸村から、山を越して来てみた古丹消に、私達は、まる六年に餘る月日を送った。顧みると六年間は、ついこの間のような気もしたし、また、随分長い間だったような気もした。でも考えてみると六年と云えば、人生を六十年とみてもその一割に相当する。長いと思う方が本当であったろう。この間には随分

と色々な事があった。二人で渡って来た私達は、今四人となって帰ろうとしている。その間には、生れて初めての火事も体験したし、小屋も二つ建ててみた。土の中から湧いて出る温泉というものの本当の味も沁み沁みと知った。来た時には、浪花節語りと間違えられた村の人達とも懇意になって、親身も及ばない程の世話にもなった。

今ここを去ろうとするに及んで、滑り廻った数々の斜面や、歩いた場所の一つ一つを思い出してみると、何もかも懐しい気がした。波の音にも、風の音にも、この場所だけの音色があるように思えた。私は荷造りをしていながら、うっかりすると過ぎ去った日の出来事を、次から次へと思い起して、ぼんやりと手を休めてるようなことが有勝ちだった。私達は仕度に忙しい暇々には、少しでも都合をつけて散歩に出た。浜へ出ると、毎日見馴れて来た景色の岩石にも、滝にも、牧柵にも心からの御礼を述べて別れを告げたい気持だった。今までは、大して気にも止めていなかった様な風物も、改めて見直すと、みんな生命があるもののような気がしてならなかった。

村の人達も、私達が帰ると聞いて交る交る、干魚のおみやげなどを持って、別れを惜しみに来てくれた。

小屋と別れる　愈々明日は舟に乗り込むという前の日の夕方、荷物一切を馬車で運び出してしまって、私達もその晩は、伊東さんの家へ引上げることにした。

私は最後に残って、空屋のようにガランとした感じの部屋から部屋を、一渡り見て廻ったが、何となく去り難い気持がした。一度締めた戸を開けてバルコニーへ出てみたり、二階の階段を半分下りてから、また登って行って、もう一遍窓の景色を覗いたりした。そうして暫くは躊躇って

いたが、漸く思い直して自分のリュックを背負った。
私は小屋を出て、門を出て、五十米程で振返ってみた。初秋の晴れた日の静かな夕方だった。小屋は、暗い岬の崖を背景に、弱い夕日を斜めに受けて、二階の窓ガラスが二枚だけ西の空を反射して光っていた。穏かに暮れて行く景色の中に、小屋は、しょんぼりと立って私達を見送っているように見えた。
私はそれを見て、どうしても、その僅かな部分かも知れないが、小屋は慥かに生きているという感じがした。そしてあの淋し気な様子は、今私達の遠く去って行くのを悲しんでいる表情に違いないと思った。あれだけ私達が心血を注いで、それこそ根柢から築き上げた小屋だった。どんな隅の方の小さい柱一本にだって、私達の手の触れていないものはない。そうすれば私達の血のどれだけかが、あの小屋の何処かに沁み込んで残っていると考える方が、本当のように思えてきた。
私達は、また何時か、ここへ帰ってくるかも知れない。だが、もう再び来られない方が多いだろう。私はそう思いながら手を上げて、小屋に向ってお別れをした。すると、自然に涙が込み上げて来て小屋の輪郭が、ぼやけてしまった。
私はその後、赤城山の小屋に別れを告げて乗鞍へ移った時でも、自分の生れた家に別れようとした時でさえも、何故かこの時ほど哀傷の感を深く味ったことはなかった。
さらば古丹消　翌九月二日の朝七時頃、私達を乗せた五十噸程の発動機船は、ポンポンと忙しそうな音を立てて船体を揺振りながら、静かに波の上を滑り出した。砂浜まで出て来た大勢の村の人達は、手を振り動かしながら、口々に声を上げて私達を見送ってくれた。その人達の周囲り

には沢山な鳥もいたし、沖の方には鷗も鳴いていた。その声は、六年前に今菊地爺のいる小屋へ入っていて、毎朝聞いた声だった。

お互に手を振っているうちに、岸は刻々と遠ざかって行った。やがて晴れ渡った爽かな朝の光の中に、何もかも溶け込んで、立ってる人の顔の見分けもつかなくなってしまった。

真直ぐに沖へ向っていた船が、大きく西へ進路をかえた。すると、見馴れた村の家も斜面も、静かに、後へ後へと流れて行きはじめた。その流れはのろい動きだったが、一瞬も止まらなかった。

昨夕、惜しい別れを告げて出て来た私達の小屋が今朝は反対の側に朝日を受けて光っていた。其屋根の上には、裏の崖の滝が糸の様に白く垂れ下っていた。だが、それもみんな、やがて岬の岩の陰へ躊躇なく隠れて見えなくなってしまった。

それまで、じっと同じ所に立ちつくしていた私は、やれやれと思った。これから生れ故郷の赤城山へ帰って行くというのに、何故か、知らぬ世界へ放浪の旅にでも出るような気がしてならなかった。

さらば古丹消、六年の長い間、私達の生活を、その懐に暖かく抱いていてくれた寒村古丹消、また　える日が来るかどうか分らないが、みんな仕合せであってくれるようにと思うと、また目頭が熱くなった。

振返ると、妻も感慨深げに黙って立っていた。

お揃いの水兵服を着た子供達だけは、初めて乗った船が珍しいのか、手摺に掴まったまま波を見ながら何か話して、面白そうに遊んでいた。子供達にとっては、本当にこれが初旅であった。

千春は生れてから五年目、千夏は三年目で、初めて今日これから、千島以外の土を踏みに行くのだった。

定価七拾円

昭和三十年九月五日 初版発行
昭和三十一年十二月二十日 再版発行

著作者 猪谷六合雄(いがやくにお)
発行者 角川源義
印刷者 清水與助
長野市大門町南二一

角川文庫
雪に生きる 上巻
全二冊

発行所 東京都千代田区富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
株式会社 角川書店(かどかわしょてん)
電話九段(33)〇二二一(代表)

落丁・乱丁本はお取替え致します

Printed in Japan 柏與印刷・田中製本

角川文庫發刊に際して

角川源義

第二次世界大戰の敗北は、軍事力の敗北であつた以上に、私たちの若い文化力の敗退であつた。私たちの文化が戰爭に對して如何に無力であり、單なるあだ花に過ぎなかつたかを、私たちは身を以て體驗し痛感した。西洋近代文化の攝取にとつて、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言へない。にもかかはらず、近代文化の傳統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して來た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあつた。

一九四五年以來、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを餘儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあつた我が國の文化に秩序と確たる基礎を齎すためには絶好の機會でもある。角川書店は、このやうな祖國の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とを以て出發したが、ここに創立以來の念願を果すべく角川文庫を發刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを檢討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編輯のもとに、廉價に、そして書架にふさはしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかも私たちは徒らに百科全書的な知識のヂレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖國の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の榮ある事業として、今後永久に繼續發展せしめ、學藝と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの讀書子の愛情ある忠言と支持とによつて、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願ふ。

一九四九年五月三日

角川文庫目録（紫帯・緑帯）

日本古典

古事記 武田祐吉譯註
萬葉集 上 附作者別時代順索引 武田祐吉校註 130
萬葉集 下 附初句索引 武田祐吉校註 130
日本靈異記 板橋倫行校註
竹取物語 附現代語譯 中河與一譯註
伊勢物語 附現代語譯 中河與一譯註 70
枕草子 附現代語譯 上下 松浦貞俊譯註
源氏物語 (一)-(十) 池田龜鑑譯註
今昔物語集 本朝世俗部 上下 佐藤謙三校註 各130
歎異鈔 附現代語譯 梅原眞隆譯註 40
徒然草 附現代語譯 今泉忠義譯註 100
好色一代男 附現代語譯 暉峻康隆譯註
好色一代女 附現代語譯 吉井勇譯註 70
好色五人女 附現代語譯 暉峻康隆譯註 70
奥の細道 附現代語譯 潁原退藏・能勢朝次譯註 70
俳句評釋 上下 潁原退藏 各100
芭蕉讀本 潁原退藏 100

現代日本文學

浮雲 二葉亭四迷
にごりえ・十三夜 樋口一葉 岡田八千代校註 40
たけくらべ 他二篇 樋口一葉 岡田八千代校註 40
一葉日記 上下 樋口一葉 和田芳惠編註
風流佛・艶魔傳 幸田露伴 40
雪たたき 他二篇 幸田露伴 40
賴朝・平將門・爲朝 幸田露伴 70
蒲生氏鄉 他二篇 幸田露伴 70
運命 他十三篇 幸田露伴 70
愛 幸田露伴 40
幻談 他三篇 幸田露伴 40
金色夜叉 上下 尾崎紅葉 100 70
高野聖 他一篇 泉鏡花 40
婦系圖 前後 泉鏡花 各70
歌行燈 泉鏡花 40
舞姫・うたかたの記 森鷗外 40
青年・あそび 森鷗外 70
雁・ヰタセクスアリス 森鷗外 70
阿部一族 他三篇 森鷗外 40
山椒大夫・高瀬舟 森鷗外 40
吾輩は猫である 上下 夏目漱石 各70

倫敦塔・幻影の盾 他五篇 夏目漱石
坊つちやん 夏目漱石 40
草枕・二百十日 夏目漱石 70
文鳥・夢十夜・永日小品 夏目漱石
虞美人草 夏目漱石 130
坑夫 夏目漱石 70
三四郎 夏目漱石 70
それから 夏目漱石 100
門 夏目漱石 70
思ひ出す事など 他 夏目漱石
彼岸過迄 夏目漱石 100
行人 夏目漱石 120
こゝろ 夏目漱石 90
硝子戸の中 夏目漱石 40
道草 夏目漱石 100
明暗 上下 夏目漱石 各100
武藏野 國木田獨歩
運命 國木田獨歩 70
修禪寺物語 他三篇 岡本綺堂 40
野菊の墓 他二篇 伊藤左千夫 40
春の潮 他一篇 伊藤左千夫
ふらんす物語 永井荷風 100
あめりか物語 永井荷風 100

書名	著者	定價
腕くらべ・夏すがた	永井荷風	70
つゆのあとさき他	永井荷風	70
ひかげの花・あぢさゐ	永井荷風	40
濹東綺譚	永井荷風	40
浮沈・おもかげ・勳章	永井荷風	70
問はずがたり・來訪者	永井荷風	70
爛	德田秋聲	70
蒲團・幼きもの	田山花袋	40
田舍教師	田山花袋	90
耽溺	岩野泡鳴	40
雲は天才である他	石川啄木	40
煤煙	森田草平	100
千鳥 他十篇	鈴木三重吉	70
桑の實	鈴木三重吉	70
古事記物語	鈴木三重吉	70
菩提樹の蔭 他一篇	中勘助	70
沼のほとり	中勘助	40
しづかな流	中勘助	70
街路樹	中勘助	70
母の死	中勘助	
武州公秘話	谷崎潤一郎	70
刺青・少年 他二篇	谷崎潤一郎	40
お國と五平・恐怖時代	谷崎潤一郎	70

書名	著者	定價
痴人の愛	谷崎潤一郎	100
卍（まんじ）	谷崎潤一郎	70
蓼喰ふ蟲	谷崎潤一郎	70
蘆刈・吉野葛	谷崎潤一郎	
盲目物語・聞書抄	谷崎潤一郎	70
亂菊物語	谷崎潤一郎	100
春琴抄 附春琴抄後語	谷崎潤一郎	40
陰翳禮讃	谷崎潤一郎	70
少將滋幹の母 他	谷崎潤一郎	70
その妹	武者小路實篤	40
幸福者 他一篇	武者小路實篤	70
友情	武者小路實篤	40
愛慾・人間萬歳 他	武者小路實篤	70
人生雜感	武者小路實篤	70
或る男 上下	武者小路實篤	100 70
人類の意志に就て	武者小路實篤	70
若き人々	武者小路實篤	130
井原西鶴	武者小路實篤	40
湖畔の畫商	武者小路實篤	100
愛と死	武者小路實篤	40
幸福な家族	武者小路實篤	70
曉・ある彫刻家 他	武者小路實篤	70
棘まで美し	武者小路實篤	70

書名	著者	定價
若き日の思索	武者小路實篤 本多秋五編	70
若き日の思ひ出	武者小路實篤	70
眞理先生	武者小路實篤	70
馬鹿一	武者小路實篤	100
人生論	武者小路實篤	100
速夫の妹 他十三篇	志賀直哉	70
赤西蠣太 他十四篇	志賀直哉	70
和解 他一篇	志賀直哉	70
清兵衞と瓢簞 他	志賀直哉	70
暗夜行路 前後	志賀直哉	70 100
早春の旅 他十二篇	志賀直哉	70
朝の試寫會 他十七篇	志賀直哉	
蝕まれた友情	志賀直哉	
項羽と劉邦	長與善郎	70
乾隆と香妃	長與善郎	
青銅の基督	長與善郎	40
竹澤先生と云ふ人 前後	長與善郎	各70
野性の誘惑	長與善郎	70
その夜 前後	長與善郎	各130
宣言	有島武郎	40
カインの末裔 他	有島武郎	40
生れ出づる惱み 他	有島武郎	40
或る女 上下	有島武郎	各100

書名	著者	價
惜みなく愛は奪ふ	有島武郎	70
ドモ又の死 他二篇	有島武郎	40
一房の葡萄 他七篇	有島武郎	40
星座	有島武郎	70
潮風	里見弴	40
大道無門	里見弴	100
赤い蠟燭と人魚 他	小川未明	70
注文の多い料理店 他	宮澤賢治	
羅生門・偸盜・地獄變	芥川龍之介	70
邪宗門・奉教人の死	芥川龍之介	70
父歸る・藤十郎の戀	菊池寛	70
學生時代	久米正雄	100
生きとし生けるもの	山本有三	70
西郷と大久保 他	山本有三	70
女人哀詞	山本有三	70
不惜身命 他二篇	山本有三	70
眞實一路	山本有三	130
全譯源氏物語(一)-(九)	與謝野晶子譯各	70
母 上下	鶴見祐輔各	70
大阪	水上瀧太郎	100
大阪の宿	水上瀧太郎	70
倫敦の宿	水上瀧太郎	100
新しき命 他二篇	野上彌生子	70

書名	著者	價
眞知子	野上彌生子	100
若い息子 他二篇	野上彌生子	70
風雨強かるべし 上下	廣津和郎各	70
ひさとその女友達	廣津和郎	40
泉へのみち 上下	廣津和郎各	70
久保田万太郎戲曲集	戶板康二解說	100
市井人・うしろかげ	久保田万太郎	70
淺草風土記	久保田万太郎	
淺草ばなし	久保田万太郎	70
若き日の惱み	藤森成吉	70
渡邊崋山 上下	藤森成吉各	100
何が彼女をさうさせたか 他一篇	藤森成吉	70
受難者	江馬修	130
山の民(一)-(三)	江馬修各	100
大佛開眼	長田秀雄	70
死線を越えて 上下	賀川豐彥各	70
青春の息の痕	倉田百三	70
愛と認識との出發	倉田百三	100
出家とその弟子	ロマン・ロラン序 倉田百三	70
俊寛・布施太子の入山	倉田百三	70
靜思	倉田百三	70
轉身	倉田百三	
超克	倉田百三	100

書名	著者	價
絕對的生活	倉田百三	100
親鸞	倉田百三	70
青春をいかに生きるか	倉田百三	70
無限抱擁	瀧井孝作	70
結婚まで 他八篇	瀧井孝作	70
お絹とその兄弟 他五篇	佐藤春夫	70
性に眼覺める頃 他	室生犀星	70
あにいもうと・山吹	室生犀星	70
伊豆の踊子・禽獸	川端康成	70
淺草紅團	川端康成	70
末期の眼	川端康成	70
雪國	川端康成	
母の初戀・高原	川端康成	70
舞姬	川端康成	100
再婚者 他九篇	川端康成	70
寢園	横光利一	70
藕たき花	中河與一	40
愛戀無限 上下	中河與一各	70
天の夕顏	中河與一	40
香妃・氷る舞踏場	中河與一	40
失樂の庭	中河與一	40
悲劇の季節	中河與一	40
由利旗江	岸田國士	100

書名	著者	定價
鞭を鳴らす女	岸田國士	100
雙面神	岸田國士	100
落葉日記	岸田國士	70
泉	岸田國士	100
善魔	岸田國士	
日本人とは	岸田國士	70
望鄉 上下	池谷信三郎各	70
城のある町にて他	梶井基次郎	70
やがて五月に	岡本かの子	
花は勁し他二篇	岡本かの子	70
金魚撩亂他二篇	岡本かの子	70
巴里祭他二篇	岡本かの子	70
老妓抄他十一篇	岡本かの子	70
生々流轉 前後	岡本かの子各	70
女體開顯 上下	岡本かの子各	70
蟹工船・黨生活者	小林多喜二	70
貧しき人々の群他	宮本百合子	70
伸子 上下	宮本百合子70	100
播州平野	宮本百合子	70
風知草	宮本百合子	40
二つの庭	宮本百合子	100
幸福について	宮本百合子	70
私は生きる	平林たい子	

書名	著者	定價
王將	北條秀司	70
太陽のない街	德永直	70
妻よねむれ	德永直	70
靜かなる山々(一)(二)	德永直 100	70
戲曲 夜明け前	島崎藤村原作 村山知義脚色	70
死んだ海 第一部 第二部	村山知義	70
五稜郭血書	久保榮	70
吉野の盜賊・こはれた瓶	久保榮	70
林檎園日記	久保榮	
歌のわかれ	中野重治	40
空想家とシナリオ	中野重治	40
汽車の罐焚き他	中野重治	
樂しき雜談 1 2	中野重治 窪川鶴次郎編	
聖家族・美しい村	堀辰雄	70
風立ちぬ	堀辰雄	40
かげろふの日記・曠野	堀辰雄	70
菜穗子他三篇	堀辰雄	70
花を持てる女	堀辰雄	
冬の宿	阿部知二	70
北京	阿部知二	70
幸福	阿部知二	70
街 上下	阿部知二各	70
風雪	阿部知二	70

書名	著者	定價
屋根の上のサワン他	井伏鱒二	
集金旅行・さざなみ軍記	井伏鱒二	70
本日休診・遙拜隊長	井伏鱒二	70
青春	伊藤整	70
典子の生きかた	伊藤整	70
津輕の野づら	深田久彌	100
知、と愛 正續	深田久彌各	100
親友	深田久彌	100
鎌倉夫人	深田久彌	40
命ある日	芹澤光治良	70
愛と死の書	芹澤光治良	70
巴里に死す	芹澤光治良	70
孤絶	芹澤光治良	70
離愁	芹澤光治良	
春の谷間	芹澤光治良	70
色ざんげ	宇野千代	70
人生劇場 青春篇 上下	尾崎士郎各	70
人生劇場 愛慾篇 上下	尾崎士郎各	70
人生劇場 殘俠篇 上下	尾崎士郎各	100
人生劇場 風雲篇 上下	尾崎士郎各	100
人生劇場 離愁篇	尾崎士郎	
人生劇場 夢現篇	尾崎士郎	
人生劇場 望鄉篇	尾崎士郎	

書名	著者	定價
七色の花・テニヤンの末日	中山義秀	100
少年死刑囚 他一篇	中山義秀	40
若草	福田清人	100
國木田獨歩	福田清人	70
花ある處女地	福田清人	
泣蟲小僧	林芙美子	40
風琴と魚の町 他	林芙美子	40
うず潮	林芙美子	
晩菊 他六篇	林芙美子	70
茶色の眼	林芙美子	100
浮雲	林芙美子	120
女家 他一篇	林芙美子	70
めし	林芙美子	70
文學的自敍傳	林芙美子	
川歌	林芙美子	
私の東京地圖	佐多稻子	70
素足の娘	佐多稻子	70
妻の座・暦	壺井榮	70
流離の岸	大田洋子	100
女獸心理	野溝七生子	70
次郎物語(一)-(五)	下村湖人	100 90 70 100 100
定本綴方教室	豐田正子	100
粘土のお面 他十二篇	豐田正子	70

書名	著者	定價
石狩川 上下	本庄陸男	各70
松風 他四篇	石塚友二	40
幼年時代 他二篇	丸岡明	70
いのちの初夜 他	北條民雄	70
小島の春	小川正子	
夏の花	原民喜	40
おふくろ 他一篇	田中千禾夫	40
女の一生	森本薫	40
オリンポスの果實	田中英光	40
風ふたたび	永井龍男	70
エデンの海	若杉慧	40
暗い繪・顔の中の赤い月	野間宏	70
日の果て・ルネタの市民兵 他一篇	梅崎春生	70
風浪	木下順二	70
花ざかりの森 他	三島由紀夫	70
愛の渇き	三島由紀夫	70
眞夏の死 他五篇	三島由紀夫	70
サンホセの聖母 他	大岡昇平	70
武藏野夫人	大岡昇平	70
野火	大岡昇平	70
妻・母 他六篇	大岡昇平	70
才子佳人 他二篇	武田泰淳	70
愛のかたち・蝮のすゑ	武田泰淳	70

書名	著者	定價
風媒花	武田泰淳	100
落城	田宮虎彦	70
足摺岬 他六篇	田宮虎彦	70
菊坂 他六篇	田宮虎彦	70
警視總監の笑ひ・本の話	由起しげ子	70
黯い潮 他一篇	井上靖	70
白い牙 他一篇	井上靖	70
戰國無頼 上下	井上靖	各70
壁	安部公房	70
プールサイド小景 他	庄野潤三	
露伴翁座談 正續	鹽谷贊編	各70
戲曲作法	小山内薫	70
新渡戸稻造隨筆集	石井滿編	70
新訂版石川啄木	金田一京助	70
北の人	金田一京助	70
綴方讀本	鈴木三重吉	130
山中雑記	安倍能成	70
生ひたちの記	阿部次郎	100
學生と語る	阿部次郎	70
漱石の思ひ出 前後	夏目鏡子・松岡譲筆録	各70
漱石寅彦三重吉	小宮豐隆	100
漱石襍記	小宮豐隆	70
巴里滯在記	小宮豐隆	

書名	著者	價
新編 溪・山・河	若山牧水	70
心の行方を追うて	田部重治	100
人生の旅	田部重治	70
山と溪谷 隨筆篇	田部重治	70
山と溪谷 紀行篇	田部重治	100
峠と高原	田部重治	70
青葉の旅・落葉の旅	田部重治	100
小鳥の來る日	吉田絃二郎	70
人生遍路	吉田絃二郎	70
わが旅の記	吉田絃二郎	70
生命の河	吉田絃二郎	70
芭蕉・夜船・草の詩	吉田絃二郎	
數學の窓から—科學と人間性—	小倉金之助	70
漱石山房の記	內田百閒	40
忘れ得ぬ人々 正續	辰野隆	70 100
眞實に生きる惱み	生田春月	70
生きゆく道	天野貞祐	40
山の繪本	尾崎喜八	100
碧い遠方	尾崎喜八	100
雲と草原	尾崎喜八	70
スウィス日記	辻村伊助	130
中谷宇吉郎隨筆集 I・II・III		各100
鳥	內田清之助	70

書名	著者	價
幸田文隨筆集	鹽谷贊解說	70
雪に生きる 上下	猪谷六合雄	各70
ブラリひょうたん第二	高田保	各70
剃刀日記	石川桂郎	70
二十歳のエチュード	原口統三	70
近代の小說	田山花袋 吉田精一解說	70
東京の三十年	田山花袋 前田晁補註	100
現代の藝術	上田敏	70
俳句讀本	高濱虛子	70
俳句はかく解しかく味ふ	高濱虛子	40
近代の戀愛觀	厨川白村	70
作家論 (一)(二)	正宗白鳥	各100
自然主義文學盛衰史	正宗白鳥	70
讀書雜記	正宗白鳥	70
唐詩及唐詩人 上下	小杉放庵	各70
一茶と良寛と芭蕉	相馬御風	70
與謝野晶子	兼常清佐	70
明治大正詩史概觀	北原白秋 木俣修補註	70
虛妄の正義	萩原朔太郎	70
戀愛名歌集	萩原朔太郎	70
絕望の逃走	萩原朔太郎	70
世々の歌びと	折口信夫	70

書名	著者	價
明治大正の小說家	日夏耿之介	100
明治大正の詩人	日夏耿之介	100
新編 短歌入門	土屋文明	70
新文章讀本	川端康成	40
若き詩人の手紙	梶井基次郎 淀野隆三編	100
Xへの手紙 他三篇	小林秀雄	40
ドストエフスキイの生活	小林秀雄	70
無常といふ事	小林秀雄	40
私の人生觀	小林秀雄	70
眞贋	小林秀雄	70
日本の小說	生島遼一	70
人間教育	龜井勝一郎	100
わが精神の遍歷	龜井勝一郎	70
愛の無常について	龜井勝一郎	70
現代作家論	龜井勝一郎	70
智識人の肖像	龜井勝一郎	100
宮澤賢治	古谷綱武	70
復興期の精神	花田清輝	70
二十世紀の小說	中村光夫	70
私小說作家論	山本健吉	70
新東京文學散步 正續	野田宇太郎	各100
九州文學散步	野田宇太郎	130

作家論(一)・(二) 福田恒存 各70
明治詩選 矢野峰人編
藤村詩選 神西清編 70
海潮音・牧羊神 上田敏 70
蒲原有明詩集 野田宇太郎編 70
河井醉茗詩集 小牧健夫解說 70
石川啄木詩集 齋藤三郎編 70
中勘助詩集 三好達治解說 70
木下杢太郎詩集 小宮豐隆編
萩原朔太郎詩集 伊藤信吉編
山村暮鳥詩集 藤原定編 70
詩集 道程 復元版 高村光太郎 70
武者小路實篤詩集 龜井勝一郎編 70
金子光晴詩集 村野四郎解說 70
大手拓次詩集 萩原朔太郎解說 宮崎稔編 70
草野心平詩集 土方定一解說 100
中原中也詩集 河上徹太郎解說 70
中野重治詩集 壺井繁治解說
津村信夫詩集 津村秀夫解說 70
北川冬彦詩集 澤村光博 櫻井勝美解說 70
立原道造詩集 中村眞一郎編 70
鮎の歌 立原道造
西脇順三郎詩集 三浦孝之助編

現代詩集 歷程篇 歷程同人編 草野心平解說 100
巴里心景 九鬼周造
啄木歌集 吉井勇解說 70
若山牧水歌集 大悟法利雄編 70
川田順歌集 五島茂解說 70
土屋文明歌集 五味保義解說 70
佐藤佐太郎歌集 宮柊二解說 70
木俣修歌集 久保田正文解說 70
宮柊二歌集 釋迢空解說 70
近藤芳美歌集 高安國世解說
五百句・五百五十句・六百句 高濱虛子 70
碧梧桐句集 喜谷六花 瀧井孝作共編 70
飯田蛇笏句集 山本健吉編 70
富安風生句集 加倉井秋を編 70
水原秋櫻子句集 石田波郷編 70
久保田万太郎句集 安住敦編 70
山口誓子句集 西東三鬼編 70
日野草城句集 安住敦編 70
中村草田男句集 山本健吉解說 70
加藤楸邨句集 山本健吉解說 70
石田波郷句集 山本健吉解說 70
俳句歲時記 春の部 角川書店編 70
俳句歲時記 夏の部 角川書店編 70
俳句歲時記 秋の部 角川書店編 70
俳句歲時記 冬の部 角川書店編 70
俳句歲時記 新年の部 角川書店編

―〈角川小說新書〉―

子供の眼 佐多稻子 130
ぎんの一生 田宮虎彥 120
愛情 石坂洋次郎 110
たまゆら 川端康成 120
青春前期 若杉慧 130
まないたの歌 壺井榮 130
悲しき愛 上下 藤森成吉 各130
サムライの末裔 芹澤光治良 120
靜かなる山々第一部 上・下 德永直 120 100
靜かなる山々第二部 上・下 德永直 各120
春の嵐 井上靖 110
巷塵 石川達三 110
機械のなかの青春 佐多稻子 120
落日 中山義秀 120
東京裁判 立野信之 130
女めくら双紙 舟橋聖一 110
誘蛾燈 廣津和郎 130

角川文庫目錄（赤帶）

外國文學

死よりも强し　モーパッサン　木村庄三郎譯　100
メーゾン・テリエ他三篇　モーパッサン　木村庄三郎譯　40
頸飾り他十三篇　モーパッサン　杉捷夫譯　70
水の上　モーパッサン　木村庄三郎譯
嘆きのテレーズ　ゾラ　大西克和譯　100
居酒屋 上下　ゾラ　齋藤一寛譯
ナナ 上下　ゾラ　山口年臣譯　各100
風車小屋便り　ドーデ　大西克和譯
プチ・ショーズ 前　ドーデ　八木さわ子譯　70
アルルの女　ドーデ　加藤道夫譯　40
アルプスのタルタラン　ドーデ　祖川孝譯　70
サフォー　ドーデ　桃井京次譯　100
川船物語　ドーデ　櫻田佐譯　40
一登山家の思ひ出　ジャヴェル　尾崎喜八譯　100
秋の日本　ピエール・ロチ　村上・吉氷譯　100
舞姫タイス　アナトール・フランス　岡野馨譯　70
赤い百合　アナトール・フランス　石川淳譯
青鬚の七人の妻　アナトール・フランス　長塚隆二譯　70
三人の乙女　フランシス・ジャム　市原豐太譯　70

野うさぎ物語　フランシス・ジャム　安東次男譯　40
パリュウド　アンドレ・ジイド　堀口大學譯　40
地上の糧　アンドレ・ジイド　堀口大學譯　70
鎖をはなれたプロメテ　アンドレ・ジイド　新庄嘉章譯　40
狹き門　アンドレ・ジイド　淀野隆三譯　70
背德者　アンドレ・ジイド　淀野隆三譯
法王廳の抜穴　アンドレ・ジイド　太田咲太郎譯　100
田園交響樂　アンドレ・ジイド　今日出海譯　40
一粒の麥もし死なずば 上下　アンドレ・ジイド　根津憲三譯　各70
贋金つくり 上下　アンドレ・ジイド　鈴木健郎譯　100　70
贋金つくりの日記　アンドレ・ジイド　鈴木健郎譯　40
コンゴ紀行　アンドレ・ジイド　根津憲三譯
女の學校・ロベール　アンドレ・ジイド　堀口大學譯　70
地獄　アンリ・バルビュス　秋山晴夫譯　100
砲火 上下　アンリ・バルビュス　秋山晴夫譯　各70
クラルテ　アンリ・バルビュス　秋山晴夫譯
孤兒マリー　オードウー　河合亨譯
マリーの仕事場　オードウー　堀口大學譯　100
街から風車場へ　オードウー　堀口大學譯

阿蘭陀組曲・北方の歌　デュアメル　尾崎喜八譯　40
肉體の惡魔 他二篇　レーモン・ラディゲ　江口清譯　70
ドルヂェル伯の舞踏會　レーモン・ラディゲ　堀口大學譯　70
セシル夫人の戀　エドモン・ジャルー　堀口大學譯　70
ビュビュ・ド・モンパルナッス　フィリップ　井上勇譯　70
ジャン・クリストフ(一)　ロマン・ロラン　村上菊一郎譯
愛と死の戯れ　ロマン・ロラン　高橋邦太郎譯
トルストイの生涯　ロマン・ロラン　吉氷清譯
ユーパリノス　ヴァレリー　吉田秀和譯
ヴァレリー文學論　堀口大學譯　40
モーヌの大將　アラン・フルニエ　水谷謙三譯　100
商船テナシチイ　ヴィルドラック　高橋邦太郎譯　40
北ホテル　ウジェーヌ・ダビ　岩田豐雄譯　70
山師トマ　ジャン・コクトー　河盛好藏譯　40
怖るべき子供たち　ジャン・コクトー　東鄕青兒譯　70
阿片　ジャン・コクトー　堀口大學譯　80
青い麥　コレット　鈴木健郎譯　50
晝顏　ケッセル　櫻井成夫譯　70
火の河　モーリヤック　秋山晴夫譯　40

角川文庫整理番号
帯色変更について

今まで発行順に整理番号をつけてまいりましたが、このたび、検索・整理にいっそう便利なように、著者別の新整理番号に改めました。
また同時に、今までの紫色帯（日本古典）を黄色帯に、青色帯（思想・科学・芸術他）を白色帯に変更いたしました。ただし、緑色帯（現代日本文学）、赤色帯（外国文学）は、今までと同じです。

¥ 70